
仁義なき妹【改訂版】

ゲレゲレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仁義なき妹【改訂版】

【Nコード】

N9403W

【作者名】

ゲレゲレ

【あらすじ】

———無茶も通日も、私の愛の前では“ただの言葉”———

兄以外の異性は眼中に無い……むしろ世界の汚物とも考えている桐嶋家の愚昧……桐嶋美夏、高校一年生。

この物語は、そんな困った思想の持ち主である人物にスポットを当てた。学園ラブ？ コメディィー？ である。

※この小説は『ブラコンとツンデレと』からタイトルを『仁義なき』

妹』に変えたものの改訂版です。

おおよその登場人物には、あまり変化はありませんが。彼らが身を置いている環境がガラリと変わっています。

なので改訂前よりも大分話しが変わってしまうと思います。

改訂前より読んで頂いている数少ない方々には不快な思いをさせてしまう可能性もありますが、どうぞご了承下さい、お願いします。

設定（まだネタバレ無し）（前書き）

読んで頂く前に、大まかな設定です。

まだネタバレとかは御座いませので、安心してください。

設定（まだネタバレ無し）

・学園都市

第一区から第十三区まである、小・中・高・大と様々な学校・学園が存在している一つの都市。

基本的に、そこに住んでいる住民は特に学生だけだとか、学校の関係者だけという訳ではなく。外食の店舗を構えている者だったり会社に勤めている者だったり、そこら辺の街と変わりの無い一般人もいる。

しかし、学園都市と呼ばれるだけあって、学生や学校関係者の数が圧倒的に多いのも事実。

所によつては、大学生などが研究などのために開いている店もあるぐらい。

また、この学園都市の区分けには特徴……というより、俗称の様なものがある。

第一区から第三区までを“才能の区画”と称し。

第四区から第五区までを“品格の区画”と称し。

第六区から第十区までを“勤勉の区画”と称し。

残り第十一区から第十三区までを“未知の区画”と称している。

“才能の区画”はスポーツや芸術、または勉学でも一芸に秀でたものだけが入れる区画と呼ばれ、その中にはプロの世界で活躍する者だったりだとか、芸能の世界、遥か海の向こうの海外でも活躍出来る者だったり、非常に多種多様な才能たちが溢れかえっている事から、そう呼ばれている。

“品格の区画”とは、基本にお嬢様だとかお坊ちゃまだとか、はたまた御曹司といった上流階級の親を持つ者達が集まる区画で。学校のカリキュラムでは通常の基礎知識だけではなくマナー講座だったり、彼らの将来にとっては必要な学問などが組み込まれている。

また、この区画には共学の学校または学園は一つも無く。その全てが男子校だったり女子高だったりといった、男女を分ける形をとられている。これは、将来の結婚相手を選ぶ際に、他の家の娘・息子に手を出してしまい、余計なトラブルが起こってしまう事を防ぐためにあるとかないとか……真意は謎に包まれている。

“勤勉の区画”とは、その名の通り、才能だとかではなく、努力で学園都市内の学校・学園に入学できた者達を集めた区画だ。そのため、学力だけなら“才能の区画”と時たま互角を張る時があり。なかなか侮り難い者達がいる場所。

そして最後に“未知の区画”とは、まさに未知。つまり、住んでいる者たちが理解していない、または手を及ぼしてはいない地区であり。その区画内には、問題を起こし他の区画から追放された学生だったりだとかが集まるアンダーグラウンド的な場所があるだとか。学園都市が秘密裏に行なっている研究を隠す為の場所だとか、もはや都市伝説の様な扱いを受けている場所。ちなみに、住民自体は普通に住んでいる。

また、それぞれの区画には留学生もかなりの数が在籍している。

・執行部

区画内で定められた規定の人数で構成された組織で。

基本、学校・学園内、区画内で起きた荒事を処理するために存在していると言われている。

また、構成されたメンバーは、その学校・学園の生徒会にしか知らされておらず、一般生徒はその存在すら認知していないのではないのかと言われている。

だが実は、中には執行部の存在を知っている一般生徒も存在しているらしい。

なんとも曖昧な組織だ。

・『JUDGE』

国内外問わず、格闘技団体史上最も最強を決めるに相応しい舞台を用意できる団体と言われている、格闘技のメジャー団体。

その団体に所属している選手達は、基本的に前に所属していた団体でトップ、または優秀な実績を収めた者でないといけないとされており。非常にレベルが世界規模で高い面子が集められている。

桐嶋竜蔵も、高校入学から少し経った16歳の頃にフルコンタクト空手で世界を最年少という記録で制覇し、この団体に所属している。

また、この団体には“階級という概念は存在しておらず”。その全ての試合が無差別級といった常識では考えられない制度を採用している。

基本ルールはMMA……しかし、肘や裏拳などといった制限は一切ない、真の“value tudo【何でもあり】”の世界。

しかし、選手間の交渉次第では、様々なルールが適応される場合もあり、時にキック、時に肘などを抜きにした総合だったり、様々な種類のルールを適応する事が出来る。

基本リングは六角形ヘキサゴンの金網で囲まれた物……しかし、これもルールの適応によっては普通のロープを張られた四角いリングになることもある。

リングの制度は、つい最近に作られたものであり、それまでは見やすいという事で四角いロープのリングのみであった。

竜蔵の父親、桐嶋虎刃喜は、この『JUDGE』の試合中に亡くなっている。

『JUDGE』という団体名は、『全世界で最強の男を、平等の試合で裁き決める』という考えの下、創設者によって名づけられた。

入学式（前書き）

第一章です。

入学式

眩いばかりのライトが、一つの白いキャンバスを照らす中、二人の異なる国籍を持った男達が、文字通り、血で血を洗う殴り合いを繰り広げていた……。

赤と青のコーナーポストや、白いインターバルゾーンのポストなど、リング内だけを見ればどこにでもありそうな光景。

しかし、このリングのキャンバスに立っている二人の男達が。その手に着けているオープンフィンガーグローブの拳面を相手の顔面に衝突させ合う度に、周りを囲む万を超える人々の歓声は地鳴りにする程に二人の男達の全身を包み込んでいた。

その万の人員を動員出来るほどの会場は、既に中央で戦う二人以外に興味を示していないかのように、白いライトの照明を、そこしか集中させていない。

男の一人……東洋系の肌や顔立ちをした、一切の脂肪が無いほどに絞り上げられた完璧なまでの肉体を持つ男が、相手の白人男性の右頬を、文字通り左の拳で刈り取る様に打ち抜く。

もはやその拳は、ショートフックなどという名詞の枠では現せないぐらいのキレを誇っており、まるで鎌で相手の顎を削ぎ落としたのではないかという錯覚まで周囲に与えていた程だ。

左の拳を右頬に受けた白人男性の頑丈そうな顎が、殴られた軌道側へと弾き飛ばされるかの様に揺らいだ。

しかし、白人男性は殴られた勢いそのままに沈みそうになっていた巨軀な肉体を、前足として置いていた左足を横に差出し、キャンバスに踏ん張ることで、その場に留めた。

だが東洋系の男の猛攻は止まない……。

崩れ落ちそうだった体を残した白人男性の奥足……つまりは右足の内腿に、右足によるインローキックを打ち込んだ。

バチイイイイン!!!!——と、地鳴りが響く程に大きな歓声の中でもハッキリと聞こえる、白人男性の右内腿が、東洋系の男の右脛に蹴り抜かれた音。

その音は正に破裂音といっても過言ではなく、例外なく、白人男性の右足を蹴った方向に刈り取った。

右頬への左フックをかるうじて耐えた後の、右内腿へのインローで完全にバランスを崩してしまう白人男性……体格差は195?125?に185?の100?と、明らかに勝っている筈なのに、これほどこまでに良い様にされてしまう事に白人男性の表情には、ダメーじだけのものではない何かが浮き彫りになっていた。

無理やり足幅^{スタンス}を広げられる格好となった白人男性の大きな顔に、再び東洋系の男の拳——今度は利き腕の右——が飛び込んでくる。

真っ直ぐに……真正面に……真正直に、突き出されるその拳は。右のインローを引いたと同時に打ち込まれたために、腰の回転にツイスト気味の力がかかり、東洋系の男の柔軟な肩甲骨の使い方も相まって。普通のコンビネーションの決めに使われる右ストレートの威力や迫力となんら差異は感じられなかった。

当たる!!!!——東洋系の男は、この両者の顔面が血で染まるほどの殴り合いの終結を、そこに見た。

しかし、その刹那……。

グシャッ!!

「親父イイイイ!!!!」

鈍い……なんてものではない。

まるで、高速で飛んできた鉄球に顔面を潰された様な、短くも衝撃的な音が、両者の顔面を襲った。

同時に、東洋系の男の耳に、聞き慣れ過ぎた子供の悲鳴も飛び込んできた……。

相打ち……それも、相手が苦し紛れに打った右拳と自身の右拳が、同時に両者の顔面を捉えるほどのドンピシャなタイミング。

二人の鍛え上げられた首が、背中が、足が、ゆっくりと後ろへと倒れ込もうとする……。

打ち込まれた拳から離れた顔面からは、ネチャリと赤色で染まった粘液が共に糸を引きながら、生々しく離れていくのが見えた。

そして倒れ行く東洋系の男が、青コーナーからこちらを泣きながら見ている子供を、精根尽き果て朦朧とする意識の中で一瞬だけ捉えることが出来た。

本当に……本当に情けないぐらいに涙で顔をクシャクシャにした、小さな男の子だった。

(ごめんな……竜蔵……)

東洋系の男は、暗闇に包まれつつあった思考の中で、最後にそう囁いた後。

力なく、リングの上でこちらを照らし続けていたライトを仰ぎながら意識を沈めるのであった。

その男の筋骨隆々の肉体に纏った道着の黒帯には、金色の刺繍できりしま桐嶋虎刃喜”と書かれていた……。



桜色の季節とは、まさにこの事……。

三月の別れから、大して時も経たずに訪れる新たな出会いの季節。そう、現在は四月の入学シーズン真っ只中の季節だった――――

「美夏みなつさーん！ もう皆多目的ホールに入っちゃってるよー！！」

晴天の空！ 正面に見据える桜色満載の並木道や、赤い煉瓦が敷き詰められたお洒落な地面が、視覚的にも新しい心境の訪れを感じさせる今日この頃。

そんな中、一人の少女の後ろから、少し焦り気味の声が聞こえてきた……。

「？」

その声をかけられた少女は、無言で後ろを振り向く。

少女の腰まで伸びた黒真珠の様に日光を反射させているロングストレートの髪が、春風によって桜の花びらと共に舞う。

「……」

この光景に、少女に声をかけた同学年の女生徒が思わず見惚れてしまう……。

先の艶やかな髪もさることながら、美しくも女子高生という若さ特有の可愛さを持つ瞳や、細く整った小顔の輪郭。まだ15歳という年齢ながら、165cmという身長に出るとこは出ているモデルのような体型のラインが、有無を言わさぬ優美さを誇っていたからだ。こちらを呼んだにも関わらず、突然口をポカンと開けて黙りこくってしまった同学年の女生徒に、美夏と呼ばれた少女は首を傾げる。

「どうしたの？ 急に黙り込んで……」

「……え、あ、うん！ そろそろ入学式が始まるって、伝えに来たんだけど……」

自身が思わず見惚れてしまった少女に声をかけられ、ようやく意識を覚醒させた同学年の女生徒が。ここに来た理由を思い出したかのように伝える。

「そう……」

同学年の女生徒の言葉に、そう言って短く答える美夏と呼ばれた少女……。

この様子に、同学年の女生徒が心配そうな表情になる。

「もう緊張の方は大丈夫なの？ 私はやらないから結局他人事になっちゃうけど、やっぱり新入生代表の挨拶って、そんなに緊張するものなの？」

同学年の女生徒からかけられた言葉に、美夏は軽く微笑んで見せてから。

「うん……昨日までは楽しみって感じだったけど。今はそれなりに緊張してるかな」

「それなりにつて。緊張を解すために外に出るほどなんだから、相当の間違いなんじゃない？」

「ふふ、そうかもしれないね？」

おそらく、こちらの緊張を和らげようと頑張ってくれているのだろう。この言葉のチョイスは、いささか逆効果なんじゃないかと感じる美夏であった……まあ、口には出さないが。

「でもまあ、どうせやる事になるんだし、なるようになれって思っただ方が気が楽になるよ？ 人間はリラックスが大事って言うしね」
しかし、相手方はこれでこちらの緊張が解れていると感じているのか、言っただけという表情を浮かべながら、こちらに満面の笑みを浮かべてくる。

この瞬間、美夏の胸中では“この娘は対象外ね、まずいきなり下の名前で呼んできた時点で対象外だけど”と謎の評価が下されていた……。

「アドバースありがとうね。そうする事にするよ」

「うん！ 頑張つてとしか私は言えないけど、ちゃんと後ろで応援してるからね！」

「ええ、でも、もう少しだけ外で落ち着きたいの。だから、先に行つてて」

「分かった！ なら、遅れないでね？ あと2・3分ぐらいで始まるらしいから」

そう言つて、同学年の女生徒は、多目的ホールや図書館が一体となった、地下一階地上四階の建物へと姿を消していく。

女生徒が去るのを、これまでの微笑みとは打って変わって特に興味なさげな視線で見送った美夏は、再び先程まで眺め続けていた桜並木の向こうに視線を戻した。

相も変わらず、綺麗な桜の花びらが、一枚一枚自己主張をしながら散っていく……非常に綺麗で風流な光景だ。

だが、そんなものには美夏は興味を示そうとはしない……ただただ、並木道の向こう側を見つめ続ける。

（やっぱり、お兄ちゃんは来ないのかな……）

胸中での寂しそうな呟きは、春の暖かな風にも乗らずに、美夏の中だけで響き渡るだけだった。

そして、そろそろ入学式の時間が迫ってきていたのに気付いた美夏は。少々後ろ髪が引かれる思いをしながらも、後ろに佇んでいた大きな建物へと踵を返した。



入学式……それも高校生でのと来れば、誰しものが新たな何かに淡い期待を抱くであろう。

そして、そんな淡い期待を、入学式会場である多目的ホールへと入ってきた瞬間に、他方から浴びた人物がいた。

しかし、様々な視線を全身に感じながらも、その人物は一切の興味や物怖じすら見せずに、悠然とした足取りで多目的ホールの最前列へと歩を進めていった。

ここ多目的ホールは“第一区”新入生総勢3200人の内、新入生の500人は軽く収容できるほどの大きさを誇っている。

まあ確かに新入生の来賓やら父母の方々やらを合わせたら、この多目的ホールでも席がギリギリといった状態になってしまうが。高校にしてこれ程の人員を収容できる多目的ホールがある事自体珍しい事で……更には、この様な空間が、この地下にはあと二つあるというのだから驚きだ。

そんな中を、この多目的ホールにいる人々から視線を集めながら最前列へと躍り出た人物が、ようやく席に着いた。

席は、最前列一番右側だ。

瞬間、多目的ホールに灯っていたライトの明かりが一斉に消え、今度は目の前の壇上へと再び灯ったライトの明かりが注がれた。

この間、気持ちが入学式という事で高揚していた者達の中から驚きの声が上がっていたが。先ほど入ってきた人物は、至って平静のまま次なる出来事を待った。

『これより、今年度の二橋学園高等部の入学式を開式いたします』

いつの間に現れたのか――多目的ホールの殆どのライトが集めた壇上の中で、一人の上級生であろう女生徒がマイクに向けて宣言すると共に、会場中の喋り声が一斉に鳴り止んだ。

その様子を確認したあと、壇上の女生徒が照明に向けて、手によるジェスチャーで鬱陶しそうに『ライトを向けるな』と指示を出す。と。途端に壇上に向けられていたライトが、壇上の上にある照明だけとなった。

そして再び、マイクへと口を開く。

『国歌斉唱。皆さんご起立のうえ、壇上の国旗に注目してください』すると、会場中の全ての人間がバタバタと中々に座り心地の良かったシートから起立していく。

会場中の起立が済むと同時に、国家が多目的ホールに設置されているスピーカー越しに流れ始めた。

いよいよ、二橋学園高等部入学式の始まりだ……。



入学式など、皆のウキウキ具合に比べ、何事もなく終わる様な退屈な一面も備えている。

そして、それはこの二橋学園高等部も例外ではない。既に入学式も校長やらなんやらの有り難い訓示も終わり佳境に入っている。

だが未だに皆、入学初日から可笑しな目立ち方をしたくないがために、座り心地の良いシートに背を預けながらも話しに耳を傾け続

けている……。

そうこうしていると、先の女生徒、美夏の出番が回ってきた。

『新入生の挨拶。新入生代表、桐嶋美夏^{きりしま みなつ}さん。壇上へお上がりください』

この言葉を耳に入れた瞬間、壇下最前列の一番右側に座っていた美夏がハッキリとした透き通る声で「はい！」と返事をした後、シートからスッと立ち上がった。

そして、腰まで伸びた長く真っ直ぐな黒髪を靡かせながら、優美な曲線を描いたスラリと長い足を歩かせ、壇上へと上がって行く。

この間、新入生の男子生徒や後ろの方に座っている父母……特に男の方から、異様な視線と感慨の聲が漏れ出ていたのを、美夏はスルーする。

弧を描いた壇上へと足をつけると、目の前には丁度、美夏の身長に合わされたスタンドマイクが設置されていた。

その前で、女性でありながら堂々と気を付けの姿勢を取る美夏……心なしか、それだけの事で彼女の垢抜けた気品が感じられた。

しかし、彼女にはこの様なことに対して、何の感慨も生まれてこない。

むしろ、早く終わらそうという気持ち彼女の中では勝っていたぐらいだ……もちろん緊張などではなく、本気でどうでも良いと考えている様であった。

だが表情には一切表れない。

この多目的ホールに入ってから依然として、確りとしたなかにも余裕が感じられる表情のままだ。

これを対面で見て、壇上に立っていた二橋学園生徒会長、二橋姫樹^{ふたつばしひ}の微笑ましように閉じていた瞼が、少しだけ興味深げに開いたのを、美夏は気付いていた。

しかし、それでも全く動じなかった美夏は、優等生らしく、桐嶋という名字に恥じぬよう、悠々と新入生代表挨拶をこなしたのであった。



入学式も問題なく終わり、現在は多目的ホールからクラス別に退場している。

そして美夏も例に漏れず、多目的ホールの両開きのドアから退場し、約1時間半ぶりに外の空気を体内に入れることが出来た。

本当に退屈だった……家族である母も妹も、そして何より兄も来てくれない入学式に、何の意味があるのか？

そんな事を考えながら、長い桜並木の道を歩いている時であった。突然、後ろから右肩をツンツンと突つかれた……。

これに自然に反応した美夏は、何かなと言った風に後ろを振り返る。

そこには、165?と、同年代の女子にしては発育良好な美夏よりも、10cm以上は高い女生徒が人懐っこい笑みを漏らしながら立っていた。

「新人生代表の桐嶋さんだね。あたしは同じクラスの木下藍きのしたあいって言うんだけど、一緒に教室まで行かない？」

フランクな物言いもそうだが、美夏に話し掛けてきた木下藍という女生徒は、長身にも関わらず均整の取れた体型がスマートな印象を持たせ、高い腰の位置や、コバルトブルーの瞳、少し赤茶がかった活発なショートヘアなどが、どこか日本人離れした雰囲気を出していた。

「うん、いいよ」

美夏の返事に「そう、じゃあ行こうか♪」と言って隣に並ぶ木下藍。

そうすると、よけいに美夏との身長差が際立って見える。

「木下さんって、何か部活とかやってるの？」

やはり、いくらこれまで興味が沸く事が少なかった美夏でも、こればかりは気になったのか、思わず質問を投げかけてしまう。

「あたしは女バスだよ。まあ、この成りを見れば、なんとなく想像が着いたでしょ？」

「ええ、まあ」

「そういう桐嶋さんは、何かやってるの？ 見たところ凄いプロポーションだから、体とか鍛えてるんでしょ。特に足とか見ると、結構やってる感じがするよ」

少しだけ俗っぽい視線を美夏に向けつつも、意外に観察力の鋭い木下。

これに美夏は、密かに抱いていた彼女の第一印象である“大雑把そうな女”という評価をちよつとだけ改善させた。

「私は中学まで新体操をやってたけど、高校では続けないかな」

「へ〜新体操ね〜……続けてれば、男子達が煩いからって理由で？」
ニヤニヤと美夏の豊かな美乳を眺めつつ尋ねてくる木下に。

「そうじゃないってば。ただ続けられる自信が無いって言うか、暇が無いって言うか……そんな感じかな」

「ふ〜ん、もったいない……桐嶋さんのレオタード姿とか、絶対に男子達が面白そうな反応すると思ったのに」

「まあ、確かに面白い反応はしてたけどね（思い出したくも無いくらいにね。ホント、お兄ちゃん以外の男子って“糞”ね）」

うん？ ちよつと待ってくれ……。

これまで、確かに桐嶋美夏という女生徒は、節々で影のある感じを醸し出していたが……。

今の副音声は一体……？

非常に問いただしたい所ではあるが、ここで美夏にとって、最も出会いたかった……いや、死ぬまで添い遂げたい人物が、いつの間にかに来ていた桜並木の終わり、二橋学園“入り口”の校門前に現れた。

周囲にはまだ、美夏達の他にも新入生達の姿がゾロゾロとしていたが、その匂い、その存在感により、美夏は神業とも言える探知能力で、件の人物がいる方向へと“バ”っと振り向いた。

「うん？ どうしたのいきなり？」

突然の美夏の動きに、木下が不思議そうな表情をするも、もはや本人には眼中に無い。

視線の先には、一人の体格のいい……いや、もはや芸術とも呼べる肉体を誇った男性が、本学園の男子の制服を身に纏いながら誰かを探している光景が映っていて、その表情には、一向に見つかる気配が無いのか焦燥感すら漂わせていた。

「桐嶋さくん、俺同じクラスの佐々木ってんだけど」

「ねえ、桐嶋さんだよな？ 俺、君と中学が一緒だった……」

不意に、視線を固定してしまった美夏の後ろから、同じクラスの男子生徒達が声をかけてきた。

おそらく、彼女の容姿に惹かれた者達であろう……。

しかし、美夏は一切の反応を示さない。

ただただ、校門前で誰かを探し回る男を見つめているだけ……。

「桐嶋さん？」

当然、美夏の隣にいた木下は、新しく出来た知り合いを氣遣うように、上から顔を覗き込む。

そこで、動きがあった。

「え？ ちょっ……」

木下が言い終わる前に、なんと美夏が前方へと飛び出したではないか。

柔らかい物腰や華奢な容姿からは考えられない、流れるように動く柔軟な走りで、美夏はあっという間に木下や後ろにいた男子達を置き去りにしてしまった……。

そのスピードは、本当に高一女子とは思えない素晴らしいもので、腰まで伸びた黒髪を颯爽と風になびかせながら、一気に目的の人物までの距離を縮め……そして。

「うん？」

件の人物の厚い胸板に、思いつきりダイブもといタックルをかました。

ドン！——という中々に良い音を鳴らした美夏のタツクルであったが、男は何の問題も無く、飛び込んできた美夏を抱き止める形で包み込んでいた。

ガバッと、美夏が男の胸に埋めていた顔を上げる。

するとそこには、高校男児らしい若さと男らしい強さを持つ顔つきをした、自慢の兄の姿があった。

頑丈そうながらも、それなりに整った輪郭や、眼力のあるハッキリとした瞳。

逆立てた黒髪の短髪は、高校生らしくワックスでセットされ、美夏が抱きついている肉体は、胸囲と腹回りが反比例した理想的な逆三角形をしている……。

また、彼の鍛え上げられた太い首筋を見れば、中も相当な筋が浮き彫りになっているのだろうと想像が出来る。

そんなガチムチな兄貴が、受け止めた美夏を見る。

「おお、やっと見つけた……ごめん？ 入学式に間に合わなくて」「そんな事ないよ！ こうして来てくれただけでも、私は嬉しいんだから……」

抱きつきながら見上げる瞳を潤ませ、本当に嬉しそうに聞こえる美夏の声音。

それを見て、美夏を抱きとめた格好となっている兄貴の表情が“悪いことしたな”と言外で語る様に眉を八の字にしていた。

しかし、ここにはまだ他にも新入生の面子が大勢いるのだ。

当然だ、なぜならここは学園都市第一区にある“二橋学園”の校門前なのだ。入学式を終えた生徒は、それぞれ教師との顔合わせのために自身の教室へと向かわねばならない。

そして、そんな場所で抱き合う二人……当然、二人の関係を兄妹と知らない周りからの注目を集めるわけで。

「え、嘘……桐嶋さんって彼氏持ち？」

「うわ、大胆……」

「マジかよ、あんあむさ苦しい奴に何で……」

ヒソヒソと聞こえてくる戸惑いの声。

そして、先程まで一緒に歩いてきた木下の後ろからは、声をかけようとしていた男子達が落胆の表情を浮かべている……が、ここで何がなんだか分かっていなかった木下が、ある事に気付いたようだ。（あれ……あの男の人、どこかで見た事があるような）

頭の片隅に、様々な記憶を巡らせる木下。

もともと考えるということでは得意ではないのだが、こればかりはどうにも考えずにはいられなかった。

「うん？　もしかして、あの人って格闘家の……」

すると、どこからともなく木下の耳に、そんな声が静かに届いた。瞬間、木下の活発な眼が“カッ”と見開かれる。

「思い出した！　あの人、『JU DGE』に出てる人だ！」

この木下の言葉と共に、周りから「ああ！　そういえば！」だとか「学園パンフレットに載ってた人か」だとか様々な声が聞こえてきた。

「え？　ああ、そうか。そういえば、うちの学園に……書いてあったな」

「確か名前って、“桐嶋竜蔵”きりしまりゅうざうだったっけ？」

「馬鹿、今は先輩を付けろよ」

桜が舞う学園校門前で、方々から向けられる“有名人を見た”というミィハーな高校生の視線に、美夏の兄、桐嶋竜蔵は気付いたのか……。

「うん？　そういえば、まだ全部終わってなかったっけか」

目と目を合わせていた美夏から視線を外し、周囲を見回した後、そんな事を気付いたように呟いた。

同時に、現在兄妹で抱き合っている姿にようやく気付いたのか、抱きとめていた美夏の体をスッと放した……が。

「おい、ちょっと周りが見てるから……」

なぜか、こちらをニコニコと見つめたまま、美夏が離れようとしてくれない。

むしろ、ますますその發育良好な胸を押し当ててきたぐらいだ。
「ダ〜メ♪ これは入学式に来てくれくれなかった罰なんだから」
「いや、それは悪かったって……だけど、今は離れてくれないか？
お前もまだやる事が残ってるんだろ？」

「嫌♪」

甘えた声で、竜蔵の厚い鉄板の様な胸板に頬擦りをする。

困った……周りの視線が、何やら嫉妬やら何やらが混ざった痛い者を見る感じになってきてる。

これは早く何とかしないと。

そう考えた竜蔵は、ここである提案を持ち出す。

「なら、今日の夜に入学祝として何かプレゼントするから、それで許してくれないか？」

「そういうのは本人には黙ってるものなんだよ？」

もつともな指摘を受けて、竜蔵はますます困った顔をする……。

拙い、本当に拙い……。

このままだと俺は、極度のシスコン野郎って勘違いされてしまう。
周りの新人生は、まだこの二人が兄妹とは気付いていない様であったが。そろそろ名字が同じだとかで気付く者が出てきても可笑しくは無い。

そして気付かれた上で、こんな事をいつまでもしていると、確実にこれから後輩となる連中に示しがつかなくなる。

故に竜蔵は、その懸垂で出来た^{たこ}尻や格闘家として作り上げてきた拳^{こぶし}が目立つ、ゴツゴツとした両手で、美夏の細い両肩をガシッと掴むと。

「あっ！」

「はい、そろそろ本気で離れろよ？」

その岩石の様な筋張った太い両腕を駆使して、懷に抱きついていた美夏を無理やり剥がした。

むくくと両頬を膨らませながら、不服そうにこちらを見る美夏。
しかし、入学式に参加できなかった事を悪いとは思いつつも、公

私を弁えなければならぬと考えた竜蔵は。

「必ずこの埋め合わせはするから、今は言うことを聞いてくれ」

「む……必ずだよ？ 絶対だよ？」

身長差は竜蔵170？なので、男女にしては5？しか差は無いが。先ほどの美夏の仕草で、どうにも彼女が子供っぽく見えてしまう。

これに、新入生代表の挨拶を見ていた周りの男子達は、いわゆるギャップ萌えという奴で既に陥落寸前の状態であった。

しかし、何度も言うが、周りはまだ二人の関係には気付いていない……。

故に、最初から彼女に目をつけていた男子達からは嫉妬という負の感情が漏れ出るというより噴出していた。

だが、ここでもようやく、何やら気付いたものがあるようで。

「あれ、そういえば先輩の名字って、桐嶋さんと同じ……」

そう呟いたのは、先ほど竜蔵を『JUDGE』に出てる人と見抜いた木下藍だ。

そういえば『JUDGE』とは、ここ日本国内だけではなく、既に世界にも認められたメイドイン・ジャパンの格闘技団体で、各方面の団体から本当の実績を挙げたものしか出場出来ない狭き門の団体なのだが……今は割合しておく。

木下の呟きに、周りの新入生達も何かに気付いたのか。

「確かに、同じ名字だ……」

「え？ じゃあもしかして……」

「マジで？ でも、二人って言っちゃ悪いけど似て無くない？」

この周りのざわめきに、美夏と綺麗な耳がピクリと動く……。

同時に、向けていた体の正面を、今度はざわつく同級生達へと振り向かせた。

「急に騒いでゴメンね？ 今から紹介するけど、この人が私の“お兄ちゃん”で……」

視線を同級生達に向けたまま、後ろにいた竜蔵のブレザーの袖を

クイクイと引っ張り。

「うん？ ああ、桐嶋竜蔵って言います。知ってる人もいるかもしれないけど、一応空手やってます。部活はラグビー部です」

美夏のサインに気がついた竜蔵が、先輩らしい軽い口調で自己紹介をする。

すると、周囲から驚きと予想外だったという声が上がった。

「え！ うそマジ！？」なんて反応は当たり前で、もはや桜並木の終着点でもある二橋学園校門前では一種の騒ぎが起こり始めていた。

現役高校生格闘家の妹……ましてや、その現役高校生は、世界を相手に戦っているという説得力を持った風貌をしていて、既に気の弱い男子達は、目をつけていた美夏から手を引こうかと考えている様であった。

だが、気の強いというより意志の強い連中には、どうやったらあの兄をどかして美夏と接触するのかを画策している者もあり、男子間では非常に混沌とした思惑が入り混じっていた。

「皆さん、一体何の騒ぎですか？」

しかしそこに、なにやら決して大きくは無いが、不思議と誰の耳にも良く聞こえる女性の声が割り込んできた。

その声に、なぜかこれまで騒いでいた校門前にいた全員が振り向いてしまう。

それは例外が無く、美夏や竜蔵も同じことであった。

声の主である女性は、多目的ホール側の桜並木から、丁度ここに辿り着いたという所に、数人の生徒を連れながら立っていた。

「あ、会長だ」

突然現れた彼女を視界に入れた竜蔵の言葉に、美夏も「挨拶の時に会った人だ」と先の入学式での事を思い出していた。

「あら、桐嶋君に妹さんね♪ 丁度良かったわ」

二人の反応を、まだ少し距離があるにも関わらず気付いた会長と呼ばれた人物は。

緩やかなウェーブのかかった、豊かな栗色の長髪を揺らしながら、優雅な足取りで二人に歩み寄っていく……その間、道の邪魔になっていた新入生たちは、自然とこの会長と呼ばれる人物に道を譲ってしまっていた。

そして美夏と竜蔵の前で、朗らかな笑顔を浮かべている会長が歩みを止めた。

「入学おめでとう、桐嶋美夏さん。さっき聞いたと思うけど、私は二橋姫樹^{ふたつばしひめき}。学園都市第一区二橋学園高等学校の生徒会長を務めてます♪」

「ありがとうございます、二橋会長。私も改めて自己紹介をの方をさせていただきます、桐嶋美夏、後ろにいる桐嶋竜蔵とは兄妹の関係にあります」

行儀良く……というより、ただ自己紹介を礼混じりに行なっただけで、どこか涼やかな雰囲気すら醸し出す二人の所作に。周りの者達は一瞬だけ空気に吞まれる感覚を覚えた。

学園の生徒会長。

もちろん、先ほどの入学式にも出席していたために新入生には既に知られているが。

目の前で見ると、美夏に負けず劣らず……というより、胸の大きさと大人の女性といった物腰の所為で、どちらかといえば美夏にすら勝っているスタイルを誇っており。

その常に目は瞑っているが朗らかな微笑みを浮かべている表情のお陰で、周りに楽しそうな雰囲気分け与えている様であった。

この目の前に現れた魅力的な女性に、外見には出さないが美夏の警戒心が高まる……。

（なんなのこの女……底が見えないだけじゃなくて、容姿も油断なら無いじゃない。これは、リストの方に即効で追加ね）

なにやら黒い感情の籠った思惑……。

しかし、もしや気付いているのか？

目の前の姫樹はそれを片目だけ薄っすらと開けるだけで流した。

「ええ、一応名簿の方は目を通していたから知っています。しかし、それにしても兄妹揃って同じ学園とは……ちゃんと面倒を見てあげなくてはダメよ？　“お兄さん”」

悪戯な笑みを浮かべ、竜蔵を茶化す姫樹。

「やめてくださいよ。コイツは俺より出来た妹ですから、その必要も無いですよ」

「あらあら♪　随分と妹さんの事を信頼しているのね」

「やだ、お兄ちゃんたら……♪」

「お前はからかうな」

姫樹に続き、兄の事を茶化そうとした妹を咎める。

春風が吹く中で、桜の花びらが赤煉瓦調の地面に散りばめられる光景で、このまま他愛の無い会話を続けても良いが。生憎と新入生にはまだやらなくてはならない事がある。

「仲が良いのも結構ですが。そろそろ教室に向かわないと、担当の先生方が待ち草臥くたひれてしまいますよ？」

故に姫樹が、やんわりとその事について口にする。

「あ、そっか。じゃあ美夏、また後でな？」

姫樹の言葉で随分と妹を引き止めて？　しまっていた事に気付いた竜蔵は、気軽な調子で美夏に言った。

「え……って言いたいところだけど、仕方ないよね。じゃあ、また後で、お兄ちゃん♪」

「ああ。それと、学校内では“お兄ちゃん”は止めてくれ。先輩に弄られるから」

気恥ずかしそうにする竜蔵に、美夏は嬉しそうな微笑を浮かべると。

「やだもーん。これは入学式に来てくれなかった罰です」

言いながら、「ちょ！」と反論しようとする竜蔵から逃げるように、学園の校門の向こう側へと走っていく美夏。

妹が竜蔵を過ぎ去る際に、彼女の髪の毛が一瞬だけ竜蔵の確りと筋の通った鼻を擦った……春の陽気と相まって、とても甘い香りが

したのは、兄としては口に出しづらいところであろう。

「良い妹さんね。会長とても気に入っちゃったわ♪」

「俺には出来すぎた妹ですよ……家事も出来るし運動も勉強も完璧にこなすんですから」

妹である美夏が、制服のスカートを揺らしながら去って行った後で、竜蔵が疲れたように「ふん」と鼻で溜息をつく。

すると、姫樹の後ろにこれまでずっと控えていた連れの生徒達――――おそらく生徒会のメンバーであろう――――が、周りにまだ残っていた新入生達に早く教室へ向かうように促し始めた。

それに反応した、立ち止まっていた新入生達が慌てて校門の向こう側へと走っていく姿を見送ると。

「それで桐嶋君、折り入って会長からお願いがあるのだけれど……」突然、姫樹が静かな声音で竜蔵に尋ねた。

何事かと、竜蔵が視線を新入生達から姫樹の方へと戻すと。

「なんですか？」

「お願いっていうより、“命令”って言った方が格好良いかしら？」

「いや、割とどうでも良いです」

「そう？」

おかしいわねーと、右頬に右の掌を当てながら、困ったように表情を曇らせる姫樹。

「で、折りいったお願いって何ですか？」

その竜蔵の本気でどうでも良いから、早く本題に入ってくれというニュアンスの込められた態度に。

自身もこの後、色々忙しい予定の姫樹は、とりあえず遊びを手放すことにした。

「“執行部”としてのお願いになるのだけれど、いま時間の方は大丈夫かしら？」

姫樹の柔らかそうな唇から出てきた“執行部”というワードに、竜蔵が露骨に面倒くさそうな顔をする。

その表情を見て、姫樹は「やっぱり、今はダメなの？」と残念そ

うにしたが。

「いえ、今さっき対戦相手との契約が終わったところなんで。特にこの後、予定って言う予定は無いんですが……俺じゃないとダメなんですか？」

「別に桐嶋君じゃないとって訳ではないのだけど……他の子たちが一切受けてくれなかったのよ」

「全員ですか？ 確か俺以外に、後何人いましたっけ？」

「うちの学園は少ないから、桐嶋君以外にあと二人しかいないのよ……その二人にさっき『興味が無い』って理由で、断られちゃったから。受けてくれないかしら？」

姫樹の両手を合わせて“お願い”というポーズに、竜蔵の胸が撃ち抜かれそうになるも。それはその鋼鉄の大胸筋が弾丸を防いでくれたお陰で、難を逃れた。

理性を失う一歩手前……非常に危なかった。

しかし、防いだとしても他に人員がいらないと言う事では受けざる負えないのが残り物の宿命。

故に竜蔵は、まだ見たことも無い他の面子に“俺はただの手伝いなんだぞ”という意思を込めながら。思いつきり仕方ないといったふう「はあ」と溜息を吐いた。

「分かりました、どっちにしろ暇だった訳ですし。アイツの入学祝のプレゼントを選ぶついでに行つて来ますよ」

瞬間、姫樹のもとと朗らかな微笑みを浮かべていた顔が、更に嬉しそうに花が開いた。

「本当に！ なら、お言葉に甘えてお願いしちゃうわね♪」

「ええ、どうぞ」

「場所は多目的ホールで、対象はやんちゃ盛りな新入生一名よ」

それを聴いた瞬間、竜蔵は眉を少しだけ意外そうに吊り上げた。

「へー入学式早々に問題起こす奴が出たんですか。でも、それにしでは落ち着いてコッチまで歩いてきてましたよね？ 会場で暴れる奴がいるって言うのに」

やんちゃ盛りな新入生が対象ということで、おそらくそういった事だろうなと当たりを付けた竜蔵の読みは、どうやら正解だったようだ。

「うん、暴れていた子が私の親の友人の息子って話らしくて、先生方も手が着けられない状態だったし。私なんかじゃ血気盛んな男の子を取り押さえるなんて事出来ないから。潔く他の人を探してたってわけ」

「潔くって……後ろにいる人たちじゃ無理だったんですか？ 男も何人かいるみたいじゃないですか」

そう言って、竜蔵は姫樹の後ろに控えていた数名の生徒会メンバーを覗き見る。

すると、竜蔵に視線を向けられた生徒会メンバー達は、なにやら三つ編み眼鏡娘以外の全員が視線を反らし始めた。

竜蔵は心の中で初めて意気地なしという言葉を彼らに向ける事にした。

「うちの生徒会って、皆荒事には向かないタイプだから、仕方ないのよね」

「いや、少しは努力をしましょうよ……」

「うん♪ だから我が学園でも数少ない“執行部”の子を探してたのよ」

「俺、確か一応“手伝い”だけっていう話でしたよね？ それがなんで……」

「“累積”よ、る・い・せ・き♪ 本来なら、アナタは既に停学とかいうレベルの範疇を超えて、退学になったって不思議じゃないくらいに問題を起こしているのだから、当然でしょ？」

意地悪に微笑み、竜蔵に理由を容赦なく突きつける姫樹の姿は。やはり上に立つもので、弱みなどいくらでも利用してやるという心意気が伺えるものであった。

「それに、そんなアナタを聖母の如く拾ってあげた恩人に、恩を倍にして返すなんて当たり前前の事なのよ？ 返すチャンスを与えてい

るのだから、むしろ感謝して欲しいぐらいね♪」

このとき竜蔵は、目の前の人物とはそろそろ一年来付き合いに突入しそうではあったが。改めて彼女の微笑みの裏に隠れている黒い部分を垣間見た気がしたのであった。

流石に、自分の犯してきた過ちを引き合いというより盾に出されてしまっは。潔く逃げてきたという彼女達を責める訳には行かない。

ここは大人しく、無難に従った方が嫌な所を突付かれなくて済むと考えた竜蔵は、再び仕方ないというニュアンスを込めた溜息を盛大に吐き出しながら。

「分かりました、感謝しますよ……とりあえず、多目的ホールに行けば良いんですね？」

「ええ、きっと彼もそこに居座り続けていると思うから」

その姫樹の意味深な言葉に、竜蔵は「え、どうしてですか？」と思わず尋ねてしまった。

姫樹はそれに、楽しそうな微笑を浮かべ。

「だって、“桐嶋竜蔵を出せ”とか言ってたんですもの、きっとまだいると思うわ♪」

再三に渡っての溜息が、また盛大に竜蔵の口から吐き出された。

「それって結局、俺が行かなきゃダメだったって事じゃないですか

……」

「え？ どうして？ 他の子を使って、後ろからズドンってやれば

……」

「高校の生徒会長が言うことじゃないでしょうに、それは」

心底この人は腹黒いのだなと、竜蔵はまた改めて心に刻むのであった。

そして、もうこの人と話すのは本当に疲れると判断した竜蔵は。そのまま歩を入学式を行っていた多目的ホールへと、勝手に進め始める。

「あーじゃあ、俺もう行きますから。後で美夏に会ったら、先に帰

つててくれって伝えといってもらえませんか？」

「ええ、確りと伝えておくわ」

「頼みましたよ」

そう言って、竜蔵は生徒会のメンバー達とすれ違いながら、本当に面倒くさそうな足取りで桜並木の道を歩き始めた……そりゃもう、後頭部を左手でボリボリと搔いているぐらいにだ。

新しい環境、新しい友人

入学式後のクラスごとに始まる、最初の先生との顔合わせ。

二橋学園では通常とは違って、入学式で担当する教員を発表するのではなく。この入学式後のクラスごとの集まりの時に初めて行なわれるのだ。

ちなみに、特に理由は無い。

学園のクラスは基本、大学の様な段状になっていて、教卓からクラス全体が見渡せる様な構造になっている。

生徒はこのクラスの三人掛けの机を二人で使う事になっており、やはり新学期は窓際一番前の列から名前順に生徒達が並べられる。

そしてここは一年A組、桐嶋美夏きりしま みなつが在籍しているクラスで。美夏は運良く窓際最後列の一つ手前の席に座ることが出来ていた。

しかし、現在は肩に掛けるタイプの学生鞆の中身は空っぽのため、非常に手持ち無沙汰な気持ちに晒されていて。

また既に隣の男子との会話も無難に“退けた”後のために、余計な手持ち無沙汰感を味わっている最中なのであった。

左手で頬杖を付きながら、窓際の特権である外の様子を伺い見る……。

ここは校舎四階のため、窓の外の見晴らしは最高に良く。学園敷地内にある桜も、その外にある桜並木の風景もまとめて一望できた。学園の校舎の近くには、他にもパンフレットにも載っていた三面ガラス張りのデザインと屋上のテラスが売りの四階建て食堂棟や、地下には近代的なトレーニングルームもあるやたらデカイ体育館に、サッカーグラウンドとラグビーグラウンドが一面ずつ人工芝の上に白線で描かれたナイターも可能なグラウンドなど、普通の学校の施設とは一線を画した施設が点々としていた。

この学園は敷地は、どれだけ広いのだと疑問を投げかけたいぐら

いに充実した施設の数々。

またこの他にも、各部活動が部室として使用している部室棟や、校内合宿用に建てられた合宿棟なるものまであるから驚きだ……更に言えば、この校舎自体デカイ。

これほどの施設……確かにこれなら、“才能の区画”と呼ばれる第一区から第三区の中で最も個性的で優秀な人材を集めた学園と呼ばれているのも頷けるというものだ。

ちなみに、プールは屋内にあり当然の様に温水も可能で“男女別”だ。

美夏にとって、ある意味ではこれが一番嬉しい事だったのかもしれない。

（だって、お兄ちゃんという至高の存在以外の“汚物共”に私の水着姿を見せるなんて。本当に鳥肌が立ちそうで嫌だったんだもん……）

その誰とも知れない胸中での呟きは当然誰にも聞き取れない。

すると、頬杖を付きながら外を眺めていた美夏の背中に、ツンツンといった細い指の感触が伝わってきた。

「うん？」

それに反応し、上を見上げる形で振り向く美夏……段状というのは、こういう時に面倒だ。

しかし、美夏を振り向かせた張本人は、そんな事は気にしてないようだ。

「何見てるの？　ぼくって外なんか眺めちゃってさ？」

後ろの席に座っていたのは、長身でスレンダーな体型が特徴的な活発な女子、きのしたあい木下藍。

彼女はコバルトブルーの瞳や、赤みがかったボーイッシュな短髪から、どこか日本人離れした容姿をしているが、先ほど美夏が気になって聞いたところ、やはり日本人とアイルランド人のクウォーターだと言う事らしかった。

また、これも先ほど教室に入ってきたばかりの時に聞いたことだ

が。

彼女はバスケットの選手として、ここ二橋学園に特待生で入学したらしく。その腰の位置が高い足だったり、指の長い手だったり、何よりも彼女の才能を誇示していた。

「ふふ、だって桜が綺麗じゃない……日本人なら、こういうのを静かに眺みたい時だってあるのよ？」

「そんな感覚、あたしにだってあるよ。伊達に日本で育ってないし」本当に桜が綺麗というだけで嬉しそうな声音で語る美夏に、木下も楽しそうに微笑を浮かべる。

やはり入学式を終えたばかりかつ、新入生としての始まりを実感し始めたからだろうか？

教室中の空気が、どこか浮ついた調子にあるのを誰もが感じていた。

そりゃそうだ、新しい仲間、新しい環境……ワクワクする事など、今は吐き捨てるほどにあるのだから。

すると、二人が他愛の無い会話で交流を深めている、そんな時であつた——

ガラガラガラ——

教室の一番前にある鉄製のドアが開けられる音が、不思議と浮ついた空気で騒がしい教室中に響いた。

その音に、誰もが視線と耳を傾ける……。

「お、全員席に着いてるな」

陽気な声と共に、カツカツとヒールで教室を歩く音が小気味良く鳴る。

教室中の視線を一心に集めながら、教卓へと歩を進めるのは、フォーマルなスーツに身を包んだ、背の高い女性。

吊り目気味なアーモンド形のハッキリとした瞳に、ほんのりと塗られた口紅が魅惑的なぷっくりとした柔らかな唇。少々癖毛が

強い長髪に、八頭身を体現した高い位置の腰や長い足。そしてそのピシリと伸ばされた背筋の所為で、更なる存在を強調している、ウエストとかなり反比例をした大きな胸。

また、黒のフォーマルなスーツの下に着ている白いワイシャツは、胸元がかなり開けられており、健全な男子学生の理性をズタボロに引き裂く程の谷間^{ゆめ}が、姿を晒していた……首元に着けられた小さなハートのネックレスが、これまた魅力的だ。

そんな完璧なまでのスタイルを持った女性が、段状に広がっているクラスメイト達を前に教卓に立った。

「はい！　まずは入学おめでとさん。色々新しい仲間と話したい気持ちはあるだろうけど、今はこちらに注目してくれ」

教卓に両手を突きながら、前へと気持ちを押し出す形でクラスメイト達に姉御肌全開の声音で話す女性。

「私はお前達にとつて、この学園で最初の担任となる大熊月美^{おおくま つきみ}って言うんだ。これから何も無ければ一年間、よろしくお願いな！」

そう言つて、軽く頭だけを下げる大熊月美に、クラス中の生徒が一斉に一礼を返した。

「仰々しいのは苦手だから、お前達も緊張しないでいいぞ？　とにかく、今日は顔合わせ以外にやる事は特に無い。やるとしたら、学級委員とか決めたいところだけど、それもメンドイから後回しだ」

勝気でスタイルの良い女性でありながら、恰幅の良い雰囲気を出す大熊の姿勢に、生徒達もどこか楽しそうな先生だなという事を理解していた。

「だから今日はプリントだけ配つて、やる事は明日やる事にする！　誰か、プリント配るの手伝ってくれる奴はいないか？」

瞬間、クラスの男子生徒の大半が、まだ新入生というひよつこの分際では考えられないキレとスピードで、我こそはと手を挙げ始めた。

「お、良いねーやる気あるじゃん。まあ、何人か下心丸出しの奴もいるみたいだけどさ」

ニヤニヤと意地悪に笑いながら、挙手をした男子生徒達を見渡す大熊。

すると、何人かの真面目そうな雰囲気を持つ男子生徒達が、ゆっくりと挙げていた手を下ろしていった。

「言っとくけど、こう見えても私は確りと相手を選んで付き合うタイプだから、まだお前達じゃ十年早いよ♪ それに高校生なら同年代と付き合ったほうが楽しいしね、そっちに努力の趣を置きな」

やはり教師というぐらいの年齢にもなれば、自分の容姿がどれぐらいのものか客観的に理解できているのか、その口調は自信に満ちたものであった。

「ただ、さっきも言ったけどやる気は買ってやる。大体下心程度で恥ずかしがる事なんて無いんだ、むしろそれを原動力にして動かないと若者らしくないしな。じゃあ、そこの一番前の男子、プリント配るの手伝ってくれ」

そう言って、最前列ど真ん中の席に座っていた坊主頭の男子に指示を出す。

「はい！」

勢いのある返事とともに、指示を出された男子生徒が立ち上がった。

「お、良い返事じゃないか。お前は何部だ？」

「野球部です」

「ああ通りで……金本先生なら納得だわ」

大熊は他愛の無い会話を指示を出した生徒としながらも、持っていたプリントを三つに分けた。

「じゃあ、お前はこれを配ってくれ」

「はい！」

再び勢いのある返事と共に、差し出された一つのプリントの束を受け取る男子生徒。

どうやら大熊は二つの束を自分で配るようだ。

まあ、入学初日の生徒をいつまでも前に出しておくのは可哀想か

もしれないという配慮からだろう。

そして、二人は分けたプリントを、それぞれクラスメイト全員に配り終えた。

ここからは、ただこれからの約一週間を事務的に伝えるだけだったので、閑話休題させていただく。



配布されたプリントを眺めつつ、高校初めてのHRを終えた美夏は。とりあえずこれから何をしようか考えていた。

先ほど、教卓でこれからの予定などを話す大熊の眼を盗んで送った、兄へのメールはまだ返事が来ていないし。学園にいる筈の兄を置いて、先に帰宅するというのもありえない。

どうせなら、入学祝いとして昼食だとか買い物だとか、一緒に外を歩いて回りたい。

しかし、返事が返ってこない事には動きようが無いので、美夏はまた手持ち無沙汰な感じを味わっていた。

他のクラスメイト達は、皆これから家族と食事だったり一緒に帰宅だったり……または新しく出来た友人と遊びに行くだったりと、それなりの賑わいを見せている。

そんな中でも、やはり美夏に声を掛ける男子生徒はいたし、新生代表として挨拶をした事に興味を持ってくれた同性の者達もいた。だが男子など兄以外汚物としか考えていないこの妹に、薔薇色の高校生活を夢見た連中に靡くなどありえる筈も無く。そのこと如くが絶妙な当たり障りの無い断り方で撃沈していた……もったも、撃沈したと感じている男子などいなかった。それほど上手く断ったということだ。

また同性にも同じで「これから兄と予定があるから……」と、本当に申し訳なさそうに断っていた……のだが、やはり格闘家といえども有名人を兄に持つという事には変わりなく、ミーハーな性質を

持つ彼女達から質問攻めに合うという出来事を味わった。

しかし、ここでも彼女の驚異的な能力が発揮され。

いかに兄であるあの“異性”が素晴らしいのか？

いかに、その兄に相応しい異性は自分以外には存在しないのか？
などの事を語ることを、唇を噛み千切りたいほどに我慢をしながら、いわゆる印象操作を行なった。

簡単に言ってしまうえば、興味を持った彼女達から、兄という存在をどれだけ薄れさせるか、どれだけ幻滅させるのかという事をしたのだ。

だが、恋に恋するなどではなく、兄との恋愛を生涯をかけて熱望している彼女に。愛する兄を蔑む事など酷な事であり、結果中途半端な形に落ち着いてしまったことは彼女にとって誤算であった。

実際、半々の結果に持ち込んだこと自体、彼女の思いにとっては驚異的な数字だったのだが……。

まあ、その話題に上がった当の本人がイケメンというよりも男前に近い、若い女子高生には中々理解され辛い顔立ちをしていた所為もある事にはあったのも要因といえる。

「さつきは大変だったねー桐嶋さん？」

「まあ、慣れてるからね。それ程でも無かったよ」

人当たりの良い陽気な声で、美夏に労いの言葉を送る木下。

今はHRも終わり、各自自由に下校が許されているため、木下は美夏の直ぐ横で机の上に腰を乗せて座っている。

しかし、それにしても背の高い娘だ……と見上げながらに思った美夏ではあったが、決して口にするのではなく、話を続けた。

「やっぱり中学でも有名だったの？ 桐嶋さんのお兄さんって」

「そうだね、TVに出た去年ぐらいから急になって感じかな？ もともと、雑誌とかでも取り上げられてたけど、やっぱりそこが一番大きかった気がする」

「へー、あたしも結構格闘技とか好きだから見るけど、お兄さんって本当に強いし良い体してるよね。初めて見たときは一つ上だって

全く気付かなかったぐらいだし」

「本人はそれを気にしてるみたいで、結構『今日年上の人に“年上でしょ？”』って言われた』とか言ってるよ」

あれ……なんだか、この木下という同年代の娘と話していると、打算なしに自然と会話が出来る気がする。

もともと中学でも、こんな雰囲気娘の娘は沢山いて、結構仲良くやってたけど。やっぱり、サバサバとした性格の人と話すのは気が楽だ。

先の通り、美夏と言う新女子高生は、自身の兄に悪い虫を寄せ付けないために様々な小細工を弄してきた。

しかし、これは例えば美夏を通して兄と接触を試みようと思っている者や、同じく美夏という男が寄り付いてきそうな甘い蜜に集ってお零れを貰おうとする蛆虫以下の同性だった場合にしか行使されず。木下の様な、打算なしでこちらと仲良くなろうとしている者には機能しないのだ。

また美夏は、これまでの経験からそういった輩の見分け方を心得ているので、まず間違えるということはない。

故にこの時、不思議な高揚感を感じられる木下に対して、美夏は純粋に友人になりたいと考えた……が、それよりも先に木下の方が同じ事を考えていたようだ。

「外見の割りに面白い人なんだね。てか、桐嶋さんも何だかんだで面白い人だよね♪」

「え、なんで？」

「だって入学式終わったばかりだっていうのに、いきなり校門前にいたお兄さんに抱きつきに行くんだもん。あの時は流石にビックリしたね。桐嶋さんって、結構ブラコン入ってるって言われるでしょ？」

この面白がって問いかけてきた質問に、美夏は即答で『ブラコンじゃなくて愛しているのよ!!』とかなんとか答えそうになってしまったが、それはなんとか押し留めることが出来たようだ。

「うーん、確かに言われたりはするけど、私としては普通に接して

るだけなんだけどな……」

「あれは正直普通じゃないって……まあ、でも兄妹仲が良いって悪いことじゃないしね。桐嶋さんって他に兄弟いたりするの？」

「うん、小学生の妹が一人いるよ。私よりも、妹の方がお兄ちゃんにベツタリって感じかな？」

「へーそうなんだ。桐嶋さんの妹って事は、相当可愛いんでしょ」

「そうだね、今のところもう既に40人の男の子から告白されてるんじゃないかな？」

「40人!？」

なんだその魔性の女は！ 半端な数じゃないぞ小学生!？」

木下は、そのあまりに飛び抜けた数字に素で驚きの声を漏らしてしまう。

「え、でもそれってホントなの？ ただ妹さんが言ってるってだけじゃないの？」

「うちの妹は、簡単にそういう事はバラさないからね、すごい口が堅いし」

「じゃあ、なんで40人もいるって分かったの？」

「普通に机の中から出てきたんだよ、40人分のラブレターが」

その事実には、更なる驚きの色に染まる木下の整った顔。

「なんでそんなに机の中に入れてたの？」

「なんだか、折角気持ちを伝えるため一生懸命に書かれたラブレターを捨てるのは悪いから、処分に困ってたんだって。それでドンドン溜まっちゃって、終いには勉強机の一つの引き出しを占領するぐらいになっちゃったらしいよ」

「はー……あたしならすぐに捨てちゃうから、あまり理解は出来ないけど。なるほどね、何となく桐嶋さんの妹さんがモテる理由が分かった気がする」

よく言えば純粋な良い子で、悪く言えばどこか抜けた子……。

まだ見ぬ相手の妹ではあったが、木下はその娘の事を“きつと将来は末恐ろしい女になるね”と勝手に本人が聞いたらちよっと困っ

てしまいそうな評価を下していた。

「まあ心配りも出来るし家事も出来るし勉強も運動だって人より出来ちゃう娘だからね。我が妹ながら誇らしい反面、もっと色んな面で楽に構えて欲しいって感じかな」

「新人生代表を務める桐嶋さんが、そこまで言うなら凄い娘なんだね。でもそうになると、お兄さんが色々黙ってないんじゃない？ほら、告白してきた子に対して脅迫めいたことするとかさ♪ なんだかあの人って、子育てとかしたら過保護っぽいイメージあるんだよね」

子育てというワードを、美夏は一瞬の内に脳内で“子作り”に変換させ妄想を膨らませた後。その様子を全く外見に出さず、直ぐに木下の方へと意識を向け直した。

まっこと、神業がかった思考の切り替えの持ち主である。

「ああ、それは確かにあるかも♪ お兄ちゃんって、この学園の近くにある道場で支部長をやってるんだけど。そこに門下生としている私の妹と同じ学校に通っている子に対して、遠回しに『妹と付き合いたいのなら、俺を倒さないとダメ』みたいな事を言ったときがあってね……」

美夏は当時のことを楽しそうに語りだした……。

内容自体、シスコンを否定はしているが否定しきれなかった兄のエピソードだったのだが。

普段TVでしか美夏の兄を見たときの無かった木下にとっては、どこか新鮮というかイメージ通りの人というか……そんな有名人の新たな一面を発見した時の様な、少し嬉しい気分を味わえたのであった。

それから数十分後、他愛の無い会話をした二人は、いつの間にかお互いに下の名前で呼び合うような関係になっていた。

多分、二人はもともとそりが合う者同士だったのだろう。

出なければ、こんなに早く意気投合するというのも難しいというものだ。

だが、そんな新しい友人と会話をするという楽しい時間も、そろそろ終わりにしなくてはならないようであった。

「あ、もう13時回ってる……」

「え？ もうそんなに時間経ってたんだ。気付かなかったよ」

「私もだよ。じゃあ、今日はそろそろ帰ろうか？ 私、この後、お兄ちゃんと会わなきゃいけないから」

「そうだね。私も家の連中とご飯食へに行く約束してたし、そうしようか」

二人はそう言って同意し合うと、互いに座っていた場所から立ち上がった。

やはり、高校一年の女子にしては背の高い美夏にとっても、木下藍という女子はデカク見える……しかし、スレンダーな体型のお陰で、特に威圧感などは感じられない。

むしろ、ウエストが55以下の美夏をもってしても、彼女のしなやかでアスリートの様な体型は綺麗だと思うし、とても魅力的に感じる。

おそらくこの娘も、色々な男子に好意を抱かれているのであろう。多分、それに気付いていないかもしれないが……。

先ほど配布されたプリントが入れた、殆ど空っぽの鞆を肩に掛けると。美夏と藍は共に教室から出る。

お互い御揃いの制服を着た、タイプは違えど見栄えのする者同士なので、ただ並んで歩いているだけでとても絵になる光景を作り出していた。

片や女性らしい膨らみや可愛らしさを持った、凹凸がハッキリとした体型のタイプに。片やボーイッシュな雰囲気を出しながらも、モデルと見間違えても可笑しくは無いスレンダーな体型をしたタイプ。

これだけでも、思春期の男児ならば小一時間程議論が行なえるというものだ。

二人は四階の階段を急ぐことも無く下りて行き、校舎の一年生専

用の出入り口である第三出入り口から、履いているものをローファ
ーに履き替えてから外へと出て行く。

ガラス張りの両開きのドアから外へと出ると、そこにはやはり地
面であるアスファルトとは対照的な桜の柔らかな色が出迎えてくれ
ていた。

また第三出入り口の近くには一年生専用の地下駐輪場があるのだ
が、美夏と藍には特に関係の無い施設だったので、二人は現代的な
エレベーターと地下駐輪場への坂道などは無視して学園の校門へと
足を進めていく。

春の風が、二人の髪やスカートを揺らしていく。

美夏は揺れる髪が顔の前に来るのが嫌なのか、顔の横の髪を片手
でちよつとだけ抑えながら歩いていく……その姿はどこかお嬢様と
いった雰囲気醸し出していた。

隣を歩く藍は肩に掛けるタイプの鞆を——こちらの方が楽な
のか——片手で肩に担ぐようにして持ち、春風に晒される赤み
がかったボーイッシュなショートヘアなどは抑えるのも面倒なのか、
片目を瞑るだけで対処していた。

「なんだか午前中より風が強いね」

「こういう春風って気持ちは良いんだけど、たまに目に自分の髪と
か飛んできたゴミとかが入ってくるから鬱陶しいんだよね」

先程からそよ風のように吹くときもあれば、突然ブワッと目を細め
たくなる風も吹いている。

だがそんな事よりも、二人は先程一回だけ通ってきた二橋学園の
様々な施設が見られる広い道を、あっちへこっちへと好奇心の眼差
しを左右させながら歩いていた。

また、敷地内にも桜の木が所々にあるため、非常に視覚的にも喜
の感情を高めさせてくれるものであった。

そして、学園の校門へと辿り着いた二人の目に、少々信じ難い光
景が飛び込んでくる。

「ねえ、あれって……」

「うん、お兄ちゃんなんだろうけど……何やってるんだろ？」

校門の向こう側には、さっき入学式後に歩いた赤い煉瓦が敷き詰められた道の桜並木がある……だが、二人はその桜並木から“一人の男を背負って歩いてくる”、上をブレザーではなくワイシャツ一枚となった桐嶋竜蔵に視線を向けていた。

岩石の様な筋張った太腕と、その腕を後ろに回しているために広がっている大胸筋が非常に力強そうで、後ろに背負っている男を絶対に落さないだろうという安定感を回りに与えていた。

そしてやはり両脇に抱えている、背負っている男の足に挟まれた腹回りは、理想的な逆三角形を描くだけではなく、ワイシャツの上からだというのに六つの筋肉の塊の存在を強調させていた。

また竜蔵のブレザーは、背負っている男の肩に掛けられている。

「ごめんね、ちよつと行つて来る！」

「あ、待つてよ美夏！ 私も行くから！」

なんだか訳の分からない光景を眺めていた美夏と藍は、とりあえず既に校門を跨いだ竜蔵の下へと向かった。

「何してるの？ お兄ちゃん？」

「うん？ おく美夏か、待たせちゃったな」

状況がイマイチ理解できないため、案外普通に尋ねた美夏に、竜蔵がちよつと機嫌が良さそうな口調で答えた。

美夏が竜蔵の前に立つと、遅れて藍も駆け寄ってくる。

「うわ！ その人、顔怪我してるじゃないですか！」

駆け寄ってきた藍が開口一番、竜蔵のゴツゴツとした僧帽筋やら広背筋やらの背中に背負われた男を見て驚きの声を挙げる。

最初に駆け寄ってきた美夏はどうやら、兄以外の異性を視界に入れるのも嫌がった所為で、今気付いた様であった。

「ああ、ちよつとコイツが暴れててね。言うこと聞かないから手っ取り早く済ませたら、こんななんだった」

「うわ……モロ鼻血出てるじゃないですか」

「まあ、もう止まって乾いちゃってるけどね。ところで、君は？」

「はい？」

金で染められた長髪のせいではなかなか確認し辛いですが、確かに竜蔵の言う通り、背負っている男の鼻血は止まっている。まあ、唇の方も数箇所の切り傷があるし、気を失ってもいたが。

だがそんな男を背負っていても普通に世間話でもしようとする雰囲気きの竜蔵に、一瞬藍は呆気にとられた顔をしたが。

「あ、木下藍です」

「背が高いね。何部に入るの？」

「一応、女バスに特待で……」

「へー凄いじゃん！ 肌の色とか髪の色とか、もしかしてハーフ？」

「あ、いえ、日本とアイルランドのクウォーターです」

アイルランドと聴いた瞬間、一瞬竜蔵は某有名プロレス団体に所属している白人の選手を思い浮かべたが、おそらく言っても伝わらないと思ったので自重した。

すると、二人の初対面の会話に美夏がどこか不機嫌な表情を割り込んできた。

「ところでさあ、後ろの人、早く保健室に運ばなくていいの？」

「ああそうだった、忘れてたわ」

「もう、確りしてよねお兄ちゃん」

「はは。まあ取り合えず、俺はコイツを運ばないといけないから、もう少しだけ待っててくれない？」

「待ってるのは良いけど、なるべく早くしてね？ もうお腹が空いて仕方が無いんだから」

「分かったよ、それじゃあ、また後でな？」

そう言って、軽い笑みを浮かべながら美夏と藍を過ぎ去っていこうとする竜蔵に。

藍が思い出したかのように口を開いた。

「そういえばお兄さん！ 確か、携帯で保健室の方に連絡すれば、直接専用の車とか出してくれるんじゃない？」

藍の言った事は、この広い二橋学園だけに限らず、学園都市の全

区画で取られている制度であり。

学園都市内に存在する全ての学校・学園には、生徒達の緊急を要する怪我や病気などが起こってしまった際に、すぐに保健室や病院へと運ぶための専用の足……つまり輸送車を用意する事を義務付けられているため、電話一本入れれば現場に走らせてきてくれるという非常に便利な制度がある。

だが実際には、緊急を要する境目が分からないために、大抵は保健室などではなく近くの大学病院などに搬送される事が多い。

藍が竜蔵に提案したのは、わざわざ広い敷地内を男一人背負って歩くのではなく、この専用の足を使っ**て**はどうかという事であったのだ**が**。

「いや、一応これって“勧誘”も兼ねてるから、使う気はないね」「“勧誘”……ですか？」

その言葉に、藍は首を傾げざる負えない。

藍の仕草を見て、竜蔵は軽く微笑みながら「結構根性ある奴だったからさ、ラグビー部に引っ張ろうと思って」と短く説明をした。

竜蔵が所属する二橋学園ラグビー部とは。

学園都市内でも有数の強豪チームとして知られていて、毎年シーズンになると必ず県内の大会で決勝・準決勝には上がってくるチームなのだ。ちなみに竜蔵は、このチームのFLというポジションでレギュラーを張っている……空手の実力でも格闘技界最高峰の団体に所属し、ラグビーの強豪高でもレギュラーを張るとは、恐るべき身体能力と才能の持ち主である。

しかしここで、普通の思考の持ち主なら疑問に思うことがあるかもしれない。

そんな強豪高の部活に、どうみても素行の悪そうな新生入生を無理やり入れるのは大丈夫なのかと？

だが……。

「なるほど、そういう事ですか」

もともと活発で男勝りな性格をしていた藍は、この短い説明だけ

で何かに納得した様であった。

しかし後ろでは美夏が（早くお兄ちゃん来ないかな〜♪）と、眼中にない異性など気にする価値もないとでも言うかのように、次に備えていた。

「でも、根性があるって言ってましたけど……お兄さん、その人と違って全く怪我とかしてないですよね？」

納得はした事にはしたが、やはり何か引っかかったのか、藍が素朴な疑問をぶつける。

すると竜蔵が、軽く「ぷっ」と噴出した後、口を開いた。

「いやいや、一応俺もプロだからね？ 素人に怪我なんてしてちゃ、面子が保てないから」

「でも、根性があるって……」

さも当然の様に言う竜蔵に、少々驚く藍。

だが疑問が解けたのではないので、再び尋ねると。

「それはただ、コイツが手加減したとはいえ膝まともに蹴り喰らって、ちよつとの間だけ立とうとしてからだよ」

「は、はあ……」

軽い調子で言う竜蔵に、若干引き気味の藍。

そりゃそうだ……プロの格闘家が、素人の顔面に膝蹴りを入れたというのだから。

おそらく、背負っている男の背が竜蔵よりも高いため、首相撲からの膝蹴りだとは推測ができるが。それにしたって、エグイ技で仕留めたものだど、藍は胸中で考えていた。

「じゃあ、美夏待たせる訳にいかないし、俺は行くよ」

「はい、お気を付けて？」

「はは、じゃあね。美夏をよろしく頼むよ？」

そう言って、ようやく竜蔵は校舎の方へと歩いていった。

美夏をよろしく頼む……つまり、状況的に入学式で妹が既に友人を作ったのだと推理したのであろう。

校舎の方へと向かっていく竜蔵を見送りながら、藍は後ろにいる

美夏へと振り返った。

「なんだか初めて話したけど、豪快？ いや、大雑把な人なんだね、美夏のお兄さんって」

藍の素直な感想に、兄が戻ってくるのを待つ気持ちに切り替えていた美夏は。

「え？ まあ確かに大雑把と言えば大雑把だけど。確りしてるところもあるんだよ？」

自身の兄の話をするだけで嬉しいのか？

表情にホクホクと暖かい微笑みを浮かべる美夏。

これを見て、藍は胸中で（ああ、やっぱりこの娘は相当なブラコンなんだな）と確信するのであった。

新しい環境、新しい友人（後書き）

一応、改訂前の時に書いていたキャラクター達のイメージ絵です。
ですが主人公である美夏は、また書き直そうと考えているため、
今回は載せていません。

※いらないと思う方は、各々で好きにイメージしてください。

桐嶋竜蔵“美夏の兄”

> i 3 0 0 2 6 — 2 3 7 9 <

木下藍“高校で出来た友人”

> i 2 8 7 6 4 — 2 3 7 9 <

基本コピー用紙にシャープペンで書くド素人なので、この程度のレベルしか書けません。今後とも自分なりに納得の出来た絵が描けたら、勝手に載せたいと思いますので、あしからず……。

『伊藤の空間』（前書き）

今回以降の更新は、私事の事情によりかなり遅れます。

よって、この話しは急いで仕上げたために小さなミスがそこかしこにあるかもしれません。

いつかちゃんと直そうと思います。

『伊藤の空間』

二橋学園から出ている学生バスを使って、本来のバス停とは違う目的地へと向かう美夏と竜蔵の二人。

あの後、背負っていた男を保健室に預けてきた竜蔵が妙に満足気な表情で戻ってきたときには、既に木下藍の姿は見えず、それを美夏に尋ねたところ。

「藍も、この後に予定があるみたいだったから、先に帰ったよ」

との事で、ようやく二人も学園から出たという訳であった。

バスの車内は、既に同じ学生の姿は見えず、美夏と竜蔵の貸しきり状態となっている。

学園にはまだ、生徒会などの生徒達が残っているが、どうやら二人はタイミングに恵まれたらしい。

故に、人がいない寂しい車内にある後部の二人掛けのシートだけを、美夏と竜蔵で埋めていた。

竜蔵の肩幅が広い所為で、先程からバスに揺られる度に、美夏の肩に兄の鍛え上げられた制服越しの三角筋が当たってくる……しかし、美夏には嫌そうな表情など一つも無い。

むしろ先程からニヤニヤと嬉しそうに微笑んでいるだけだ。

竜蔵自身、妹の入学式に出席できなかったことを後悔しているの
で、なにやら嬉しそうな彼女を見て悪い気はしない。ただ、なんで嬉しそうにしているのか分からないのが問題なだけだ。

だが、そんな事は美夏自身理解している……兄にそんな甲斐性があれば、もっと浮ついた話がいくつあっても可笑しくは無いからだ。
「そういえば、新入生代表の挨拶はどうだったんだ？ 上手く出来たのか？」

「上手くもなにも、ただ昨日書いた挨拶の文章を暗記すればいいだけだったから、特に失敗したとかは無いけど？」

「暗記ね……俺じゃ無理だな。前に出て体動かすならともかく、何か言うだとか宣言するだとかは緊張しちゃうからな」

何と言う脳筋……という考えなど、兄を崇拜していると言っても過言ではない美夏には一切浮かぶ事は無い。

むしろ、そんな事を言う兄にたいして心の中で（お兄ちゃんが弱い部分を曝け出すなんて、ギャップ萌え！？ これはギャップ萌えなの？）などと興奮しているぐらいなのだから。

ちなみに、この興奮も外に出すことは無い……いくら愛しているといっても、相手に見せていいレベルとダメなレベルがあるという事を、美夏は一応弁えているからだ。

窓際に座っている美夏の横で、外の風景が流れるように過ぎ去っていく。

その間も、二人の他愛の無い会話は続き。

いつもとは違った目的地に到着したときに感じた時間の経過は、それはもう短いと感じるものであった。

『次は～二橋駅前～二橋駅前御座います』

バス内のアナウンスが、美夏と竜蔵の目的地であった場所の名前を流し始め。

これに反応した美夏が手馴れた手つきで“降りる”のボタンを押し、隣に座っている竜蔵に振り返った。

「ところで、行く場所とか決めてるの？」

ウキウキとした表情を隠そうともせず、竜蔵を上目遣いで仰ぎ見る美夏。

我が妹ながら、それを身内ではなく異性に向けていれば何人の馬鹿が引つかかるのかと考えた竜蔵であったが。まあ、そんな事をしなくても既に選り取りみどりの状況なんだろうと、改めて妹の優れた容姿に感心を覚えた。

しかし、ここで困ったことが発生する……。

「いや、特には決めてない」

「えゝ！？ 自分から埋め合わせするって言ったのにつ！？」

「え、俺が考えなきゃいけなかったのか？」

「当たり前でしょ？ もう」

実はこの兄、入学祝をしようと言ったくせに、ノープランで街に繰り出そうとしていたのだ。

それに、頬を膨らませながら抗議の意思を示す妹。

確かに可愛らしい仕草ではあったが美夏の場合、それをするには少し大人っぽい雰囲気があり過ぎていたために、どこか滑稽に見える……まあ、グツと来るものが有るのには変わりはないが。

だが向けられている対象は身内である兄なために、全く持って反応を示さない。

というより、ちょっと困った表情をしていた。

「あゝ……いや、今日はお前が行きたい所とかに行こうと思ってから」

「言い訳はいいよ。だけど、今度からは自分で誘ったんなら自分で行く場所を決めときなよ？」

「ああ、分かったよ」

竜蔵が美夏の指摘に不承不承と頷くと、どうやら丁度バスが目的地へと到着したようだ。

エアブレーキの音と共にバスはバス停の直ぐ横に止まり、入り口と出口の全ての扉を開放した。

「さて、行くぞ美夏」

「うん♪ でも、ちゃんと今言ったことは覚えててよね？」

「はいはい」

もともと手荷物など持っていなかった制服姿の竜蔵は、美夏の荷物を代わりに持ちながら席を立ち、バスを降りていく。美夏も、スカートに皺が出来ないように座っていた状態から立ち上がり、バスのステップを軽やかな足取りで降りていった。

駅前のバス停という事で、そのロータリーに並んで立つ二人の

前に。二橋駅と大きな看板に書かれた、それなりに大きな現代風の駅が佇んでいた。

その駅には、これから利用しようという人々が行き交い、周りには美容院やら飲食店、携帯ショップなどといった様々な店が所狭しと構えており、非常に賑わった雰囲気醸し出している。

「で、とりあえず、まずは飯だろ？」

「そうだね、流石にお腹空いちゃってるし」

「じゃあ、この辺だとどこにしようかな……」

学園都市の街並みというのは、それほど普通の街とは変わるところは無い。

変わるところといえば、その行き交う人々の殆どが学生というだけで、背の高いビルやゲームセンター、家電量販店など見つけようと思えばいくらでも普通の街と同じ箇所を見つけられる。

だが、これらの店舗や会社を経営しているのは確かに企業の大人たちなのだが、その従業員の殆どは大学生やら学生達の親やら、はたまた学園都市が外から雇ってきた大人たちだったりと少々特殊な人選をしている。

まあ、この話はここまでにして、今は二人の方へとスポットライトを戻すことにしよう。

竜蔵は二橋駅付近で、とりあえず昼食を取れるようなところを記憶の中から掘り出していく……。

しかし出てくるのは牛丼屋だったりラーメン屋だったり、男が遊びがてらに軽く済ませるような所ばかり……流石に、妹の入学祝と銘打ったこの状況で、そんな所をチョイスするヘマなど竜蔵はしない。

故に悩む……そして後悔する。

（俺って、本当に洒落っ気の無い遊びをしてたんだな……）

普段空手仲間だったたりラグビー部の連中とだったり、男臭い集まりでしか遊んでこなかった竜蔵にとって、これは仕方の無い事であったが。手痛い状況に陥っているのもまた事実。

ニコやかに兄のチョイスを待つ妹の横で、眉間に皺を寄せながら唸って悩む竜蔵……。

傍から見れば、厳つい肉体をした男が眉間に指を当てながら渋い顔をしているという、どうみても怒っているような空気を出していたので。周りを行き交う者達は美夏の優美な姿に見惚れた後、隣の兄の姿を見てすぐさま視線を反らすという条件反射を起こしていた。

すると、竜蔵の頭に一つの店の風景が浮かんだ……。

「そういやあ、あの店ってまだ有ったっけかな？」

「うん？ あのお店って？」

ポツリと呟いた竜蔵の言葉に、美夏がまた再び上目遣いで覗き込むようにして視線を向ける。

あざとい、なんてあざといんだ……と思うかもしれないが、兄に對してだけは、美夏は打算抜きで攻めている。まあ、それもそれで問題ではあるが。

「いや、中学の時に“鬼姫”って奴がいただろ？」

その問いかけに、美夏の声音がワントーン下がり、表情に至ってはジト目で竜蔵の事を見る様になっていた。

「いたね、そんな人も」

「そいつと一緒に遊びに行った時に、教えてもらった場所があるんだわ。そこならお前も満足できると思う」

「へー、一緒に遊びに行ったんだ（あのゴリラ女と）」

「ああ、そのときはアイツもやっぱ女子だったんだなって考えを改めたな、流石に」

当事を思い出したのか、懐かしむように微笑みながら美夏に語る竜蔵であったが。

そろそろ美夏のテンションがダダ下がりなのに気付くべきだろう……まあ、身内という事で気にしてないという事もあるにはあるのだが。

「とりあえず、さっさと行くか。俺も腹減ってるし」

「そうだね、そうしよう」

二人は各々違ったテンションの具合で、バス停がある駅前ロータリーから歩を進めた。



二人が向かったのは、駅周辺の大通りをちよつと進んだところにある横道に入った場所だ。

そこにあったのは、第一区に学校があったり家があったりする生徒達が良く遊びに来る。ちよつとしたガーデニングや、それに合わせた赤茶色の地面に、ウッドデッキなどでテラスを構えているカフェだったり立ち並ぶ、少しお洒落な繁華街であった。

学園都市では車よりも交通手段がバスや電車、はたまた自転車が主流な訳で。こういった駅周辺の繁華街といった地域には、全く持つて通行人達の邪魔になる車やらなんやらの進入は無い。あるとすれば、深夜や早朝に来る業者のトラックぐらいのものか。

故に駅に近い繁華街を行き交う人々には、そういった突然通路を塞がれるといった心配も無いため。普通の繁華街を歩くときよりも、どこか安心した様子が見られる様な気がした。

まあ、あくまで見られる様な気がしただけだ……本当は、別段学園都市外で見られるものと変わりはないと言えるかもしれない。だがまあ、そういった無用な時間を喰うといった心配が無いのは事実なのだ。

行き交う人々は殆ど学生……たまに社会人の様にスーツを着た人や、明らかに十代二十代ではない年齢の方々も見事出来るが。そういった人たちは、大抵近くのお店やオフィスから昼を求めて彷徨っている人達だと、ここでは相場が決まっている。

そんな大半が学生だらけの繁華街の道を、美夏と竜蔵は肩を並べあつて歩く。

「なんだか、皆こっちを見てるね♪ 私達を恋人同士だと思ってるのかな？」

今にも油断をしたら思いっきり腕を組んでくるぐらいに、こちらの様子を伺いながら笑顔を向けてくる美夏に。竜蔵は少々うんざりとした表情をしながら。

「勘弁してくれよ……ただでさえ、部内でシスコンシスコン言われてんだからさ。それと、腕は組まないからな？ お前も、もう高校生だろ」

もし、こんな学生だらけといっても、更にその大半がカップルで構成されている空間で知っている奴らに見つかりでもしたら……桐嶋家の家族構成を知る者たちにとって、これほど弄り甲斐のあるネタは無いだろう。

ましてや本日付で、同じ高校に入学したのだ。

見つかってしまった時のリスクは想像だけに出来ない。

「ぶっ！ 別に見られたって良いじゃん！ 兄妹同士なんだからさ！ 大体、年齢なんか関係ないじゃん！」

「お前は良いかも知れないけど、俺はやなの。分かってくれ、頼むから」

そう言いながら、右腕に絡もうとしてきた美夏のオデコを反対の左手で押さえる竜蔵。

視線は正面を向いたままで、もはや手馴れたように片手間でやるその光景は。これが二人が外を一緒に歩くときの常識なのだと教えてくれていた。

だが、周りにいる者達——主に男性陣——は納得がいかないようだ。

『あの野郎、あんなに可愛い子連れてるのに腕も組ませねえなんて……』

『見せびらかしてるんだろ？ 気分わりい』

『あれ？ あれってもしかして、桐嶋竜蔵じゃね？』

といった具合に、嫉妬だったりという様々な感情が男性陣の中では渦巻いていた。

しかし、ここにいるのは大半がカップルということを前記した筈

だ。

故に、美夏という十人いたら変な趣味の者がいない限り十人が美少女と答える女性に視線を奪われていた彼氏に、彼女による何かしらの制裁が其処かしこで行なわれていたのは言うまでも無い。

お昼時の時間も過ぎ、店からまた繁華街を回ろうとする若者達が出てきた事によって雑多とし始めた道を、いつも通りな感じで歩いていく二人……。

途中、美夏の嗅覚を刺激する、とても美味しそうなコーヒーの匂いがするオープンテラスなカフェを見つけたりしたが。竜蔵が「コーヒーとかカフェオレとかじゃなくて、飯食いに行くんだろ?」と言ったために、美夏は渋々そのカフェを諦めるのであった……いつか、あの店には絶対に入ってやる。

しかし、いつ昼食に辿り着けるのか?

入学式が終わり、ちよつと新しく出来た友人と他愛の無い会話で時間を潰してしまい、お昼時を逃してしまつたまでは良い、そんな事は良くある事で済む……だが、あれから既に一時間も経つたというのに、まだお昼にありつけないとはどういった事なのか?

流石の美夏も、さっきから何やら周りをキョロキョロとしている兄にビシツと言ってやらねばと思つたようで。

「お兄ちゃん? 一体いつになつたらお店に着くの? もしかして迷つたとかじゃないよね?」

疑うような視線で、右隣を歩く竜蔵を見る。

が、どうにも反応が見られない……。

これは、もう一回言わねばダメかと考えたとき……。

「あ、あつた」

「ほえ?」

竜蔵の声に、美夏も思わず呆けた声を出してしまふ。

普段の美夏なら、こんな声は出さないのだが……やはり空腹や信頼できる者が近くにいる場合、気の緩みというのがどうしても出てしまふのだろう。

だが、今はそんな場合ではない。

「どこ！ お店どこ！？」

あまりの空腹に、竜蔵の視線を一生懸命に追う美夏。

「あそこだ。あの緑の店」

そういつて、ゴツゴツとした手の指で示す竜蔵……その指の先に、視線を向けてみると。

「おお、お兄ちゃんにしては結構お洒落な店が……」

美夏の視線の先に、一軒の緑を基調としたパスタの専門店が、他の飲食店と並んで店を構えていた。

店の窓付近には、視覚的に不快にならない程度の色とりどりの花が並べられ。他にも店の人が育てているのだろうと分かる花が、店先に並べられている花壇に植えられていた。

店の入り口前に置かれている緑の縁に黒いボードの看板に書かれた『祝入学記念メニュー1100円』の明らかに女性による手書きの文字は、年頃の美夏に好感を持たせ。他にも『春の新作メニュー・旬の魚介と春野菜を使用したペロンチーノ1000円♪』だったり『蛸タコのカルパッチョ680円だにゃ』だったり……非常に今のハングリー精神旺盛な美夏に対して挑戦的なメニューの数々が記されていた。

「あーもう我慢できないよー！ 早く入ろう！ ね！？」

「分かったから、いきなり手を引っ張るなよ」

もう我慢の限界だしする必要も無いと判断した美夏は、竜蔵の太い右腕が纏っているブレザーの袖を引っ張りながら、店の入り口へと走っていく。

そして美夏は、兄である竜蔵を引っ張りながら、その店の入り口の扉を開いた……すると。

カランカラン——『いらっしやいませ』

扉を開けると同時に、非常に落ち着いた店内の雰囲気と香り、そしてホール担当のウェイトレスの声が二人を出迎えた。

やはり店の外の雰囲気通り、中も濃い色の木材を使用した内装をしていて、非常に落ち着いた雰囲気を醸し出しており。カウンター式のキッチンでは、この店のシェフである二人の男性が衛生面に確りと気を遣ったユニフォームで手際よくパスタ料理を作っていた。

また、照明も明る過ぎず暗過ぎずで、どこか大人の店といった印象を初めて入った美夏に与えてくれている。しかも、客席も意図的に少なくしてある様で、店内の雰囲気だけではなく、実際にも騒がしくない程度の談笑が聞こえるシックで落ち着いた空間を作り出していた。

そんな中、最初に二人に気付いたウェイトレスの女性が近づいてきた。

「ようこそ『伊藤の空間』へ♪ 二名様で宜しいでしょうか？」

「はい♪」

「ではご案内しますね♪こちらにどうぞ♪」

店の名前で笑うものか……特に気にしていない美夏ならいざ知らず、竜蔵はこの『伊藤の空間』というネーミングセンスに吹き出す寸前だった。

そういえば前もこの店の名前で笑いそうになったっけかと、懐かしみながらも。

竜蔵は店内という事で、もはや諦めた美夏との腕組をしながら案内された席まで引っ張られていく。

「では、ごゆっくりどうぞ♪」

良く外からの日差しが当たる窓際の席に、美夏と竜蔵の二人を案内し座らせたウェイトレスは。メニューを黒いテーブルの中心に置いた後、そう言いながら一度深くお辞儀をし、二人から優美な足取

りで去っていった。

その間中、竜蔵はこの店のウェイトレスが着ている、フリルなどが目立つミニスカートの制服を眺めながら。着ている本人も中々に美人だったために、ついでにそっちも相手に嫌がられない程度にジツクリと見続けていた……。

「……お兄ちゃん？」

対面に座る妹の目が、こちらを蔑むように座っている。

「うん？ どうした？」

何事も無かったかのように美夏に視線を向け直し、中央に置かれたメニューを相手にも見えるようにテーブルの上で広げる竜蔵。

ああ、これは誤魔化す気だなと感じた美夏は……。

「今のウェイトレスの人って、なんだか垢抜けた感じで綺麗だったよね」

全く持って心の籠ってない賛辞……なぜなら、自分の方が数倍美しく愛らしいと確信しているからだ。

「そうだな、多分大学生だろう？ 高校生って感じはしなかったし」

バイトかなと、美夏を見ながら尋ねるが、どうにも様子が可笑しいことに気付く。

何と言うか、表情が読めないのだ……。

機嫌が悪いのか？ と考えた竜蔵は。

「どうした？ いきなり静かになって」

「いいえ、別になってませんよ」

急にこちらから視線を外し、外の景色を覗き始めた美夏……。

ああ、これは何かやっちゃったかなと、長い付き合いで培った経験から竜蔵が察すると。

「水をお持ちいたしました♪ ご注文はお決まりでしょうか？」

さきのウェイトレスが、水とお絞りを持って再び二人の前に現れた。

フワツとしたショートヘアを茶色に染め、おっとりとした目と雰囲気はこちらに安心感を与えてくれて。まるで彼女のために詠た

かのような胸元の開いたフリルのミニスカ制服は、男性客の視線を一身に集めていた。

そして例に漏れず、竜蔵の視線も彼女が独占し始める……。

水やお絞りをテーブルに置く際に前屈みになるため、どうしても強調してしまう張りのある肌が魅力的な大きな胸に、竜蔵は鼻の下を伸ばしてしまう。

「あ、もう少し待ってもらえますか？」

そう言えばとオーダーを催促された事を思い出した竜蔵は、すぐさまメニューの方へと視線を向けなおす。

これはいくら本能的な反応だったとしても、妹の前でだらしない顔は出来ないと判断した竜蔵なりの行動だったのだが……。

「……スケベ」

(うつ……)

もはや頬杖を付きながら、顔は外に向け横目だけでメニューを見ている美夏に、小声で棘のある言葉を突き刺されてしまう竜蔵。

声音的に機嫌も悪ければ、態度もメニューに向けている視線も最悪な妹。

だが内面はというと……。

(ふふふ、お兄ちゃんが私の機嫌を伺ってる……ちよつと悪い気もするけど、私と一緒にいるのに他の女に目を奪われたお兄ちゃんが悪いんだから、もう少し楽しませてもらおうと♪)

折角の入学祝に主役の機嫌を悪くさせてしまったと罪悪感を感じている兄を、まるで弄ぶかのように楽しんで観察していた。

「じゃあ、俺は明太子の和風パスタで。その……お前はどする？」

しかし、そんな妹の内面など知らない竜蔵が、よそよそしく低姿勢で何をオーダーするか尋ねてくる。

一生懸命にこちらの機嫌を直そうとする兄の様子に改めてグツと来ながらも、美夏は努めて内面を外には出さずに面倒臭そうな態度で「じゃあ祝入学記念メニューと食後デザートでイチゴDXパフェ」と常時ニコやかなウエイトレスに注文した。

ちなみに、美夏が頼んだイチゴDXパフェとは、メニューに表記されている値段が4000を超えている。

「かしこまりました♪ ではオーダーを再確認しますね♪ 明太子の和風パスタお一つ。祝入学記念メニューとイチゴDXパフェをそれぞれお一つで宜しいでしょうか？」

「はい、お願いします……」

メニューに載っている値段を暗算で合計した竜蔵は（ああ、これで俺の財布から諭吉が一枚旅立つわけだ）と、金は天下の回り物という世の理を悟り始めていた。

その様子を見て、美夏のS心が段々とボルテージを上げていく。（じゅるり……まずいわ。さっきまでの私の空腹を、お兄ちゃんの沈んだ表情が満たしていつてしまっている。これは、品が来るまで持つのかな？）

何度も言うが美夏という妹は、外見は至って平然を装っているが、内面はもはや眼が充血し涎も口端から漏れ出てしまうほどに興奮をしている。

すると、そんな外見だけは空気の悪い二人の様子を眺めていたウエイトレスさんが、何か気まづく思ったのか。二人の仲をフォローするために口を開いた。

「今日は“彼女”さんの入学式だったんですか？ お二人とも制服みたいですし♪」

瞬間、美夏の表情が一気に綻ぶ。

当然だ、何せ兄妹でも親子でもなく“学生カップル”だと思われているのだから。

こちらの空気を和ませようとニコやかに微笑んでいるウエイトレスさんに、美夏は緩みきった幸せそうな笑みを向けた

「はい♪ そうなんです♪」

どう考えても嘘の肯定なのだが、事情を知らないウエイトレスさんにとっては、この反応は真実なのだと錯覚してしまう。

「良いですね、私もそういう入学を祝ってくれる人とか欲しかっ

たな」

これまで営業のために丁寧な物腰だったウエイトレスさんが、妙に砕けた調子で美夏を羨ましがる。

おそらくこれが、女性店員と女性客が砕けあった時の様子なのだろうと、目の前で見ていた竜蔵は考えていたのだが……そうではない。

「あ、いえ。俺とコイツは別に……っ!？」

盛り上がる二人の間に入って、己と美夏が兄妹であると説明しようとした瞬間。

インテリア調の黒いテーブルの下で、竜蔵の右足が美夏のローファ―を履いた左足の踵によって踏み潰された。

暗に『お兄ちゃんが悪いんだから、今は黙ってようね♪』と、目の前でウエイトレスさんと談笑している妹に警告された気分陥る竜蔵。

一瞬抗議の言葉を吐こうとした竜蔵であったが、確かに――何が原因か分からないが――悪いのは自分なので、ここは黙っていたようと即座に決心するのであった。

本当に、こういった場面に滅法弱いなど、桐嶋家の男……桐嶋竜蔵は、己が弱点を再確認した。



「美味しいなこれ!」

「うん♪ 確かに美味しいよ! こんな店を“鬼姫”さんが知ってたなんて意外だったな」

二人がテーブルに並べられた、自分のメニューを食したときに思わず出てしまった素直な声。

その中にはどこか棘のある部分もあったが――特に他の女性の名前を態々出した妹――概ね味に関しては良好どころか絶賛の域に達していた。

「明太子と和風って書いてあったから、結構しょっぱいかとも思ってたけど。いい具合に醤油加減とかが効いてて、これは誰でも食えるな」

竜蔵がフォークだけで食していた明太子の和風パスタは、もともと濃い明太子の色を刻み海苔やネギ・大葉などを散りばめて調和させた盛り付けがされており。茹でる際に塩を少々絡められたパスタの匂いと相まって、非常に食欲をそそる風味を醸し出していた。

そしてそれを食せば、バターと醤油が混ぜられた明太子の味が竜蔵の舌を満たしてくれる。

これは、濃い目の味付けが好きな竜蔵にとっては最高のメニューとなったことであろう。

「へー、ちょっとだけ私のと食べ比べしてみようよ♪」

そう言う美夏の前には、祝入学記念メニューとして特別に作られた品がテーブルの上に置かれていた。

一つはマグロの焼きカルパッチョという、オリーブ油で軽く焼かれたマグロが薄切りにされ、水菜・リーフレタス・マッシュルームと共に桜の花が書かれたお洒落なお皿に盛り付けられた料理で、横には薄切りにされたレモンが添えられている

そしてもう一つは、なんとまあパスタ専門店だからこそ出来たことなのか？

唐辛子とニンニクを入れたオリーブ油を味付けとして使用した、ちらし寿司の様な色合いのパスタ料理だ。また、パスタにはもともと、軽くマヨネーズを絡ませているために、本当にちらし寿司のご飯の代わりとしてパスタを使った様に見える。

「そうだな」

美夏の提案に、竜蔵はスッと自分が食べていた明太子の和風パスタを前に出す。

しかし、当の美夏はというと……。

「違うよお兄ちゃん」

「へ?」

何が違うのか……いきなり言われた竜蔵は、全く持って目の前で悪戯に微笑んでいる妹の思惑が理解できていなかった。

だが、そんな竜蔵のキョトンとした表情を見て、美夏が甘えた様な声音で言葉を続けた。

「そのフオークで食べさせて？」

「ぶっ!？」

あゝんと、こちらに身を乗り出して口を開ける美夏に、竜蔵は思わず吹き出してしまう。

「何言ってるんだよ……」

「だって、私のフオークにはもうオリーブ油とかマヨネーズだとかが着いちちゃってるし、混ぜるわけにはいかないじゃん明太子とは？

だから早く〜？」

喋るために戻した口を、再びあゝんと開き直す美夏。

さっきまでの不機嫌さはどうしたと呆れる竜蔵を他所に、目の前の妹は本当にウキウキとした表情で、こちらからパスタを口に運んでやるのを待っている。

どうしてこんな事を……と、頭を抱えそうになる竜蔵であったが。「彼氏さん彼氏さん、祝いの席なのですから、ここは“ズドン”と行っちゃいましょう!」

いつの間にかいたのか、先程のウエイトレスが小声で囁くように、竜蔵に向けて謎のメールを送ってきていた……更に言えば、決して広くは無い店内でバレバレだというのに、近くにある他の席との仕切りに身を隠しながら、こちらの様子を伺っていた。

何をしてるんだ、この人はと呆れながらウエイトレスが隠れている仕切りに視線を送るが。こちらの様子を影ながらに伺っているウエイトレスは、何故か自信満々な表情で“いったれ”というニュアンスを込めたサムズアップをこちらに送ってきた。

心なしか、真剣な表情の割りに眼が興奮しているようで怖い。

「は・や・く？」

そして視線を正面に戻せば、眼を瞑った状態で来るのを待ってい

る妹の姿が……。

実際、この妹は身内としての鼻屑目に見ても可愛らしい綺麗な
と思う。

口を開いている事で強調される、オリブ油で艶やかになった唇
や歯並びの良い白い歯。精端な鼻つきや優美な細さと曲線を描いた
眉毛……また彼女が意外と自分のチャームポイントだと良く主張し
ている長い睫毛まつげは、確りとカールを描いている。

これで、一切のメイクを使用していないというのが殊更しじやうに驚きだ。
何故メイクを高校生にもなって一切していないのかと言えば……
簡単に言えば、竜蔵が『やっぱ女の人はずっぴんが良いよな』と以
前に漏らしたことがあるのが原因だ。

「ファイトですよ！ 彼氏さん！！」

待機中の妹を困ったように眺めていれば、横から飛び込んでくる
巨乳ウエイトレスの鬱陶しい小声。

その仕切りの影に隠れているウエイトレスに気付いてか、周りの
客達もこちらの様子に気付いたようで……。

『ほら、あそこ見て見て！ 彼氏が照れちゃって初々しいわね♪』
『あの娘も綺麗な子だけど、彼氏もガタイ良すぎるだろ……何やっ
てる学生なんだ？』

『うわ、あの娘メチャメチャ美人じゃん！ 高校生なのに！』

『なに他の女に目えやってんのよ……後で、分かてるわよね？』
といった具合に、好き勝手に騒ぎ始めていた。

突然周囲からの生暖かい視線を向けられるようになった現状に、
竜蔵は居心地悪く感じていたが……目の前で楽しそうに待ってい
る妹は、今日入学式だったのだ。

それをどうしても外せない事情で直接見に行けず、せめて祝いだ
けでもと誘った昼食。

更に言えば埋め合わせと謳った手前、これは罪滅ぼしでもあるの
だ……。

（仕方ないか……）

様々な葛藤の末、竜蔵は自身のフォークで明太子の和風パスタを絡めとり始めた。

量は丁度、美夏が一口で食べられる程度のもの……。

普段、絶対にこういった事はやらなかっただけに。竜蔵の行動を目の前で、薄目にしながら見ていた美夏は。

（え！ 嘘！？ 本当にやってくれるのっ！？ ど、どどどうしよう！ おふざけのつもりだったのに、いきなりこんなビッグサプライズにっ！！）

興奮のボルテージが最高潮に上がってしまい、注意しなければ今にも鼻息が荒くなってしまいそうなほど混乱していた。

とはいえ、折角のチャンス……ここは、必ずものにする！！

竜蔵がフォークに絡めすくい上げた、明太子のソースが確りと着けられたパスタの麺が、美夏の開けられた口へとゆっくりと運ばれていく……。

それを気配で感じ取った美夏は、もはや赤面している兄が直接口まで運んでくれるまで一切の動きを見せずに待ち続ける。

徐々に、徐々に近づいてくる美味しそうな匂いは、美夏の嗅覚を刺激して……遂に。

「あむ……」

その開いていた口へと運ばれた。

同時に艶かしく唇を閉じながら、もぐもぐとし始める美夏を赤面している竜蔵は見守る。

「ど、どうだ……？」

妹の口がつけられたフォークなど気にするような性格ではない竜蔵であったが、自身が美味しいといった品が相手にはどう感じるのかは気になる様だ。

すると、尋ねられた美夏は確りと口に含んでいたパスタを食した後。

再び悪戯な笑みを浮かべながら、竜蔵へと口を開いた。

「うーん……一口じゃ分からなかったから、もう一回して♪」

たった一回だとしても、それで味を占めてしまった美夏が再び竜蔵に酷な事を言う……が、当の竜蔵は。

「調子に乗るな。もう絶対にやらないからな……」

必死に赤面している顔を直そうとしながら、極めて不貞腐れたように言い放った。

「えーやダ！ もう一回してよー！」

「絶対にやらない！ 俺はもう絶対にやらない！！」

甘えた声で抗議する美夏に対して、まるで自らに言い聞かせるように突っぱねる竜蔵。

こうなると、自身の兄は絶対に言うことを聞いてくれないと知っていた美夏は……。

「ぶー……ケチ」

「勝手に言ってるよ」

頬を膨らませながら引つ込む美夏に、視線も合わさずに返す恥かしがり屋な兄。

その様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼女さん彼女さん！」

「うん？」

そのバレバレにも関わらず小声で呼びかけてくるウエイトレスに、実はさっきから存在に気付いていた美夏が不思議そうに振り向くと。

「今度は彼女さんの番ですよ！ 彼氏さんの口に“ズドン”です！」

「はっ！？ そうか！」

まるで天啓を得たとはかりに衝撃を受ける美夏であったが……。

「それも絶対にやらない！ 絶対にだぞ！？」

「えー別に私は気にしないから良いのに……」

先に竜蔵から釘を刺されてしまった。

しかし、この様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼氏さん、それはいくらなんでも根性なしというものですよ……」

普通、そんな可愛い娘から言われたら即決でOKを出す筈ですよ？
だというのに、それは余りにもチキンというものです」

やれやれ、これだから最近の男はと首を振りながら溜息まで吐く
ウエイトレス……。

一体お前は何様だという視線を、竜蔵が思いっきり送っていると。

「こら、仕事をサボって何をやっている！」

ゴスッ！——「あぁっ!？」

突然、仕切りの影に隠れていたウエイトレスの頭頂部に、厳格そうな顔をしたダンディズム剥き出しなナイスミドルが後ろから拳骨を振り落とした。

鈍い音と共に、間抜けたウエイトレスの声が店内に響く。

その様子を、先程まで色々とピンチだった竜蔵と、原因である美夏が眺めていると。

「申し訳御座いません、うちのウエイトレスがお客様方にご迷惑をお掛けしたようで……」

巨乳ウエイトレスの頭頂部に拳骨を落した背の高い男性が、美夏と竜蔵の二人に深々と頭を下げた。

「あ、いえいえ、お氣遣い無く……」

あまりにも突然、客前で拳骨を喰らわせるシーンを見た竜蔵が、頭を下げた男ではなく拳骨を受けたウエイトレスの方へと視線を向ける。

ウエイトレスは、痛そうに熱を持った頭頂部を両手で擦りながら涙目になっていた……不覚にも可愛いと思ってしまったのは内緒だ。竜蔵の言葉を受けて、深々と頭を下げていた背の高いダンディな男が、顔をゆっくりと上げていく。

短く整えられた顎鬚に、確りとセットされた白髪混じりのオールバック。鋭い眼光に筋の通った鼻や、程よい具合にある顔の皺……それは微妙に骨ばった輪郭や彫りの深い顔の造形も相まって、非常に味のある男という雰囲気醸し出していた。

またスタイルも良く、身に纏っているウエイターの衣装が若い従

業員よりも様になっている。

そんなナイスミドルが、顔を上げると同時に竜蔵へと視線を合わせた。

「いえ、そういう訳にもいきません。お客様にご迷惑をお掛けしたのは事実ですので、私から確りと、この娘には言い付けておきますので」

「あゝ別に良いですよ。そちらのウエイトレスさんも、悪気があってやっていた訳じゃないんですし」

むしろ結果的に見れば、何故か機嫌の悪かった妹の機嫌を直すことが出来たのだ。

お礼を言うのは、逆にコッチのほうだと竜蔵は続けようとしたのだが……。

「お客様のお気遣いは大変嬉しいのですが、何分、このウエイトレスはこれが初めてではないのです」

「あちゃ……」

既に痛みでへたり込んでいるウエイトレスに二人で視線を向けると。

「いたた……って、え？」

痛む頭を押さえながら、ウエイトレスが何を話しているんだといった表情で、竜蔵と背の高い男の顔を交互に見た。

すると、背の高い男が口を開いた。

「お前は先に裏に行っている。話しは後でする」

その怒気の含まれた静かな予告に、ウエイトレスは何やら小動物の様に涙目になりながら。

「えー！ 私はお客様の仲を更に進展させようと……『裏に行っている』……はあい」

必死に抗議をしようとしたのだが、それはダンディな男の低く魅力的な声の一言で封殺されてしまった。

するとウエイトレスがゆっくりと立ち上がり、しよぼくれた様子でトボトボと裏へと消えていく。

それを見送った後、ダンディな男が再び美夏と竜蔵の二人に向き直った。

「改めて本当に申し訳御座いませんでした。先程申し上げたとおり、確りと私の方から言い聞かせておきますので」

「いえ、そんなに気にしてないですし……むしろ、少しでも助けてもらった感じもするので」

「ええ、私も楽しかったですし……」

ダンディな男の誠意ある謝罪に、流石にここまで謝られても二人は逆に恐縮してしまう。

「そうですか、では、その言葉も添えて確りと言いつけておきます」

そんな二人の様子を見てか、ダンディな男は突然これまで厳しうだった表情をニツコリと綻ばせた。

美夏と竜蔵は、その途端に雰囲気を変えた男に呆氣に取られる……。

ペースが分からない、まさにこの一言に尽きた。

すると、ダンディな男がそのまま言葉を続ける。

「ご安心ください、あのウェイトレスが真面目にお客様方に対して接していたことは、確りと理解はしていますので」

そう言ったダンディな男に、竜蔵がホッとした表情で尋ねる。

「じゃあ怒るにしても、そんなに厳しくしないであげてください」

「はっはっは！ 大丈夫です、私は怒るにしても厳しい方ではないので」

「お願いします」

「どうぞお任せ下さい」

ペースは独特なものがあるが、話してみれば普通のおじさんだと感じた竜蔵は。若干男に対して碎けた様子を見せ始めた。

流石に、あまり人見知りをしない竜蔵ではあっても、いきないの第一印象が怒っていたときのものでは、ちょっとだけ萎縮してしまうと言うことだ。

そこはプロの格闘家と言っても、まだ子供ということだろうか……。

竜蔵と男が向き合っていると、美夏が何か気になったのか、男に向かって口を開いた。

「あの、アナタはこの店長さんですか？」

その問いかけに、男は竜蔵から美夏に視線を移しながら。

「はい、ここ『伊藤の空間』の店長は私です。どうして分かったのですか？ 名札などは着けていないのですが……」

「なんとなく雰囲気で聞いただけです。なんだか他の方とは違った感じがしたので」

「ははは、なかなか鋭い恋人さんですね？」

茶化す様な声音で、竜蔵に聞く男。

竜蔵は、それに対して何を当たり前なといった表情で答えた。

「まあ、他の人は若い方ばかりですし」

一見すれば失礼な物言いだが、ダンディな男は特に気にした様子も無かった。

「確かに、ここ学園都市に飲食店を構えているのは若い専門学校の方々か、私の様な枯れた男ぐらいなものですからね」

自虐的ではなく、これは正に本当のことで。

学園都市に住んでいる人間の中で確かに“大人”という年齢層は決して少なくは無いが、基本都市の年齢層は学生が多いために、現場で働いている者達の殆どはアルバイトの学生が占めているのだ。

それはごく当たり前なことで、例外といえば大学生や専門学校生達が研究や現場研修として店を構える、または経営するなどといった時の事……または一部の天才と呼ばれる者達がいた時だけだ。

よって、逆に経営者や管理職などといった重役を担うポジションには、やはり“大人”が就く事になるのが当たり前なのだ。

「そんな枯れたなんて、十分姿勢も良いですし若々しいじゃないですか」

お世辞ではなく本音でフォローをする竜蔵。

流石に、目の前で店長が本当のことを喋っていたとしても、自虐の入ったネタを混ぜてきたら若者としてフォローをしなければならぬ。

そのフォローを素直に受け止めたのか、店長の男はコホンと咳払いをした後。

「ありがとうございます。一応こう見えても、昔は武術の方を嗜んでおりましたので」

「へえ、どんな武術なんですか？」

これに食いついたのは再び竜蔵だ。

まあ、格闘家としては当然の反応か……。

しかし、男は武道でも格闘技でもなく“武術”といった。

これに気付かない筈が無い竜蔵の相手を知りたいといった好奇心は、徐々に高まってきていた。

だが、店長の男は興味を持ち始めた竜蔵に対して、どこか恐縮した様に答えた。

「いえいえ、おそらく言ったとしてもマイナー過ぎてご存じないと思いますので……」

「そんな事いわずに、気になるので名前だけでも教えてくださいよ」
若干置き去りになっている美夏が、表情を不機嫌そうにしながら、興味で店長の男へと向いている竜蔵にとっては関係の無い話だ……
後々、また大変な事になりそうで怖いが。

「そうですね……では、恐縮ですが」

「はい、どうぞ」

「伊賀流徒手格闘という、古武術から派生した流派の武術なのですが……ご存知でしょうか？」

先程から促してはいたが。

もちろん、本人自身がマイナーと言っただけあって。

「すみません、やっぱり分からないです」

竜蔵は知る由もなかった様だ。

しかし、店長の男は結局知らなかった竜蔵に対して、別に気にし

た様子も見せず。

「いえいえ、これを聞いた他の皆さんも同じ反応をしていましたので、別に謝ることもありませんよ」

はっはっはと笑いながら、竜蔵に気にするなと言う店長の男。

すると、その店長の男が、今気付いたかのように、竜蔵に向けて小声で声を発した。

「そういえば、間違っていたのなら失礼なのですが……もしかして、格闘家の桐嶋竜蔵さんですよ？」

周りに聞こえない様に気遣いをしているのか、耳打ち出来るぐらゐに近い距離で尋ねられた竜蔵。

しかし、別に周りにバレようと気にするタイプでない竜蔵は、特に間も置かずに答えを返した。

「はい、そうですよ。良く自分の顔なんて覚えてましたね？」

「やはりそうでしたか……いえ、顔もそうなのですが。やはり肉体の方で気付いたのと、以前他の女性の方といらっしゃった時にお見かけした時がありましたので」

間違えなくて良かったというより、本当に嬉しそうに微笑む店長の男。

それに“他の女性の方”というワードで気まずそうな表情をした竜蔵。

「はは、あの時ですか」

だが、本人も店長の男も、そのワードには特には触れずに当時の事を思い出していた。

と、ここで店長の男が、なにやら突然気まずそうにし始める……。

何となく仕草で店長の様子が可笑しいのを察知した竜蔵は。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ。そのく大変図々しいお願いを、桐嶋さんに申し上げたいのですが……」

「はい、なんでしよう？」

妙に畏まった口調に、竜蔵は不思議そうにしていると。

「うちの店……というより、学園都市の大半の飲食店には外の飲食店とは違って、その……いわゆる、有名人のサイン色紙というものが飾られてないのです」

ここまで聞けば、このダンディな店長が何を言いたいのか竜蔵でも分かるというものだ。

「ああ、なるほど、そういう事ですか。良いですよ別に？」

「本当ですか!？」

竜蔵の許可を得た瞬間、店長の表情がパツと明るくなる。

年齢も中年を過ぎていそうな感じがする渋いおじさんではあるが、こういう時は誰だって子供の様な笑顔をやるものだ。

もちろん、相手がおじさんといえども、ここまで喜んでくれれば竜蔵も悪い気はしない。

というより、サインを身内以外から求められただけで、かなり嬉しいものがあるのだが……。

「ええ全然構わないですよ」

そんなこんな嬉しさからか、竜蔵が上機嫌で微笑みながら店長の男の再確認に返事を返す。

すると店長の男は。

「なら、今すぐに色紙とペンを持ってきますので。料理をぐゅっくり堪能しながらお待ち下さいね!」

「は、はあ……」

目の色を変え、異常なまでに張り切った様子の店長の男に、上機嫌だった竜蔵の機嫌が一瞬で引き気味にされる……。

しかし、そんな竜蔵などお構い無しに、許可を得た店長はそくさと裏へと消えていく。

「サイン書くん」

その兄と店長の男のやり取りを、かなり置いてけぼりな状態で眺めていた美夏が意外そうに言葉を吐いた。

妹の言葉に、若干面を喰らった状態の竜蔵が視線を向けなおすと。「まあ、断る理由も無いしな」

「ふ〜ん……妹の入学祝いの最中なのに？ 頼まれたからって書いて書いちゃうんだ。入学祝いの最中の妹を置いてけぼりにしたの？」

やはり気に障っていたのか、棘のある口調で美夏が竜蔵を再び攻め始める。

これにまた何も言えなくなる竜蔵……本当に、こういった事には滅法弱いようであった。

その様子を見て、美夏が今日何度目か分からない悪戯な笑みを浮かべると。

「悪いと思ってるなら、罰として、食後に来るイチゴDXパフェと一緒に食べることに」

という、また周囲から生暖かい視線を向けられそうな事を言い始めた。

だがまあ、この程度なら、さっきの恥かしさと比べればと腹を括ろうとした矢先……。

「もちろん“同じスプーン”でね♪」

竜蔵はこの瞬間、人生で初めて妹に本気で頭を下げるのであった。



えらい目に合った……。

『伊藤の空間』から会計を済ませて出てきた竜蔵が、一番最初に思い浮かべた言葉だ。

あの後、イチゴDXパフェを同じスプーンで食べるという恥辱の極みを味わわずには済んだのだが。

またいつの間にかに復帰していたのか、あの巨乳ウエイトレスが再び美夏と今度は店長まで煽りだし。まさかまさかの“店内公開食べ合わせいっこ？”という、もし知人が見ていたのなら、そいつを撲殺しなくてはならないイベントを強制されたのだ。

店内では生暖かい視線を送っていた他の客たちも、なぜかいつの

間にか美夏と巨乳ウエイトレスの味方となり、こちらを煽る始末：
…そして、更に最悪だったのが、食べさせ終わったあと、皆から謎
の拍手や指笛を貰う最中起きた、店長の『サインくれよ』のコール。
もともと竜蔵の外見を見て、もしかしたらと思っていた客もいた
ようで、その時は本当に恥かしくて死ねると思ったぐらいであった
……。

これがもし、妹などではなく本当の彼女だったのならと考える竜
蔵。

しかし、それはそれでかなり恥かしいものがあると気付く竜蔵。
どっちにしたって、恥をかくのは変わらないと気付いた竜蔵。
救われない……本当に救われない。

また、この時の竜蔵は知る由も無いが、店長が悪乗りして取った
美夏とのツーショット写真が。あの店に飾られることとなった竜蔵
のサインと共に飾られているという事が、近いうちに起こる事にな
る。

まあ自分、竜蔵は『伊藤の空間』という敵か味方か分からない空
間には近づかないと思うが。

そんなこんなで現在、お腹を満たした二人は再び繁華街を練り歩
いている。

目的は入学祝のプレゼント……。

竜蔵はとりあえずマグカップでも買ってやろうかと考えていたよ
うだが、それは美夏の『ヤダ、ペアリングが良い』という理不尽な
要求により却下された。

だが流石に妹とペアリングなどするつもりはない竜蔵は、店につ
いた瞬間に自分が気に入ったアクセサリを購入して、有無も言わさ
ずに手渡す算段を企てていた。

すると、そんな時であった……。

ドン————「きゃっ！」

さっきまでの赤茶色の地面ではなく、白い煉瓦が敷き詰められた人通りの多い道を二人で歩いていると。突然、竜蔵の左胸に、丸眼鏡と三つ編みお下げが特徴的な昭和チックな少女がぶつかってきた。「あ、おい！」

鍛え上げられた厚い胸板にぶつかり、弾かれるように転びそうになる少女の手を、竜蔵が咄嗟の反応で伸ばした左手で掴み取る。それにより、少女の華奢な体が地面に倒れるという事態は回避されたようだ。

「あ、ありがとうございます……」

ぶつかって倒れそうになった事に相当驚いたのか？

少女が狼狽しているかのように、手を取り引っ張ってくれた竜蔵を見上げる。だが、一応お礼は言えるようであった。

「いや、こっちもすみません……って、あれ？」

転びそうになった少女の手を取ったまま、竜蔵が何かに気付いたようだ。

（やばい、同じ制服だ……）

そう、なんとたまたま妹の入学祝いのために訪れていた繁華街で、同じ学校の生徒とまさかの遭遇を果たしてしまったのだ。

更に言えば、この丸眼鏡に三つ編みお下げが特徴的な少女を、竜蔵はどこかで見たことがある……。

それがどこかと思いついて出そうとしていると。

「あの、すみません！ 私、急いでますので！」

「あ、ちょっと！」

突然、少女が焦った雰囲気で竜蔵の手を振り払い、そのままどこかへと走り去ってしまった。

その後姿を見送った竜蔵は。

（なんだ？ てか、外見の割りに足が速えな）

と、脳内でクエッションマークを浮かべながら、そんな事を呟いていた。

「なに？　いまの人……同じ学校だったみたいだけど、態度悪過ぎない？」

これまでの様子を隣で黙って見ていた美夏が、悪態を付くように先の少女に対して嫌悪感を示す。

まあ、この妹の場合、兄に手を合法的に握られた事に対して嫉妬を覚えているだけなのだが。

「さあ？　まあ怪我が無かっただけでも良いんじゃない？」

機嫌の悪い美夏は流しながら、竜蔵は再び視線を歩いている方向へと戻す。

するとそこで、なにやら違和感を感じた。

正確に言えば、ブレザーの左胸にある二橋学園の校章が刺繍された胸ポケットに、何か紙切れの様なものが入っているのだ。

それを、めげずに腕を組もうとしている美夏をあしらいながら、右の手で取り出し広げてみると。

「ッ！？」

「うん？　どうしたの、お兄ちゃん？」

紙切れの開かれた場所を見た瞬間に表情を一変させた竜蔵に、美夏がようやく気付いたのか、不思議そうな声音で尋ねてくる……。

だが、竜蔵の表情の変化は、すぐに収まってしまったようである。

「いや、なんでもない……とりあえず急ごう。下手したら“千秋”ちあきがへそを曲げる」

「え？　あ、待ってよお兄ちゃん」

突然先を急ぐために、歩くペースを上げた兄に、美夏が“そんな事無いのにな”と思いつつも付いていく……。

今さっき竜蔵が開いた紙切れは、既に左の胸ポケットという元の場所に収められている。

その紙切れに書かれていた内容とは……。

『明日の放課後、学園の屋上で待っています。来なかった場合、“今日起こったことを包み隠さずに、新聞部の方々へリークします”。

もちろん“執行部”の話も含めて……』

——同じ執行部の“忍者”より、待ってますよ♪——

『伊藤の空間』 (後書き)

絵を描こうとしたけど無理でした。

幕間 尖った青春の変化（前書き）

入学式後に起きた事件の話です。

幕間 尖った青春の変化

目が覚めたのは、夕日が殆ど沈んだ時間だった……。

俺が仰ぐ天井には、おそらく取り替えたばかりの蛍光灯の明かりが眩いばかりの白光を放っていた。

その光に目を細めつつも、俺はある事に気付く……。

(ここ、どこだ……?)

何故だか朦朧とする意識の中で、突然襲ってきた顔面の痛み……心なしか、首の方にも鞭打ちを起こしたときの様な痛みが走っている。

俺は、この痛みに堪らず、天井を仰いでいた状態から起き上がるうとするも。

「あ……」

起き上がろうとした途中で、目の前の視界がぼんやりと霞がかり、俺の上半身を再び寝た覚えの無い、純白のシャツがしかれたベットに引き戻していく……いや、落ちていったといった方が正しいのかもしれない。

ギシ——と、ベットのスプリングが、衝撃を吸収する音が聞こえた。

すると、ベットの周りを囲んでいたカーテンの向こう側で、なにやらシルエットの的にスタイルの良い女が、座っていた椅子から立ち上がるのが見えた。

そしてそのまま、俺が寝ているベットと外を仕切っているカーテンが無遠慮に開けられる。

「あら、ようやくお目覚めね。おはようって時間じゃないのは分かるかな?」

カーテンの向こう側から現れたのは、白衣を袖を通さずに肩に羽織った、一人の落ち着いた雰囲気を持つ女だった。

お洒落というよりも邪魔にならないように、緑がかった黒髪を項
辺りで一つに括り。緩やかな曲線を描いた細眉や、口紅が薄く塗ら
れた唇……そしてその、柔らかそうな唇の下には小さなホクロが彼
女の大人な魅力を不思議と引き立たせていた。

また、小顔を強調するかのような八頭身に纏った、胸元の開いた
ピンクのワイシャツや、ストッキングの上に履かれた黒いタイトス
カートは、何故だか意識を朦朧とさせる俺にすら、性的な興奮を覚
えさせる。

「あ、あう……」

そんな美女といっても過言ではない女に、言葉を帰そうとするが
上手く口が動いてくれない……それに血の味もする。

多分、口の何箇所かを切ってしまっているのであろう。

「無理しないの。君は脳震盪を起こして運ばれてきたんだから、大
人しくしてなさい」

舌も口も言うことの聞いてくれない俺に、白衣の女が呆れた様に
前髪を掻き揚げる。

露となった毛穴一つ見えなさそうな額は、多分俺好みなんだが……
……いかんせん、視界がまだ霞がかっているから殆ど確認できない。

正直、今の状況を全く理解できないために、俺は仕方なく女の言
うことを聞く事にした。

「そう、保健室に一人で来れなかった人は、大人しく寝てるのが一
番なんだから」

いや、そこは病院に運んだ方が良いんじゃないかと思うが、ここ
は黙っておくのが吉だろう。

大人しく身を寝ているベットに預けると、後頭部に良く日干しさ
れた枕の暖かい感触が伝わってきた。

このまま目を瞑れば、また一眠りできそうな心地よさだ。

「あ、あのう……」

そうすると、喋ることだけに意識が集中出来たのか、ようやくま
ともな言葉を発せられるようになる……まあ、まだこれが限界とい

う所なのだが。

「うん？ どうしたのかな……って、聞きたいところだけど」

俺の搾り出すように出された言葉に、女はアーモンド形の目を優しげに細めながら。

「今は本当に無理はしないこと、喋るのが難しいのなら黙って寝てること。用件なら、私がちゃんと伝えてあげるから」

手のかかる子供をあやす様な声音で、暗に何もするなと言ってきた。

だが確かに、今の俺は何故か起き上がることも喋ることも、頭がクラクラしてまともに出来ない。

すると、ベットの前に立っている女は。履いているサンダル音をゆったりとした歩調で鳴らしながら、俺が寝ているベットの横に移動した。

「君をここに運んできてくれた先輩から、預かってる物があるの」
そう言って、女はベットの傍に置いてあった丸椅子の上にある、一枚の紙を手に取り、俺に差し出した。

俺は、その差し出された一枚の紙を、なんとか動いた右手で受け取る……。

「その先輩からは、君が起きたら直ぐに読ませてくれって頼まれてたからね。ちゃんと渡したわよ？」

頼まれたことを完了したぞと、確認を取ってくる女に、俺は特に何も言わずに。右手に持った紙に書かれた文章に目をやった。

相変わらず、モヤのかかった様に見づらい視界だったが、まあ何とか文字は読み取ることが出来た。

その紙に書かれた文面は……。

『来るか来ないかは、お前が決めるんだぞ？』

たった、これだけの文章に記された言葉————だけど俺は。

この時だけは不思議と、朦朧とする意識の中で、ある事だけはハ

ツキリと思い出せていた。

それは、空いている左手に残っている、とても力強い感触……。手を両側から強い力で圧迫されたような、そんな感触……。

俺はここまで感じて、ようやく何故こんな所で寝ていたのかを思い出した。



退屈な入学式……多目的ホールの壇上で、新入生代表として何かを喋っている、レベルの高い女子と。それに負けず劣らずな容姿をした生徒会長とかいう先輩以外に、何の興味も持てない入学式。

それを証明するかのように、男……御堂^{みどう}勇輝^{ゆうき}は「あゝあ」などという大欠伸を、惜しげもなく座り心地の良いシートで披露していた。席は多目的ホールの生徒側の、丁度真ん中辺り……周りに座る者達は。

その御堂のふんぞり返って座っている、ふてぶてしい態度に嫌悪感を抱きつつも、何も言えないでいた。

（マジでつまんね……てか、先公も何も注意しねえのかよ）

あまり綺麗とはいえない、明らかに染めたと分かるボサボサな金髪頭。

別に、この程度なら——二橋学園では珍しいが——あまり珍しくも無い荒れた生徒なのだが。

男の身長は185cmと、高一になりたてと言う割には長身で、しかも新調された制服越しにでも分かる程度には、程よく肉付けされた体格をしていた。

そのせいか、周りにいる生徒達は皆、入学早々に厄介ごとに巻き込まれたくないがために、この態度のデカイ男子生徒を無視していた。

（ホント、これなら早く目当ての奴と喧嘩して、退学貰ったほうが良いかもしれねえな）

顔こそは整っていて、輪郭も細い青年なのだが。いかんせん、鋭い眼光と細い眉毛を携えた状態で無表情なために、御堂が何を考えているかなど周囲には到底理解できない事であった。

故に、余計不気味に感じる周囲の生徒達。

それを見て、更に退屈な気分になる御堂……。

御堂勇輝にとって、二橋学園の入学式は。

こういった調子で、そのまま終わりを迎えてしまった。

入学式も終わり、周りの進人生達が自分の新しい教室へと向かう最中。

御堂だけは、多目的ホールの席に腰掛けたまま、微動だにしないまま……。

それを不審に思った教職員が、男数人構成で御堂のもとへと近寄ってくる。

「おい、もう入学式は終わったぞ！ 教室に戻れ！」

「私は終始、君を見ていたが。なんだあの態度は！？ 他の生徒達にはもちろん、ここに居る全員に不快な思いをさせていたんだぞ！ 分かってるのか！？」

口々に、やかましい説教を捲くし立てる数人の教職員達……。

だが御堂は、全く持って聞く耳を持たない。

「おい、なめてんのか？」

その態度に、血の気の多い一人の男性教職員が遂に我慢の限界を向かえ、御堂の胸倉を掴み、捻り挙げる。

男性教職員は、武道系の出身だったのか？

185cmもある座っている状態の御堂を、軽々と片手で持ち上げてしまった。

だが、それでも無表情な御堂……。

それが、再び癪に障ったのか、男性教職員が声を張り上げようとする。

「いいんすか？ 俺ん家、ここの学園の理事長と仲が良いいんですけど？」

すると、声を張り上げようとしていた男性教職員の表情がピタリと止まった……。

それはそうだ、自分の雇い主と仲の良い家の息子かもしれない生徒に、もしかしたら勢いで行っていたかもしれないのだから。

しかし、ここで引いてしまったら、この生徒は一生自分の事を軽く見ると考えた男性教職員は。もう関係ないとばかりに、再び声を張り上げ『どうかなさいましたか？ 先生方？』られなかった。

突然聞こえてきた、澄んだ女性の声に皆が振り向けば……そこには、豊かな栗色の長髪と、いつもニコやかにしている朗らかな美顔が特徴的な女生徒、二橋姫樹^{ふたつばしひめぎ}生徒会長の姿があった。

その存在感は、一触即発な雰囲気だった、この現場を、一瞬で治められてしまいそう……そんな、不思議な安心感を持たせるものがあった。

「姫樹か、いやなに、ただ久しぶりに生意気な新入生が出てきただけだ」

御堂の襟首を片手で捻り挙げた体勢のまま、体格の良い男性教職員は、後ろにいる姫樹に、そう告げた。

だが、その言葉に姫樹は……。

「この学園は……というより、第一区から三区までにある殆どの学舎は皆。生徒自身が殆どの自治管理を任されています」

「うん？ 何が言いたいんだ？」

突然、学園の基本方針を口に出し始めた姫樹に、男性教職員は頭に“？”を浮かべる。

しかし姫樹は、そんな教職員など無視して話を続ける。

「ですので、こういった些細なトラブルも学園の生徒が解決すべきなのです……これは、学園のほぼ全ての懸案事項、または生徒間に存在する問題の解決までに至るまでの決定権が生徒会長である私や、それを支えてくれる他のメンバーや委員会にある事からも領け

ることです」

表情こそは朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、完全に教職員達に対して遠まわしに『さがれ』と言っている様に思える、姫樹の言葉。

本来なら教職員達は、この姫樹の言葉にも反応しなければならぬのだが……。

「……そうか、なら勝手にしろ」

そう言っ、男性教職員は簡単に御堂を下ろしてしまった。

するとそのまま、ゾロゾロと散っていく教職員達。

まるで、言葉通りに皆“勝手にしろ”とでも言っているかのような去り具合に、当事者である御堂も面を喰らってしまう。

そんな御堂の、無表情からあまり変わっていない驚きの顔を見ながら、姫樹が口を開く。

「それで？　まずは何故、アナタは終始同じ態度を取っていたのか？　それを聞きたいのだけれど……話してくれるかしら？」

凹凸のあるスタイルや、落ち着いた雰囲気のある顔は、とても大人びているのに。なぜか子供っぽい仕草で、コテンと困った表情をしながら首を傾げる姫樹。

その仕草は彼女の、のほほんとした雰囲気も相まって、非常に男心を擽るものがあつたのだが。

今、たとえ他人からくだらないと言われても、明確な目的がある者にとっては、何の感情の起伏も起きなかった。

「……別に、俺は入学式に来たわけじゃねえから」

「あら？　なら、何でここに居るの？」

ポケットに両手を突っ込みながら、面倒臭そうに言う御堂に、姫樹が訪ねる。

そりゃ高校の入学式なのに、それに来たわけじゃないと言われてば、誰だって疑問に思うことだろう。

もしかしたら、余程の理由があるのかもしれない。

だが、出てきた答えは……。

「アンタ、生徒会長なんだろう？　しかも、ここでは結構偉い感じだし」

「ええ、一応去年から任されているわ。それがどうしたの？」

「偉いんだったら、ここに一人ぐらい誰か連れて来れるんだろ？」

「……話が見えないわ。もっと具体的に言ってくれないと」

右頬に掌を添えながら、眉を顰める姫樹……。

「俺が言いてえのは、ここで一番喧嘩の強い奴を連れて来いって事だ」

その言葉で、ようやく理解できたのか。

姫樹が胸中で（あくなるほどね）と手を叩く。

目の前の様な風貌をした、血気盛んな若者が。この学園で一番強い奴を連れて来いと言ったら、彼しかないだろうと目星が付いたからだ。

実際、姫樹自身は本当に彼が“この学園で一番なのかを断言できない”が……おそらく、これで良いのだろうと判断が出来た。

故に。

「そういう事なら、私に任せて頂戴♪」

「……は？」

なにやら楽しそうに微笑みながら、やたら乗り気な様子の生徒会長に。

まさか要求が通ると思ってはいなかった御堂が、間拔けた声を漏らしてしまう。

本来なら、このまま居座ったり、必要なら近くの先公か男子生徒をぶん殴って騒ぎを起こし、目的の人物を呼び込もうとしていたのだが……。

どうやら、目の前の抜けていそうな割には腹黒そうな生徒会長のお陰で、余計な手間は省けたようであった。

「アナタが呼んで来て欲しいと言っている子を、私が連れてきてあげます。そうすれば、アナタも満足が行くのでしょうか？」

「……ああ」

御堂の返事を聞くと、姫樹の微笑みが一層明るさを増す……。

それは見るものが見れば、本当に嬉しくて微笑んだのか？ もしくは何か企みが出来て微笑んでいるのか？ どちらか判断出来るものだった。

「じゃあ、皆。後の片付けは、手伝いの生徒や先生方にお任せして、私達は明日の健康診断や奨学金申請などに必要な書類を確認してきましょう」

姫樹はそう言って、ここ多目的ホールに施されていた入学式専用の装飾などを片付けている、他の生徒会メンバーに声をかけた。

すると、生徒会のメンバー達は、いま手に着けていた作業に確りと折り合いをつけてから、ゾロゾロと何事も無かったかのような足取りで、姫樹の後ろに控え始めた。

それを確認すると、姫樹は改めてポケットに両手を突っ込んでいる御堂に視線を向ける。

「必ずアナタが呼んで来て欲しいと思っている子を連れてくるから、ちゃんと待っているように。分かった？」

まるで親気取りの物言いに、御堂は鬱陶しそうな表情を露にするも、一応の同意を示すために「ああ」とだけ返事を帰した。

姫樹は、それをニツコリと微笑んだ後に確認すると。後ろに控えていた生徒会メンバーを引き連れて、多目的ホールを後にしようとす……。

だが、多目的ホールの出入り口である、現在は開けっ放しになっている両開きのドアの前で。姫樹は、あまり高くは無い階段の段差を上ることで揺らしていた、緩やかなウェーブのかかった栗色の豊かな髪をピタリと止めながら、後ろを振り返った。

視線を向けたのは、やはり多目的ホールの中央で、いまだこちらを鋭い眼光で眺めている御堂にだ。

目と目が、自然と合わさる……。

しかし、振り返った姫樹と目を合わせた御堂は、無意識の内に、一筋の冷や汗を右頬に流していた。

微笑んでいる……それも、不気味に、不敵に、大胆に。

更に言えば、さっきまで閉じていた“紅い瞳”が、妙な圧力プレッシャーを御堂に与えていた。

そして、何がなんだか分からないといったふうには物怖じする御堂に、底冷えするぐらいに美しくも冷たい微笑みを向けながら、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「一応、新人生のアナタには忠告をしておくけど……」

さっきまでと変わらぬ、決して声は張っていない和やかな声……だが、不思議と距離の開いた御堂の耳には届いていた。

「殺られる前に殺ること。それがアナタが、これから私が連れてくるであろう人物に対して、唯一出来る事……分かったかしら？」

彼女の薄く開かれた瞼の先にある眼を見れば、これがハッターでも過大された表現でもないことぐらい、中学上りの御堂でも理解できる……。

それだけ、これから連れて来ると言っている奴に、相当な自信が有るのだろう。

なら、俺の目当ての奴が来る可能性が一段と高まった。

故に引かない……今さっきまでしていた物怖じも、鳴りを潜めた。

「上等だよ」

何故なら、もともと“そいつ”と喧嘩をするために、こんな退屈なところに来たのだから……。



多目的ホールの中心で待つこと数十分……。

別段、御堂自身は待つことに苦痛は感じない。

むしろ今は、目当ての奴が来ることを、今か今かと待ち侘びているぐらいなのだ。

苦痛なんて、感じるはずも無い……。

多目的ホールの中央の席に座りながら、周囲を見渡せば。既に殆

どの後片付けが終わり、仕事の終わった奴から多目的ホールを出て行くといった所まで進んでいた。
すると、そんな時であった。

「あ、桐嶋」

この一言で、目的の人物を待っていた御堂にとっては十分であった。

聞こえてきたのは、多目的ホールの出入り口付近。

中央の席に座っていた御堂は、まるで獲物を目の前でお預けされ続けた狼の様に、席から立ち上がり、切れ長の鋭い眼光を、多目的ホールの出入り口へと向けた。

普段、何を考えているのか分からない無気力な表情をしている彼にとって、非常に珍しい挙動と顔つきであった。

「なんだ？ 会長の言ってたことと違うな」

多目的ホールに堂々と入ってきた男は、こちらに向けられる御堂の凄みの効いたガン付けを楽しそうに受け止めながら。思っていた状況と違うことに、多少残念な声音で呟いた。

「会長の言ってたことって？」

最初に多目的ホールへと入ってきた男に気付いた男子生徒が、不思議そうに疑問を投げかける。

すると、男は。

「いや、ここで入学早々暴れてる奴がいるって聞いたから、止めてくれて頼まれて来たんだけど……静かなもんだね」

「まあ、実際さっきまで暴れる寸前だったけどな……」

睨み付けてくる御堂に対して、わざわざ真っ向から視線をぶつける男は。そう相手を挑発するかののような態度で、最初に入ってきたのに気付いた男子生徒と会話をしていた。

だが、それも、もう終わり……。

「帰る途中だったのか？」

「ああ、入学式の片付けも、俺の分は終わったしな。だけどまあ、ちよっと残る事にするわ」

「悪いね、帰るの邪魔して」

「そうでもないだろ？　だって、合法的にプロの喧嘩を見られるんだからさ」

男と話をしていた男子生徒は、どうやら中々に血の気の多い部類の人間だったようだ。

しかし、竜蔵の表情には、その男子生徒の期待には答えられないといった色が伺えた。

別に、勝つ自信が無いというわけではない……。

「喧嘩になれば良いんだけどね……多分、無理だろ」

ただ単に、相手の実力が、自分には到底及ぶものではないと確信していたから。

それだけ答えると、竜蔵は期待の眼差しで、こちらを見ている男子生徒から離れていく。

一步……また一步が、確実に中央の通路に既に出てきていた御堂の前へと近づいていた。

近づいてくる男……目当ての男であった、桐嶋竜蔵が近づいてくる度に。

御堂には、嫌にでも気づく事があった。

（なんだ……これ）

背丈自体は、御堂のそれよりも10？　以上低いことが分かる。だが、そんな背丈のハンデなど、帳消しにするどころか相手に“自分よりも大きい”と錯覚させるほどの肉体が、ブレザーの制服越しですら存在を強調させていた。

厚く、そして太い……傍目からは、理想的な逆三角形を描いた均整の取れている肉体に見えても。よく見れば、外に露出している筋ばった首の筋肉や、もはや拳の形状が鈍器の様に膨れ上がった手が、桐嶋竜蔵という男の計り知れなさを物語っている。

どうすれば勝てるのか？　——などという次元ではなく、どうすれば無事に済ませられるのかと、考えることしか出来なくなる。

御堂は、この時。

己がこれまで通ってきた、不良^{しろうと}たちの世界が、どれだけ狭かったのかを知る。

TVは見ない方だ……だから、コイツが今まで、どんな奴らと戦ってきたのなんて知る由も無い。

だが、これだけは分かる。

俺らがいる不良の世界での圧力^{プレッシャー}が赤子に見えるぐらいに、奴らがいる格闘家の世界の圧力^{プレッシャー}は甘くは無く、ただ相対せただけで凄いことなのだという事が。

「どうした新人生？ 俺に何かあるんだろ？」

こちらの内心を見抜いているのか、小馬鹿にした笑みを浮かべながら、俺に問いかけてくる。

既に俺の背中^はは、嫌な汗でワイシャツを濡らしている……。

目線は立っている場所の段差が違うとはいえ、背の低い奴を見る高さ^と、さほど変わりはない。

しかし、奴が段差を降りるために肩を揺らしながら歩いてくる度に、その大きさを見誤りそうになる。

そして、遂に奴と俺の距離が、大体、二・三步で手が届く間合いとなる。

御堂は、この相手と距離を認識した瞬間に、これから始める事に對しての気構えを一気に組み直した。

瞬間、さっきまでの何もされていないのに押し込まれていた空気は一掃されるが、感じる圧力^{プレッシャー}に変化は無い。

むしろ、間合いを認識してしまった事によって、相手が何から出てくるのかという考えが浮かぶようになってしまい、余計に圧力を感じる。

すると、一向に口を開かない御堂に痺れを切らしたのか？

竜蔵が、また一步間合いを歩くだけで詰め、そこで立ち止まった。

「おい？ 黙ってちゃ分からないだろ。何か言おうぜ、なあ？」

相も変わらず、こちらを挑発するかのような喧嘩腰。

やっている事自体は、その辺の同年代と変わらない……だが、こ

ちらを挑発するだけの説得力が、目の前の男にはあった。

近くで見れば、頑丈そうな顔立ちをしている割にパーツは整っており、眼はギラギラと好戦的な雰囲気醸し出しながら、こちらを見つめている。

多分、こういった魅力は女よりも男のほうが分かりやすいのだろうと、御堂は無意識のうちに考えていた。

だが、挑発してくる相手に、いつまでも啖呵も切らずに立ち尽くしているなど、今まで過ごしてきた世界では有りえない事……中には、啖呵すら切らずに、無言で殴りかかってくる“キレてる”奴もいることにはいるが、生憎、御堂はそういうタイプではない。

「やっぱり、アンタが来たか……」

もともと、竜蔵自身が目的であったと、暗に語る口調。

それに、当の本人は眉間に皺を寄せ、疑問気に御堂を見る。

「やっぱり来たか……？ ああ、なるほどな」

突然、何かに納得したかのようにしている竜蔵を見て、今度は御堂が分からないといった表情をする。

しかし、これに竜蔵は答えてはくれない……当たり前だ、いくら疑問に感じたからといって、御堂が問いただそうとはしなかったからだ。

まあ、竜蔵がそういった雰囲気を出したのは。ただ単に、会長である姫樹の言葉に、若干の“嘘”が含まれていたことに気付いただけなのだが。

すると、今のやり取りで、相手が会話を続ける気が無いと理解した竜蔵の纏う空気がガラリと変わる。

「さて、“やる”んだろ？ 来いよ」

何の脈絡も無い誘い……これが、もしも異性との会話なら少々魅惑的な意味が含まれているのであろうが、生憎と相手は野郎だ。

しかも見た目以上に、喧嘩が好きに見える。

なら、竜蔵が発した言葉の意味を正しく理解出来たのであろう。

二人の醸し出す空気が、一気に周囲にすらも危機感を煽るものへ

と様変わりする。

これから何が起きるのか？ 二人は何をしようとしているのか？
それが、今からこの光景を見る者だとしても理解できる空気。

もう、喋る口も、ガンの付け合いも必要ない。

ただ、殴り合うのみ——

最初に突っかけたのは、御堂……いや、意外にも竜蔵の方からであつた。

来いよと言つたにも関わらず、そんなものは関係ないと。御堂が重心を前に傾けると同時に、段差から流れるように降り、間合いを詰めた竜蔵。

（速ッ！）

自身が地面を蹴り出すよりも早く、間合いを完璧に詰めて来た相手に、御堂が驚嘆を覚えながら表情を強張らせる。

相手は重心こそ、安定させるために腰を落しているが。本質を見れば、後ろ足である右足の踵は地面には着いておらず、膝はバネを何時でも利かせられるように、脱力して少しだけ曲げられているために、フットワークの軽そうな足の構えを取っていた。

だが、問題はそこではなく。

御堂が目についたのは、完全に両腕を下ろした状態の無防備で、
ノーガード
間合いを詰めてきたことにある。

それを、驚きはしたが逃す御堂ではない。

伊達に喧嘩馴れしていない御堂は、突っ込んできた竜蔵の、意図的にがら空きとなっている顔面に向けて、右腕を少しだけ振りかぶった後に出した、ストレートとも言えない、荒っぽい突きを放つ。

身長差10？以上あるために、上から振り落とされる要領で、突っ込んできた竜蔵の顔面に迫る、御堂の右拳……だが、それは竜蔵が目線は相手に固定したまま、上半身だけを前に屈めるだけで空を切る事となる。

ダッキング、ボクシングの基本技術の一つだ。

ただただ、全身の力と体重を素人なりのやり方で乗せた御堂のオーバーフック気味の右拳は、空を切った途端。御堂もろとも、重心を少しだけ前に引っ張り出してしまう。

体勢が、出したパンチに持ってかれたのだ。

これは当然の事で、大抵の突きというのは、前足である足を確りと置くことにより。相手に効かせるために突いた際、どうしても前へと傾いてしまう重心を抑えることが出来るのだ。

今の御堂には、それが無く。ただ突っ込んできた相手を迎え撃つために殴ろうとしてしまったために、重心を前に傾けてしまったのだ。

一般人同士なら、勢いだけで大抵は勝てるために、それで良いのかも知れない……だが、相手が悪すぎた。

こちらに空振った勢いそのままに、御堂が前に出てくる。

見る限り、次に御堂が打撃を放つ場合は、一旦間合いを取らないと上手く打てそうに無い。

瞬間、ダッキング状態だった竜蔵の上半身が跳ね上がる。

同時に、御堂の首下を通り抜け、後頭部の所で竜蔵の両手がクラッチされた。

拙い……と感じた瞬間、御堂が背中の中全背筋群と首の筋肉を総動員させて、背筋を反らそうとするが。

ガクン————と、俄かには信じられない程の力で、御堂の上半身が一瞬のうちに下へと引き付けられてしまう。

紺色のカーペットが、御堂の視界に移る。

頭を完全に下げられた……。

気付いた瞬間に、御堂が顔を守ろうと両手を動かすが。

グシャッ！————

それよりも先に、竜蔵の右膝が、御堂の顔面……正に真正面に突き刺さった。

「きゃッ!？」 「うわッ!」 「エグ!」

あまりの生々しい打撃音に、周囲に居た生徒達が思わず声を出してしまう。

御堂の視点からは分からなかったが、竜蔵がやったのは、ただ単に首相撲からの上段右膝という、至ってシンプルな技。

しかし、その首相撲は竜蔵の太い両腕と、鍛え上げられた背筋力により、相手の顔を無理やりにも引き込むなどといった強引な手段を取ることを可能とし。右膝に至っては、地面を爪先まで使って蹴り出し、腰を前に突き出した、全身を上手く使った容赦の無いもので。正に天を貫く膝といっても過言ではなかった。

しかも、首相撲の引き込みによって生まれた勢いのせいで、この右膝は若干のカウンター性も含めており。その威力は、御堂の意識を刈り取るだけではなく、唇に裂傷を作る事や、鼻から大量の血を吹き出させるには十分すぎる程のものであった。

竜蔵の右膝による一撃を受けた御堂が、そのまま前のめりで多目的ホールのカーペットに倒れこむ。

倒れこんだときの御堂の全身には、既に力は感じられなかった。しばし、静寂がこの場を包む……。

まるで土下座をするかのように倒れ付している御堂を、竜蔵が注意深げに見下ろす。

もう終わっている……そう理解していても、自然とそれをやってしまっただけは、やはり住む世界が違うと感じさせる。

幸い、竜蔵の右膝や衣服には、御堂の返り血は付いておらず、綺麗なものだ。

代わりに、紺色のカーペットに、御堂の鼻から出た粘液混じりの血が染み込み始めた。

すると、そこで動きがあった。

「あ……あ……」

なんと、地面に頬を擦り付けている御堂が、僅かながらも口を動かしたではないか。

瞬間、竜蔵の眼が鋭くなるも、それも直ぐに収まる……どう考え

ても、今の御堂には10の間に立ち上がるなど不可能だからだ。
実際、路上でも、こんなになってしまった相手に追撃することなど、余程の加減の効かない奴で無いとする事は無い。

故に竜蔵は、警戒心のために取っていた、意識下の構えを自然に解く。

これにより、勝敗はあまりにも呆気なく決した事になる。

別に、このまま竜蔵は御堂を放って置いて、多目的ホールを後にしたって良い。

だが竜蔵は、完全に落ちそうになっている意識の中で、こちらに何かを言おうとしている御堂に耳を傾ける。

「ま……まてや……こら」

おそらく、御堂の視界の中は殆ど竜蔵を捉えることは出来ていないだろう。

しかし、いまだ眼ではなく心に、折れていない闘争心が伺えた。

文字通り一撃で、文字通り5秒とかからない秒殺で、軽く一蹴されたにも関わらず、まだ闘う気がある事に、流石の竜蔵も驚きを見せた……同時に、面白い奴だとも思った。

故に竜蔵は、その場で膝をカーペットに着けた。

「終ってない、か……意外に、根性は有るんだな？」

「あ……う……」

そろそろ、意識も完全に沈んでしまおうだろうに……。

だが、御堂は土下座の体勢でカーペットにひれ伏したまま、なんとか動こうとしている。

それを見ていた竜蔵が、突然御堂の両肩を両手で掴んだ。

そして己が立ち上がると同時に、完全に体に力が入っていない御堂を軽々と立たせる。

足元だけを見ればフラフラだ……だが、竜蔵が掴み、支えることによって御堂は頭をグラグラとさせながらも何とか立っている。

正直、傍目から見れば危ない状況だ。

しかし、止めれるものが居ないのも事実だ。

すると、無理やり立ち上がらせた御堂と改めて視線を合わせた竜蔵が、相手に語りかける様に口を開いた。

「お前、ラグビーをやってみないか？」

瞬間、周囲にいた者達全員がポカンとした顔をする。

当然、御堂もと言いたい所だが、生憎、彼は表情を作れるほど、まだ回復してはいない。

「別に、すぐに答えを出さなくても良い。取り合えず、今の状態じゃキツイかもしれないが、俺に誘われたって事を覚えていれば、それでいい」

竜蔵は言いながら、今度は御堂の左手を、同じ左手で無理やり掴み取る。

握手だ。

「俺は桐嶋竜蔵、この学園のラグビー部に所属してる二年だ。今は左手同士だが、お前が本気でラグビーに来るのなら、右手同士で握手をしよう」

やっている事は馬鹿げているが、本人の表情は真剣そのものだ……本気で、御堂を勧誘している事が、それだけで周りにも伝わるほどに。

そして竜蔵は、今度はそのまま御堂を器用に担ぎ上げ、背中へと背負うようにした。

おんぶだ……それも、自分より背の高い者を。

「じゃあ、保健室に行くぞ」

そう言って、竜蔵はこれまでの事が何事も無かったかのように、多目的ホールを後にする。

残された者達は、皆啞然として、既に意識が飛んでいた御堂を拉致していく竜蔵の後姿を眺めていた。



実際、御堂が薄っすらとではあるが覚えているのは、左手で無理

やり握手させられた所までだ。

なんで、左手なのか？

それは、今の御堂には全く理解出来ない。

だが、なんとなく“あの人”にとっては特別なことなのであろうと、理解は出来た。

入学式後の事を薄っすらと思い出していたとしても、まだ頭はグラグラだ。

視界が、時たま霞がかかる事がある。

既に、無理をして動こうという気力は無くなっていた。

今は、動けるようになるまで、まだ傍に立っている白衣の女の言葉に甘えることにしよう。

そんな事を考えていると、また彼の瞼が眠ろうとする……。

別に、抵抗する必要も無い。

すると、御堂は再び、この部屋のベッドで瞼を閉じ、眠りに付いた……。

それを、隣で見下ろしていた女。

二橋学園養護教諭の岡崎胡桃おかざきくるみは、仕方が無いなといった表情で。

眠りに付いた御堂にかけてあった布団を、優しくかけ直した。

同時に、その御堂の右手にあった紙切れを、スツと取り出す。

預かった時も、そうであったが。

改めて読んでみると、また笑みが零れそうになる。

「ふふ、あの子も随分と変わったわね……」

まるで懐かしむ様に、大人の女性らしい魅惑的な微笑みを浮かべながら、岡崎胡桃は呟く。

あの子は変わった、本当に変わった……。

胸中で手の掛かった子供の成長を喜びながら、胡桃は眠っている御堂から離れ、ベッドを仕切っていたカーテンを閉める。

動き出す二人

「軽率ですね」

まだ日も昇ったばかりといった時間。

二橋学園のとある一室で、そんな相手の行いを冷たく咎める様な、女子高生にしては色気のある少々低い声が響いた。

部屋にある、天井に埋め込み式の照明は明かりを点けられておらず。

その代わりに、早朝の淡い春の日差しが部屋を少しだけ明るくしていた。

「なにが、でしょうか？ 私には身に覚えがありません」

部屋の隅……窓際の横に長いロッカーの上で、ゆったりと座りながら早朝の窓の外を眺めている女生徒が。丁寧な言葉遣いの割りに、ひょうひょうとした態度で答える。

部屋の扉付近で立っていた、最初に声を発した女生徒には、それが気に喰わなかったのか？

一瞬、その皺一つ無い白く綺麗な眉間に、歪みを見せた……が、すぐにそれは成りを潜める。

「昨日の夕暮れ時の事です。一体、何を考えているのですか？ 確か、“彼”は執行部の“手伝い”だった筈です。なのに、わざわざ自らの正体を晒そうなどと……本気なのですか？」

執行部の手伝い……この学園には、その様な役職を持った生徒は一人しかいない。

いや、正確に言えば、既に———既成事実として———存在はしていない。

おそらく、扉の方に立っている女性は、それを知らなかったのであろう。

故に、窓のすぐ下に設置してある、横に長いロッカーの上に座っ

ていた女生徒は。相手を嗜める様に、その事実を教えてあげる事にした。

「それは古い情報ですね」

「はい？」

「もう既に、“彼”は昨日付けで執行部のメンバーに入っています……まあ、まだ非公式という形ですが。昨日の会長の様子からすると、今日にでも呼び出して、正式な手続きを彼に踏ませる事でしよう」

窓際に座っている女生徒の言うことに納得がなかったのか。

扉付近に立っている女生徒が、信じられないといった様子で声を張り上げる。

「馬鹿な！ 本当に“彼”を正式な執行部のメンバーに入れるというのですか！？ 手伝いだけならまだしも、機密性の高い執行部の仕事を、“彼”の様な人間がこなせるとは思えません！！」

まだ早朝だというのに、こちらに向かって紛糾しだした相手に対して。

「“彼”の実力……というより、実践的な能力の高さはご存知でしょうに。それを評価すれば、彼の執行部入りは当然だと思えますが？」

窓際の女生徒は特に気にした様子も無く、ただ淡々と事実を述べるようにして、自分の考えを相手に伝えた。

しかし、やはり納得がいかないのか。

「それは所詮、ただのゴロツキ相手の荒事に限った話です。私達の仕事には、本当の武術家が相手だったり、武装した者が相手の時だってあるのかもしれないですよ？ それを“見世物”としてしか闘うことの出来ない者に……」

その、ここにはいない相手を見下しているような主張に……。

「なら、アナタは“彼”に勝てるというのですか？」

窓際の女生徒が、掛けていた丸眼鏡のレンズを、昇ったばかりの日差しに反射させながら口を挟んだ。

眼鏡の奥に見える瞳は、微かに鋭い圧力を、こちらに放っている。
「……今は、そういった話ではありません。“彼”が本当の執行部の仕事をこなせるかどうか？　です」

言葉通り、今の議題はそこではないと言ったのだが。

窓際の女生徒は、それをどこか含みのある声音で。

「答えられない……と。では、私なりに解釈するとしましょう」
自己完結する事にしたのだが。

「どういう意味でしょうか？」

どうやら、扉付近に立っている女生徒には、その窓際の相手の態度が挑発にしか捉えられなかったようだ。

それを見た、丸眼鏡の女生徒は、口端を嬉しそうに吊り上げてしまふのを我慢しながら、胸中で悪戯に微笑んだ。

「どういう意味、ですか？　それは、私の解釈をアナタに伝えろという事でしょうか？」

わざとらしく、分かっているのがバレバレな芝居掛かった仕草と表情に、扉付近で立っている女生徒の鋭い目が、ますます鋭さを増していく。

下手をすれば、今の彼女の間に合いに入っただけで、何かに切られたと錯覚してしまいそうな程の威圧感と存在感が周囲に漏れ出る。

ただ立っているだけで、これなのだ……凜とした雰囲気を持つ彼女が、普通の女子高生などではない事を窺わせていた。

しかし、そんな怒気に近い感情を向けられたとしても、丸眼鏡の女生徒の表情どころか纏う空気も揺るぐ気配が無い。まるで、目の前で異常なまでの緊迫した間合いを一人で形成した女生徒が、取るに足らない実力だとも言うかのように。

「フフ。この程度で感情を昂ぶらせてしまうのですか……意外に短気なのは、昔からという事なのでしょう」

「……」

相手を茶化す様に、天井を仰ぎながら懐かしみ始めた女生徒を、もう一人の女生徒は油断無く見つめる……睨みつけるではなく、無

駄な感情、無駄な力、無駄な考えを一切削ぎ落とした、冷静な瞳。それは、どこか研ぎ澄まされた刃物を彷彿させるような、鋭く、妖艶な印象を持たせる切れ長の目で。異性が見たとしたのならば、その一点にしか興味を示さなくなってしまういそうな、そんな蠱惑的こわくてきで危険な魅力を宿していた。

しかし――――

「ですが」

この程度のものでは――――

「それがアナタの魅力でもあるのですよ？」

「ッ!？」

窓際に座っていた女生徒を、尻込みさせるどころか、“こちらの懷に潜り込ませなくする”事すら出来なかった。

いつの間にか自身の目の前に、三つ編みのお下げと丸眼鏡が特徴的な女生徒が、“仕方ない”といった表情で苦笑しながら立っていた。

いつロッカーから腰を離したのか？　いつ、この部屋の地面に足をつけたのか？　いつ、こちらに間合いを詰める踏み込みを行なったのか……その全てを捉えられなかった、理解できなかった女生徒の表情が強張る。

「そんなに驚かないで下さい。分かっていた事でしょうに？」

「……」

「もしかして、何も出来ずに間合いを侵されてしまった事が、そんなに悔しいのですか？」

首を傾げながら、拙いことをしたかなと、相手を心配した表情で訪ねるが。

一向に、返事が返ってくる気配が無い。

「フフ、やはりアナタは可愛いですね。そうやってすぐに拗ねたり悔しがったり、昔から素直な娘でした」

言いながら、丸眼鏡の女生徒は。既に顔を緩め、冷めた無表情へと変えた彼女の右頬を、左手で撫でる。

目の前で彼女を見ると、細く整った輪郭や、筋の通った小さな鼻、柔らかな唇に、先に述べた刃物を彷彿とさせる様な、切れ長でこわくてき蠱惑的な瞳が、有無を言わさぬ美しさを備えており。清らかな、それでいて凛々しい顔立ちをしている。

髪型は眉毛辺りで切り揃えられた前髪に、腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪をしていて。

また、背も168?と女性にしては高く。キュッと締まった、柳腰と称しても過言ではない、高い位置にある腰やくびれに。見事反比例するかのように存在を強調させている、上向きの形の良い胸が、女性的な魅力を更に引き立たせていた。

「特に私は、勝負事に負けてしまったときのアナタが好きですね……」

言いながら丸眼鏡の女生徒は、目の前の触れ難い美しさを持つ女性の頬から、撫でていた手を相手の後頭部に回して、今度はきめ細かな彼女の髪を梳く様にして撫で始めた。

「一見気にしてないような冷たい表情を作って、内心では泣き出したいぐらいに悔やんでいる。今も、そうなのでしょうか？」

頭半分、背の低い位置から訪ねてくる丸眼鏡の女生徒。

しかし、好きなように撫でられている方は、その言葉を見無視する。そんな態度を、愛しむ様に、丸眼鏡の女生徒は更に体を寄せる。もう、さっきまでの緊迫した間合いは、完全に瓦解していた。

すると、不意に丸眼鏡の女生徒が、後頭部の髪を梳くように撫でていた手を離し、その華奢な体も同時に離す。

いつの間にか、丸眼鏡の女生徒の表情が、こちらを愛しむものから、真剣なものへと変わっていた。

「無反応で詰まらないですね」

「……」

本当に詰まらなそうな溜息を一つ付きながら、目の前の相手を見つめる。

が、反応は無い……ただ、こちらに睨みつけるような視線を向け

ているだけだ。

おそらく、さっきのは凶星だったのであろうと、丸眼鏡の女生徒は当たりを付けた。

「では、私なりの解釈……もとい、見解を教えましょう。まず、アナタでは“彼”には勝てません、もちろん私にもです」

「ッ!？」

瞬間、こちらを睨みつけていた目が、更に強張る。

「私が、“見世物”である“彼”には勝てない?」

納得がいかない、腑に落ちないなどではなく、“ありえない”といった声音。

「相手を刀で、いかに効率よく、いかに確実に殺傷できるかを突き詰めた武術と。“彼”の現実的ではない、試合でしか役に立たない格闘技……比べるまでも無いと思いますが」

“彼”という人物と、己が修練している“もの”の違いを、当たり前といった様子で語る女生徒に。

相対している女生徒の苦笑が漏れ出した。

「そうですか。いかに効率よく、いかに確実に……ですか」

「なにが可笑しいのですか?」

明らかに、こちらの事を嘲笑っている相手に、切れ長な目を鋭く細める。

しかし、そんな視線などお構いなしに、相手は突きつける様に言い放つ。

「では、先の状況や、今のこの状況で。アナタは何回、私に殺されたと思いますか?」

「……」

「だんまり、ですか……アナタなら分からない筈が無いのですがね」
相手から答えが返ってこなかった事を、残念そうにする丸眼鏡の女生徒。

だが、それから一拍の間を置いて、相手の女生徒が口を開いた。

「……三回です」

「いいえ、ハズレです。正確には五回ですね」

「……」

即答で、紡ぎ出した答えを否定された女生徒は、唇を悔しそうに噛み締めながら表情を俯かせる……。

それは暗に、この女生徒自身が、丸眼鏡の女生徒の答えに反論は無い、正しいと認めた瞬間であった。

その様子を、真剣な表情で見つめる丸眼鏡の女生徒は。別に気にすることではないと、相手を慰める様な口調で言葉を続けた。

「私の言うことを理解できただけでも、アナタは進歩していますよ」
「……」

「ですが、これは相手が私ではなく“彼”だったとしても、殆ど同じ結果が出たことでしょう」

「そんな事！ 有り得る筈がありません！」

これには納得が出来なかったのか、俯かせていた表情を“バツ！”と上げると同時に、怒気を露にした。が、丸眼鏡の女生徒は冷静だ。

「まず、アナタは今、肝心な得物を持っていません。これでは言われても仕方の無い事でしょに」

「ですが、私にも一応、無手の心得があります！！」

「一応のレベルで、“彼”に対抗出来るとでも？ でしたら、一度試してみると良いでしょう。“彼”なら喜んで受けるのでは無いでしょうか？ そうですね、丁度良い機会です、柔よく剛を制すを体現してみるのも悪くないのでは？ まあ、もっとも、“彼”の身体能力や鍛え上げられた肉体を、アナタの“一応のレベル”で抑えられるのかは保障しかねますが」

「……くっ」

奥歯で苦虫を噛み潰したかの様に、丸眼鏡の女生徒の言葉から引き下がる。

実際、理解は出来ている筈だったのだが、自分の修練している武術を馬鹿にされたようで頭に來てしまったのであろう……。

「そして、もう一つ……」

「……？」

「“彼”なら、アナタが無駄なことを喋っている、悔やんでいる間に。既に仕掛けている筈ですからね……今まで見てきて、彼が荒事に関わっている時は、様式美や空気など有って無きようなものでしたから。それは相手が自身より格下だろうが何だろうが、変わらなかった事の一つです」

冷静に、相手の習性を理解した上で、仮想を語る彼女の言には、不思議な説得力というものがあつた。

それに……と、続ける。

「アナタの立場が、私になったとしても、結果は同じかもしれない」

「それは……」

「有り得ない……いえ、有り得ます。まず、体格差は言わずもがな、実際のスピードは“彼”の方が早いと、私は考えていますから」

己の実力を知るものは、相手の実力も考慮した上で、イメージトレーニングを行なえる。

これは、どんな格闘技だろうがスポーツだろうが同じこと。

なぜなら自分のスピードやパワー、もしくはステップの歩幅や入り込みの速さやら……これらを知らない限り。例えば自分よりも格上の選手を想定してイメージをした場合でも、自身の実力を考慮しないで、いや、出来ないで、都合の良い試合運びしか想定しなくなってしまうからだ。

自身のスピードに相手は反応できる、自身のパワーや攻撃の仕掛け方は相手に通用する。そういった事を少しでも理解していると、またイメージトレーニングの“現実味”は増し、効率の良い有意義な、かつ、“甘くない”試合を想定できるようになる。

故に、相手を過小評価も過大評価もしなくなり、中立な立場で実力を判断できるのだ。

それを心得ているらしい丸眼鏡の女生徒は、まだ信じられないと

いった表情をしている、目の前の女生徒に至って真面目な声音で視線を向け続ける。

「これは、自身と“彼”を客観的に評価しての考えです。そんなに驚いた表情をしないでください……本当に合っているのか、自信がなくなってしまうじゃないですか」

「いえ……私はアナタの言うことでしたら、大抵は信じられます。ですが、こればかりは」

「フフ、そこまで信頼されると照れてしまいますね」

ほのかに紅く染まった右頬を、ポリポリと恥ずかしそうに人差し指で触れる……かなり芝居がかった仕草をする丸眼鏡の女生徒に、対峙している方かというと。

「あ、当たり前です……私は、アナタに育てられたと言っても、過言ではないぐらいに、お世話になっているのですから」

こちらにも、恥ずかしそうに顔を赤面させながら、その芝居がかった仕草を真に受けていた。

彼女の反応に、改めて——背もスタイルも負けてはいるが——「可愛いと思った丸眼鏡の女生徒は。もうちょっと遊んでみようかなとも考えたが、そろそろ時間も迫っていたので、話を切り上げるためにベに入った。

「ですが、安心してください。確かに身体能力では、圧倒的に“彼”の方が上でしょうが、こちらは真正面から闘うつもりはありませんから」

「真正面から闘わない、ですか？」

相手を真心から安心させるための、優しい口調。

それは、真に丸眼鏡の女生徒が、相手の女生徒を愛しているのかの様な暖かさが籠っていた……が、それは次には不敵な表情と共に、一変する。

「はい、私は何者か……それを忘れていないのですか、“さいえ冴島刀子”さん？」

冴島刀子と、丸眼鏡の女生徒に呼ばれた者は。

その彼女の絶対的な自信が内包された表情を見て、ようやく落着いた表情をした。

「なるほど……そういえば、そうでしたね。木佐貫家第八代目女忍筆頭目“木佐貫千代女”先輩？」

傍目から聞けば、何を訳の分からないことをと感ずるかもしれない。

女忍……一般的に“くの一”とも呼ばれる、遙か昔に消えた名称。現在では、創作物などで登場したり、日本を勘違いした外国人観光客が、おふざけ程度に探している、そんな程度の言葉だ。

しかし、この場にいる二人は、そんな現実味の無い名称を、大真面目に受け入れていた。

冴島という女生徒に、木佐貫千代女と呼ばれた丸眼鏡の女生徒が。そろそろ話しも切り上げようと、視線を冴島から外しながら扉の前まで歩いていく。

「少し、今回の私の目的とは違った話になってしまいました。これで納得してくれましたか？」

扉の前で、視線も向けずに、背中越しで問いかける木佐貫……。暗に、もう口は出すなといったニュアンスも感じられたが。

冴島は、それを無視する。

「千代女さんが、そう仰るのなら納得はします。ですが、一つだけ「はい？」

さっきまでの怒気を含んでいた声音とは、違った真剣みのある言葉。

それに、何かあるのかと振り返った木佐貫は。そこで、冴島刀子という洗礼された、凛々しく清らかな容姿を持つ女性の、本当の自信に満ちた表情というものを見る。

「“彼”……桐嶋竜蔵という男を、私に“試させて”下さい」
胸元に片手を添え、真に訴えかけてくる彼女の表情に、木佐貫は一度、軽い溜息を吐くと。

「良いでしょう。ですが、それは私の用件が終った後にして下さい

ね？」

それだけ言って、木佐貫千代女は嬉しそうに微笑みながら、この部屋を出た。

すると、途端に静寂に包まれる室内……まあ、いるのが一人だけになったから当たり前だが。

だが、しかし。

そこに一人残った、冴島刀子という女生徒の胸中には。室内を包む静寂とは真反対の、剥き出しの対抗心が芽生えていた。

（千代女さんに、あそこまで言わせる男か……楽しみというよりは、負けられないな、絶対に）

心で、そう決心をつけると。

冴島刀子は、学園内で所属している部活の朝練に参加するために、この部屋を後にした。



二橋学園の健康診断とは、まあ例に漏れず、皆体操着に着替えた後。

視力・聴力・身長・座高・体重などといった他に、心電図や後日の尿検査までを測定する。

また、その際に体の上からのサイズも測るため。この日の朝のために絶え間ぬ努力を三日間ぐらい限定で続けてきた女子の生徒達がいる。

そして現在、それら三日間限定で絶え間ぬ努力を続けてきた他の女子生徒達を、まるで嘲笑うかのような記録を残した者が、学園の保健室にいた。

「ウエスト……ご、54cmですって」

メジャーを持つ手を小刻みに震わせながら、敗北感と懐疑心の入り混じった表情で、信じられないと言葉を漏らす養護教諭、岡崎胡桃……。

目の前には、水分の吸収率と発散率が高められた体育着の上を捲った、黒髪の美少女が佇んでいた。

「あの、岡崎先生？」

「う、嘘よ……だって、この娘のバストは87？もあつたのよ？」

ありえるわけがない。そうよ、ありえるわけが……」

ぶつぶつと言いながら胡桃は、再び細いメジャーを目の前の美少女のウエストに巻きつける。

しかし、結果は変わらない……。

「そ、そんな……」

張りのある、透き通るような若々しい白い肌に、薄っすらと見える、お腹の筋……女性だけではなく男性ですら理想としか浮かべられない、奇跡のくびれが目の前で岡崎胡桃に、現実の厳しさ^{リアル}を教えていた。

それはもう、口惜しいや悔しいなどを通り越して、崇めたくなってしまう様な気持ちになるほどだ。

奇跡のくびれを持つ女生徒の後ろでは、既に同じクラス的女子達から、どよめきの声が上がっている。

「岡崎先生、次の人も控えているので、早く最後の方も計ってくださいませんか？」

一向に現実を認めようとしないう胡桃に向けて、目の前の女生徒が困ったように声をかける。

すると、それによりやく目を覚ましたのか。

「え、あ！ うん、ごめんなさいね、じゃあ最後も計っちゃうから……」

言いながら、胡桃は彼女のウエストに巻いていたメジャーを、今度の上とは違って下着姿になっているヒップの方へと下ろしていく。そして、胡桃は再びの絶望と、女としての敗北感を味わうのであった。

満足気な表情で鼻歌まで歌いながら、次の測定場所にまで移動をしているのは。

先程、新入生以外では大人の色気と悩ましいボディが有名な養護教諭、岡崎胡桃を絶望のどん底にまで突き落とした美少女。

その美少女は、長く真っ直ぐな黒真珠を思わせる髪と、女子高生らしい可愛らしい瞳や、細く整った輪郭が特徴的で。尚且つ、その体操着越しからでも十二分に確認できる、メリハリのある膨らみが、異性の視線を釘付けにしていた。

彼女がご機嫌な様子で、手に持っているのは健康診断の記入プリントだ。

体重・身長・スリーサイズ共に、そんじょそこらのモデルでは太刀打ちできない数値を叩き出しており、また先に述べたとおり、あの場にいた殆どの女生徒に劣等感を通り越した絶望感を与えていた。そして、その名前の欄には、桐嶋美夏きりしま みなつと記載されていた。

つまり、廊下を歩いているだけで、周囲の視線を釘付けにしていた美少女とは。

あの兄妹である竜蔵が大好きで堪らない妹であった……。

「ふっふっふん♪」

「ご機嫌だね」

美夏が両手で覆うようにして、胸の前で記入プリントを大事そうに抱えていると。

隣を歩いていた木下藍が、きのしたあいこちらを少し沈んだ様子で尋ねてきた。それに、花が咲きそうなくらいの微笑みを浮かべた美夏が、“分かる？”と言ったふうに振り向く。

「だってえ、私が予想してた以上に成長していたんだもん♪」
「へー」

本人には悪気は無いのは分かるのだが、どうしても棒読みで白けた視線を向けてしまう。

そんな藍は、花も恥らう女子高校生だ。

「良いね、自分が思ったとおりに成長できてさ……」

「何言ってるの？ 藍だって、平均から見れば完全に嫌味を言えるレベルよ？」

高身長な筈なのに、表情に影が差し込むほど沈んでいる藍を見て、美夏が首を傾げる。

「へん……どうせ、それも“背の高い女”とか言われて、馬鹿にされるんだ」

へそを曲げたというよりも、不貞腐れ始めたと言った方が適当な藍の豹変ぶりを見て。

美夏は（あゝ、変なスイッチ入れちゃったかも）と、何に後悔したら良いのか分からないが、とりあえず後悔をしていた。

しかし、彼女のしなやかかつ機能的な肢体を見る限り。そんな馬鹿にしたほうが痛い目を見そうな、スレンダーな美しさがある……正直、美夏自身、彼女が持つそういった魅力には勝てないと踏んでいるぐらいなのだ。

何を落ち込む必要があるのか？ むしろ、その態度が周囲に劣等感や嫉妬を芽生えさせるのではないかとも思う。

「背が高いからって言っても、世界のモデルの人とか見ると、たまに180cmの人とかいるし、そんなに落ち込むことも無いんじゃないかな？ 実際、ウエストだってヒップだって負けてないんですよ？」

故に美夏は、事実に基づいた、彼女の正当な評価を自分なりの見解で伝えることで、慰めようとしたのだが……。

「でも、胸は負けてる……」

（あゝ……）

悲しそうに呟く藍に、美夏は返す言葉を見失ってしまった……。確かに、彼女の胸は小さくはある……だが、それは平均と比べたら大差は無い。

しかし、それは胸が出ているからとかいう次元の話ではない。ただ単に、藍の“もともとの胸囲”が、それぐらいあったというだけの事。

つまり、簡単に言ってしまうえば、彼女の胸は小さいということなのだ。

そんな胸の小さな藍が、今度は恨めしそうに美夏の大きくて形の良い胸に視線を向ける。

「世の中って、どうしてこうも格差があるんだろう。不公平だよね」「いや、それを言うのだったら、藍がやってる女バスだって同じ事なんじゃないの?」

「確かにそうだけどさ……納得いかないじゃん、こう、女として」「藍は別に女性としてダメって訳じゃないと思うんだけどな。顔だって、凛々しい感じの美人って雰囲気だし。もと自信持ちだよ」
もはや沈み続ける藍を、いかに慰めるかという難題になってしまった、この状況。

そこでふと、美夏は良い案を思いついた。

まあ、これは木下藍という、ボーイッシュな雰囲気を持ちながらも、確りと女性らしい凛々しさと清純を持った人物だからこそ、通用する手段なのだが。

しかし、思い立ったが吉日……この際、条件ありの手段だろうが何だろうが選んでられない。

自身の思いついた案を執行しようと美夏は、まだ他の新入生達が次の診断のためにゾロゾロと歩いている廊下に目を配らせた。

そして、目的のものを見つけたと共に声をかける。

「ねえ、竹島君……だっけ? ちよつと良いかな?」

「えっ!?!」

美夏が声をかけた“もの”……それは、同じ1年A組の男子生徒だ。

ちなみに、なぜ“もの”なのか?

それはただ単に、美夏が“兄以外の異性を人として見ていないからだ”。

しかし、そんな美夏の事情などは知らない、声をかけられた男子生徒は。新入生代表挨拶の時や、現在の状況下でも一番目立つ、十

人が十人、美少女だと断言できる程の容姿をした美夏に。声をかけられただけではなく、名前も覚えてもらっていた事に、内心で小躍りしてしまいそうな程に胸を昂ぶらせていた。

「あのさ、素直な意見を聞かせてね？」

腰に片手を当てながら、人差し指を立て、相手に“これは重要だよ？”といった、あざといジェスチャーを取った美夏の仕草に。思春期真っ盛りの初心な男子生徒は、思わず顔を赤らめながら「おう！」と微妙に男らしい返事を返した。

おそらく、優美な容姿や纏う雰囲気とは違った、美夏の気さくな態度に。オドオドと動揺をしてしまったら、舐められてしまうかもしれない、変な誤解が彼の脳裏に浮かんだのであろう……まあ、彼女は舐めるところか、兄以外の異性などゴミ程にも思っていないのだが。

しかし、それと、高校での友人一号である藍を慰めるのとは話が別だ。

今は、どんなに兄以外の異性と話すのが面倒でも、優先すべきは友人なのだから。

「じゃあ、聞くね？」

「おう！ い、いつでも良いぞ……」

「よろしい、良い心がけだね……」

あまりの動揺で、米神に一筋の汗を垂らす男。

周囲では、その美夏に声をかけられた男に対する嫉妬心が芽生えていたが、美夏にとっては全く興味の無いことだ。

故に、美夏は男子生徒に、何の気兼ねもなく尋ねる。

「竹島君は、木下さん。藍の事、素直に可愛いと思う？」

「……え？」

受け取り様によっては、印象の悪い問いかけなのだが。

それは、美夏の嫌味のない声音や仕草、または微妙に心配している様な表情のお陰で、不思議と感じはしなかった。むしろ、友人思いの好意的な印象が持てたぐらいだ。

そして、美夏の問いに、男子生徒は全く持って迷いなく答える。
視線はもちろん、テンションのダダ下がっていた藍に向けながらだ。

「いや、普通に可愛いってか、美人だと思うけど？」

「ひゃいっ!？」

男子生徒に見つめられた状態で、そんな事を言われてしまった藍は。

これまでの暗い表情が嘘だと思えるぐらいに顔を紅潮させ、素っ頓狂な声を思わず出してしまう。

「ほら言ったじゃない、藍は誰から見ても可愛いし美人な女の子なんだから、自信を持ちなっ♪」

「い、いや。そ、そそそんなこと! い、いきなり言われたって……」

あまりの驚きに歩いていた足を止めてしまった藍は。

こちらに嬉しそうな表情で、“言ったとおりでしょ”といった視線を向けてくる美夏に、声を萎ませてしまう……。

昨日、今日と見てきて、彼女に活発で男勝りな印象を持っていた美夏は。この恥ずかしそうに顔を赤らめながら萎んでいく友人を見て、ちよつと面白いと感じてしまった。

故に、この面白さをもっと感じたいと思ってしまった美夏は。

「一人じゃ納得してくれないんだ……じゃあ、他の男の子にも聞いてみよっか!」

「ちよ!?! ちよつと待ってよ美夏!!!」

「え、あれ? 俺って、これだけ?」

もはや涙目になりながら、暴走しようとする美夏を止めようと、藍は走り出した彼女を追い始めた……幸い、この追いかっこのお陰で、美夏が他の男子に声をかける事はなかったが。

(何この娘! あたしが本気出しても追いつけないなんて!?)

チラホラという人の障害物を巧みなステップで避けながら走る二人。

だが、背も高く、足も前を走る美夏よりも長いはずの藍が、どうしても彼女の流れるような走りに追いつけない。

外見に似合わないピッチ（脚の回転数）やストライド（歩幅）もそうなのだが。

彼女の走りは、足を素早く入れ替えるたびに、腰まで伸びたストリートの黒髪が舞い、また、その大きく形の良い胸も揺れるために、周囲にいた男子生徒達の視線を釘付けにしていた。

しかし、そんな視線など関係ないといったふうには、美夏の表情には本当に楽しそうな笑顔が浮かんでいた……まあ、後ろを走る藍は、止まったら再び恥ずかしい思いをしてしまうので、若干の涙目を浮かべていたのだが。

だが暫くすると、突然、美夏の表情に笑顔はなくなる。

同時に、その動かしていた脚もゆっくりと止め始めた。

急に逃げなくなった友人に、何事かと思った藍は、そのまま止まった友人の隣までペースを落としながら歩を進める。

「……急に、どうしたの？」

美夏の隣へと歩いてきた藍が、その相手の顔を覗き込む。

瞬間、藍の背筋に嫌な悪寒が走った……。

「み、美夏？ 何か怖いよ？」

「え、何が？」

藍の震えた声音に反応こそするが、美夏は向けている視線を外そうとはしない。

表情は正に無表情……それも、精気というより感情を感じさせない、お面の様な無表情。

目は見開いたまま、ずっとある一点を凝視している。

流石に、この整った顔立ちをした美少女が、一切の感情を感じさせない表情をしている光景に、恐怖を感じたのか。藍が美夏の放つ空気から逃れるように、彼女が向けていた視線の先を追う。

すると、そこには本校舎と別の建物を繋ぐ渡り廊下があった。

この渡り廊下は、本校舎と別の建物の一階同士を繋いでいるため

に、外履さえあれば外に直接出れるよう、何箇所か出入り口のような所が見受けられた。

だが、美夏が視線を向けているのは、そんなどうでも良い所ではない。

視線の先には、彼女の兄である桐嶋竜蔵と“一緒に”隣を歩いている一人の女生徒がいたのだ。

ちなみに、他にも彼の友人らしき者達も近くに数人ほいたのだが、どうやら彼女には見えていないようであった……恋は盲目などという言葉では、全く持って片付けられない現象だ。

「ちよつとごめんね、藍。私、行かなきゃ」

そう言って、至って当たり前の様に兄がいる方へと行こうとする美夏を。

ガシ————藍が肩を掴む事で止めた。

「どうしたの、藍？」

「いや、行くのは別に構わないんだけど、まずはその“誰だろうと構わず虫の様に殺してしまいそうな眼”は止めてくれ。本気で恐いってか、これは誰だって止めざる負えなくなる」

静かな、それでいて透き通る様な声音で振り向いた美夏に、藍が額に汗を浮かばせながら言う。

「え？ 私、そんな眼なんてしてないよ」

カクンと、まるで人形の首が折れたかのように首を傾げる美夏。

不気味だ……また、それをやっている本人が、人形の様に造形の確りした顔立ちをしているから、余計に不気味だ。

だが、ここで彼女を野放しにしてしまうと、渡り廊下の途中で友人達と楽しげに談笑している彼女自身のお兄さんや、その周りの人たちに、確実に危害が及んでしまう。

まさか、この虫も殺さないような可憐な少女が、そんな事をするとは思えないが、一応念のためだ。

「とりあえずさ、早く次の診断に行こうよ、ね！ お兄さんと話すなら、また後でも良いじゃん！」

「え、あ、ちよつと藍!？」

藍は捲くし立てるようにながら、美夏の肩から手を離し、今度はその右手を取って渡り廊下から離れていく。

そのあまりの唐突さに、抵抗する術もなく引っ張られていく美夏は。

「藍、放して! 私は、お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの!！」

「今は診断の方が先でしょ? 終ったら、それだけ早く帰れるんだからさ! 協力し合おうよ、ね!」

宥める言葉こそ、それっぽいものがあるのだが。相手の手を引っ張って、強引に歩いていく様は有無を言わさぬ……というより、どこか必死に見えた。

動き出す二人（後書き）

またイメージ絵です。

冴島刀子

>i 3 2 0 9 3 — 2 3 7 9 <

桐嶋美夏（ちょっと写りが悪かったやつです）

>i 3 2 1 0 3 — 2 3 7 9 <

カミングアウトに爆弾発言（前書き）

今回、下手ながらも描いた挿絵があります。

お見苦しいかもしれませんが、ご覧になっていただけると幸いです。

※行間というものを、少しだけ意識して書いてみました。

まだ見づらいという方がいらっしゃったら、気軽に意見を下さい。

それは直接、私の成長にも繋がるので。

カミングアウトに爆弾発言

新入生の健康診断は、特に問題も無く、順調に全生徒の診断を終えた。

ただ、一部の生徒……というより、木下藍にとっては、大変面倒臭い行事だったという事を、ここに一応記して置こうと思う――

理由は高校での最初の友人が、何やら人を殺しかねない雰囲気で、その友人の身内である兄の所へ歩こうとしていたのを阻止していたからであるが……まあ、それも暫くすると落ち着きを取り戻してくれた。

が、それは一時の安寧だった様で。

それから事あるごとに、友人はその身内である兄を見つける度、突入を繰り返した。

男友達で集団を作っていたのなら何事も無く済んだのだが。そこに一人でも女性がいると、また人を殺しかねない顔で歩み寄ろうとしてしまうので、何度も木下藍が必死に友人を引きずるという光景が見受けられた。

ただ数としては、そこまで繰り返した訳でもなかったので、助かったといえは助かったのだが。

何故このような事になるのか？――理由が全く分からない状況で、同じ事を繰り返していくのは辛いものがあつた様だ。

故に現在。

友人の原因不明の暴走に振り回された木下藍は、教室の自分の席の机の上で、ダラーっと疲れた様子で突っ伏していた。

彼女らの教室は、新入生の中でも成績優秀・中学時代に課外活動や校外活動などで高い成績を収めた者達が集められた1年A組。つまり、新入生内でのエリートを寄せ集めたような学級だ。

しかし、いくらエリートだと言っても、所詮高校生は高校生……周囲では、終わった健康診断や、昨日やっていたTV番組、はたまた既に学園の部活に入部している者達の話題で、ガヤガヤと騒がしい限りであった。

そんな中でも、名前順的に藍の前に席を置いている人物の周りでは。

入学早々、“可愛い彼女をゲットして他の男子達に優越感を感じられる薔薇色の学園生活”を夢見た、ちよつと軽そうな男子や、明らかにまだこういった事に慣れていないデビューしたての男子が集まっていた。

この光景を、突っ伏した状態で一段上の机から眺めていた藍……。中には、藍の眼から見ても（あ、ちよつと格好いいかも）だとか（へへ真っ直ぐで優しそうな奴じゃん）だとか、そういった高評価の者達もいたのだが……。

その尽くを、美夏は小悪魔よろしくの当たり障り無い対応と微笑みで退けていた。

故に、退けられた男達の顔に無念の文字は無い……あるのは、無意味な希望を持たされた哀れな顔だけだ。

真に恐ろしい娘である。

しかし、そうなると藍には疑問に思う事がある。

（しかし、ホントにお兄さん以外に興味とか示さないよね……この娘）

昨日の入学式で的一幕。

新しい教室へと移動する際に、校門前で周りの目も憚らず、身内である兄の胸に飛び込み。そして傍から見ても恥ずかしいぐらいに甘えていた様子を藍は思い出していた。

それに今日も今日とて、次の診断がある場所に移動している最中

に、偶然その兄に会うと、毎度お馴染みの如く駆け寄る、または飛び込んで行こうとする……。

おまけに、その兄が他の女子生徒と仲よさげに歩いているだけで、不機嫌そうな顔。というより、人を殺しかねない危険な色を感じさせる表情になるのだ。

まだ何となくではあるが、藍はこの前の席に座っている友人の事を、ただのブラコンでは無いのではと感じ始めていた……まあ、まだ感じ始めた程度ではあるが。

「ねえ、どうしたの。そんなボ～っとしちゃってさ？」

「え？ ああ、うん」

思いの他、考える事に意識を向け過ぎていたのか。

いつの間にやら、件の友人、美夏がこちらに、椅子の背もたれに右ひじを乗せながら振り返っていた。

その機嫌の良さそうな声に、意識を思考の世界から引き戻された藍は、どこかまだ呆けたような返事を帰す。

しかし、あんなにもこちらに迷惑というより、労働力をかけておいて。どうしてそこまで機嫌よくいられるのであろうか？

藍は、そんな疲労により荒み始めた心によって生まれてしまった負の感情に、何の躊躇いも無く身を任せる事にした。

まだ出会って二日目の相手に、中々の度胸、思い切った性格である。

「いや、ちょっと疲れちゃってね……主に、あたしの前にいる困ったブラコン娘のせいで」

言いながら、一段下に座る美夏に、意地悪な視線を落す。

「えっと、ホントにどうしたの？」
その視線の意味するものが分からなかったのか、美夏が困ったように聞き返す。

「……分からないの？」

聞き返された藍は、結構自分なりに皮肉を込めたつもりだったの

に、本当に分からなかったのかと、信じられないといった表情をする。

それに藍自身、一瞬可愛いと思ってしまう仕草で小首を傾げる美夏……。

だが、いくら何でも、あれだけの苦労をこちらに強いておいて（止めなければ拙いという義務感に駆られて）、全く自身の落ち度に気付いていない彼女を見て、藍の苛立ちが徐々に増していく。

故に彼女は、もう回りくどい言い回しなど捨てて、直接的な表現をぶつけてやると決意した。

「美夏さあ……本当に気付いてないなら、結構危ないかもよ？」

「え？」

「診断の最中にさ、何度か移動があったけど。その度に、美夏はお兄さんを見つけては突っ込んだりしてたじゃん？　しかも、お兄さんの近くに他の女の人がいようなものなら、すごい危ない顔してたんだよ？」

「……」

藍の直接的な指摘に、美夏は表情に苦笑いを浮かべながら固まってしまう。

おそらくさっきまでの自らの行動を、記憶の底から引き揚げているのであろう。

そんな彼女の様子を見て、藍はようやく（あ、やっと反省する気になったかな）と安心していたのだが……。

「藍？」

「うん？　やっと、謝る気になってくれたかな」

記憶の引き揚げを終えたのか、美夏がはまだ体操着姿の居住まいを正して、藍に視線を向けた。

藍は『おし、話を聞いてやろう』と、机に突っ伏していた体制から、椅子の背もたれに体を預けた、どこか偉そうに踏ん返り返った態度で美夏の言葉を待つ。

しかし、出てきた答えは……。

「ごめん、ちょっと私には何がいけないのか分からないよ……」

「はぁ!？」

本当にすまなそうにしながら発せられた、彼女の信じられない言葉に。藍が思わず驚きの声をあげてしまう。

危うく、椅子から転げ落ちそうなぐらいだった。

「そ、そんなに驚く事なの？」

キョトンと、こちらのリアクションに戸惑う美夏。

そんな彼女に、藍はこちらがキョトンとしたいわと、心の中でツッコミを入れながら。

「だって、どう考えたって私が見てきたどの兄妹よりもスキンシップというか、接し方が悪いけど異常なんだよ？ 公衆の面前で飛び付いたり、お兄さんが他の先輩達と話している最中に、また飛び込んだり……終いには、さっきも言ったけど、他の女子生徒を殺しかねない眼をしてたんだよ？」

「えゝそんなの藍の気のせいじゃないの？」

「違う！ 絶対に違う！！ だってあたし、証拠に写メも撮ったもん！」

そう言いながら、藍は美夏同様、いまだ着ていた体操着の短パンのポケットから、自身のタッチパネル式の携帯電話を取り出した。

「ほら、見てみなよ！」

取り出したタッチパネル式の携帯電話を、手馴れた様子で操作しながら、藍はすぐに証拠である写真を美夏に見せた。

向けられたディスプレイを、『まさか、そんなことは無いでしょ』といった態度で確認した美夏は。

「……嘘」

あまりの事に、そう呟く事しか出来なかった。

藍が、こちらにかざしたディスプレイに写っていたのは、能面の様に表情を凍らせた状態で、その普段はハッキリと見開かれた可愛い、長い睫毛がチャームポイントの瞳には全くの精気が感じられない、日本古来のホラー映画を髣髴とさせる、自身の色白な顔で

あった。

>i32260—2379<

怖い、というより信じられない……。

この写真を見せられた美夏は、自身がしていた表情に自ら恐怖した……。

そこでふと、写真を見せられていた美夏が気付く。

「あれ？　これ、光の反射じゃない……よね？」

「え？」

美夏のどこか震えた様子の口調に、藍が向けていたディスプレイを、自身に向け直す。

だが戻したものの、目の前の友人が正直何に怯えているのか理解できていなかった藍は、暫くディスプレイと睨めっこを続けていたのだが。

「……なに？　この丸く光ってるのは？」

藍の表情が、気味の悪いものでも見たというふうに変む。

二人が見たもの……それは、写真に写っていた美夏のすぐ傍にあった、白く丸い発光体。

始めはただディスプレイが光を反射させているだけかと思っていた。だが、よく見てみると、角度をどんなに変えようと、写真に写っている白い発光体は消えやしない……。

流石に気味が悪いと思ったのか、藍はすぐさまその写真のデータを消去する。

「何だったんだろう……多分、ただの偶然だったと思うんだけど」自身が写っていた写真に、謎の現象が起きていた事に、気持ちの悪い思いを感じた美夏は。まるで自らに訴えかけるように推測を述べた。

「そ、そうだよ！　ただ単に、光が変な感じで写り込んでただけだって、きつとそうだって！」

こちらにも、この不思議な現象を偶然で片付けたいのか。誤魔化すように、わざとらしい笑みを浮かべている……ただ、その笑みはどこか引きつった様子であったが。

一刻も早く、こんな訳の分からない事は忘れたい。

そう考えた二人は、無理やりの話題転換を試みた。

「えっと……あ！　そういえば美夏の身体測定の結果って、結局どんな感じだったの？　あたし、ウエストの事しか聞こえなかったからさ！」

「そ、そうね！　えーと、その……こ、ここじゃあ言いづらいから、耳貸してくれるかな？」

藍の思い出したかのような言葉に、美夏が恥ずかしそうにしながら周りを見回した後。椅子から腰を上げて、藍の耳元に口を近づけた。

普段なら、どんなに嬉しい結果が出ていたとしても、こんな軽々しく情報を晒すような事はしないのだが。おそらく、今しがたの気味の悪い雰囲気、早く払拭したかったであろう。

だからこそ、藍の言葉通りに、自身のスリーサイズを小声で伝えたのだが……。

「……なんだけど。うん？　どうしたの？」

伝え終え、相手の耳から口をゆっくりと離れた瞬間。

なにやら藍の様子が不穏なものへと変わっていくのが、美夏にも確認が出来た。

具体的に言えば、彫りの深い目は影に隠れ、机に付いた両手の手の甲には力が入っているのか、数本の血管の筋が浮き出ている……更には、その女性にしては筋肉質であるが、意外と華奢な印象もある両肩がプルプルと、何かに打ちひしがれている様に震えている。

何事か……と、美夏が疑問に思った刹那。

「だああああッ！！！！！」

「きゃッ!？」

突然、藍が狂ったように……いや、狂った。

座っていた席から怒涛の勢いで立ち上がり、一つ下の段の美夏だけではなく、教室中のクラスメイト達すら驚かす大声を鳴り響かせた藍。

周囲からは、何事かといった視線を浴びせられる……が、今の藍にそんな事を気にする余裕は無かった。

「ほ、本当にどうしたの!?!」

「うるさい!! この非国民め!!」

「非国民!?!」

「あたしはね、このJapanという国を、侘び寂のある本当に謙虚で美しい国だと今まで信じて来たんだ!! だけどね、美夏。アタの体は、その古き良き侘び寂の精神を忘れた、非国民以外の何者でもない!! 返せ! あたしの好きだったJapanを返せ!!」

もはや涙目になって、美夏に指を突きつけながら、己が思いをぶちまける藍。どうやら相当、彼我の戦力差が絶望的であったのであろう。

それに、少しの間、訳が分からないといったふうに引いていたものの。

ここまで言われるいわれも無いと、美夏が反論しようと口を開こうとすると……。

『そうよ! 桐嶋さんは、もう少し“無意識な主張”を控えるべきだよ!!!』

『持っている者と持たざる者の差が、どれだけのものか知るべき!!』

『大体、トップに比べて、あのアンダーは羨ま……いや、反則だと思っ!!!』

『桐嶋さんのスタイルは、“校則で規制すべきレベル”!! そうしないと、私達の立場が……』

周囲のクラスメイト達から、悲痛とも称せる格差の撤廃運動が起こり始めた。主に、健康診断の際に保健室にいた女子達から。

そのあまりの勢いに、流石に当たり障りの無い付き合いが得意な美夏でも気圧されてしまう。

一体、何が起こっているのかと、突然の事だったために思考が混乱してしまふ美夏。

しかし、尚も彼女達の格差撤廃運動は怒涛の勢いを見せる。

『桐嶋さん！　どうやったら、そこまでのプロポーションになれるのか、私達に情報を開示して！！　でないと、あまりにも……』

『泣かないで！　泣いたら、私達は一生、この格差に屈しなければならぬのよ！！　今は最後まで立ち続けて、勝利を？ぎ取るの！』
何をどうすれば勝利を？ぎ取れる事になるのか？

今の彼女達に、そんな事は些細な疑問の様で。

既に美夏の席の周りには、無数の血の涙————に見えるだけ————を流した女子達が集まっていた。

「ちょ、ちよつと。皆、落ち着いて……」

もはや苦笑いどころか、本当に困った表情をしながら彼女達を宥めようとする美夏だった。

「落ち着いてなんかいられる訳が無い！！　大体、いくら高校生だからといって、まだ中学から卒業したばかりだっていうのに、どうしてそんなに立派に育ってしまったんだ！？　この学園での最初の友人から御願いだ！　どうやったら、そんなになれるんだい！？」

自身の席の後ろから、もはや言葉遣いがグチャグチャになり始めて来た、学園での最初の友人からの涙混じりの悲鳴が耳に届いた。

それに連られるかの様に、他方向からも、また同じような言葉が飛んでくる。

一体、この状況は、どうすれば収まるのか……今の美夏には、全くといって良いほどに手立てが無かった。

しかし、そこで美夏がふと、何かを悟り始めた……。

なぜ、体の発育が良いだけで、ここまで言われなくてはならないのか———

なぜ、皆にもそれぞれ魅力的な部分があるのに、そこばかりに拘

るのか――

大体、この体を自由にしているのは、敬愛する兄だけなのに――

そうだ、兄だけなのだ……なのになぜ、皆が皆、自分が負けたみたいと言っているのか？

私はもともと、兄以外の異性には興味も無いし、勝負をする気もないのに……。

そう、はなっから勝負をする気も無いのだ……。

なのに、なぜ？

あまりに不条理な立場に立たされてしまった美夏は、これらの思考が一気に脳裏を過ぎった瞬間。

バンッ！！――「落ち着いてって言ってるじゃない！！！！」

自身の机を両掌で思いつきり叩き、怒気の混じった口調で、騒ぐ皆を一瞬で黙らせた。

ちなみに、この間中ずっと男子達は、関わり合いになりたくない和无視を決め込んでいた者と。もしかしたら、うっかり美夏のスリ―サイズが聞けるかもしれないと、聞く耳を立てていた者の二種類に分けられていた。

また、聞く耳を立てていた者に至っては、美夏が机を思いつきり叩いた瞬間、ビクンと体を跳ねさせていた。

そんな外野の状況など知らない美夏は、先程悟った事を踏まえながらの反論を静かに開始する。

「皆が言いたい事は分かるには分かるけど、それは私にはどうしようもない事なの……聞かれても私は、これまで真剣に打ち込んだできた新体操以外、人と違った事をした事が無いから何も言えないし知らない」

シンと静まり返った教室内で、美夏の真剣な言葉が続けられる……内容は、この際どっかに置いておく事にする。

「それに、どうして皆、そんなに自分を下に見ているの？ 私から見れば、皆だって其々魅力的な部分があるし、十分に可愛いと思うよ？」

この美夏の真心からの言葉に、クラス中の男子達がウンウンと頷く……。

実際、確かにこの一年A組の女子レベルは高い。

それは美夏を筆頭に、藍や他の女子生徒達を見ても、誰しものが認める事であろう。

おそらく、あと一瞬間もすれば一学年中に広まり、様子を見に来る男子生徒たちも現れる筈だ。

そして何より、美夏の全く嫌味でない真摯な声音が、クラス中の生徒達に、それを認識させるだけの説得力を生んでいた。

美夏の表情に、少しの変化が現れた……。

これまで少しだけ怒っていた表情から、どこかいつも通りの柔らかい表情に変わっていたのだ。

多分、皆がようやく自分の話を聞いてくれて、安心して始めたのであろう。

だが、ここからが本題なのだ。

これを言ってしまったえば、まだ入学二日目であつたが、そろそろ鬱陶しくなってきた男子達の浮ついた誘いを遠ざける事が出来るかもしれない。

そして、彼女達の負け犬根性も、元に戻せるかもしれない。

そう考えた美夏は、表情を柔らかいものから真剣なものへと変え、口をゆっくりと開いた。

「大体、立場とか格差とか、屈しなきゃならないとか……皆、ちょっと勘違いしてるよ」

この意味深な言葉に、教室中の皆が頭に“？”を浮かべ始める。

だが、美夏は止めようとはしない。

これは、色々と面倒が起きる前に、皆に向けてハッキリとさせておかねばならない事だからだ。

ハッキリさせておけば、自身の知らないところで変な嫉妬だとかを買わずに済むし。なにより、美夏自身、ここでハッキリと宣言しておきたいのだ。

故に、彼女は微妙に本音を言ってしまったては拙いところはオブラートに包んで、その言葉を口にする。

私、この学園にちゃんと好きな人いるから。

だから、その人以外見る気は無いもの――

瞬間、教室中の男子が言い知れぬ危機感にざわめき立ち。女子達は得意というより大好物な恋話が突然舞い込んできた事に、さっきまでの血走った雰囲気など何処吹く風で、嬉々とした表情をしながら、ある意味爆弾発言をした美夏に先を促そうと言い寄ってきた。

『え！ え！？ ホントに？ 誰なの！？ 同級生？ それとも先輩で！？』

『どんな人？ ねえ、他には絶対に言わないから！』

『芸能人でいえば、誰に似た感じ？ それだけでも良いから教えてよ！ 自分でいったんならさ〜♪』

本当に、さっきまでの空気は何だったのか？

もはや、クラス中の恋に恋する“才能ある”乙女達の中に。同じく恋をしている美夏を敵視している者などいなかった。

その様子に目の前で当てられている美夏は、やっぱり女の子は恋愛をしなきゃダメな生き物なのだと、謎の考えに至っていた……が、話を続けなければ、また同じような轍を踏むそうだったので、さっきとは違った意味で迫り来る彼女達に、気持ちの面で向き直った。

「えっと……じゃあ、絶対に他のクラスとかに漏らさないって約束するなら、学年だけは教えるよ」

瞬間、周囲でこちらを囲んでいた女子達が。まるでバリケードの様に固まり始め、美夏の声に耳を傾けた……どうやら、開示される

情報が先輩か同級生だけでも、盛り上がれば良いといった感じのようだ。

その様子を確認した美夏は、座った体勢から身を屈めて、なるべく外に声が漏れないよう、ヒソヒソとした声音で口を開いた。

「学年は一つ上……『もう一声』……それで、クラスはABCの内のどれか『もう一声！ でないと、また騒ぐよ？』……じゃあ名前とか以外なら聞くけど？」

一年A組の女子達は、奇跡とも言えるチームワークで。これらの耳打ちにも似た小声でのやり取りを、皆に確りと共有させていた。

『じゃあ、どんな感じっていうか、どんな雰囲気の人かってだけでも教えてよ？』

「そうだね……背は私より少し高いぐらいだけど、かなり強そうな感じの人かな。だけど、それでいて優しそうな雰囲気がある人」

正直、これだけの情報で何が特定できると言うわけでもない。

だが、彼女達は皆一様に嬉しそうな表情で『頑張って』だとか『誰か分かったなら、応援するよ』だとか、暖かい声援を、好きな人がいると公言した美夏に送っていた。

この時、美夏は。

このクラスの女子達はもしかしたら、乗りだけで生きているのかもしれないと、本気で思ったとか。

しかし、そんなクラスの女子達が騒いでいる中。美夏の席の後ろに座っていた木下藍は、どこか考えに耽っているような表情をしていた。

（美夏より背が少し高く、かなり強そうな感じの人って……）

もしかして……と、考えが浮かびそうになるも、藍はそれを胸中で頭を振りながら否定する。

まさか、そんな事はあるわけが無い。

いくらなんでも、常識を一応は弁えている彼女が、そんな事を考えているわけが無い。

“どんなに仲が良さそうでも”、それだけは無い……。

これらの否定は、藍の思考の中だけで繰り返される、決して外には漏れないもの……。

故に、この時の藍は、なんの確証も得ぬまま、巡らせていた思考を一旦止めるのであった。



全学年の健康診断も、何事も無く無事に終わり。

現在は様々な生徒達が部活や委員会活動、または帰宅と……それぞれの放課後を過ごす時間帯となっていた。

所々から聞こえる、学園の時間から開放された生徒達の会話。

そのどれもが、どこか嬉しさを帯びたものであり。また部活動に向かう者達からも、嫌々といった声音ではあったが、本質はやっとな好きな事に取り組める時間が来たといった様な気持ちが伝わってくるものであった。

そんな中を、部活の仲間達には『呼び出しをくらったから少し遅れる』とだけ伝えていた、ラグビー部所属の桐嶋竜蔵が歩いていく歩き、到着した場所は本校舎の四階……その屋上へと出られる扉の前。

正確には、四階の階層から一つ上がった所にある、薄暗い空間。さっきまで聞こえていた生徒達の活気が、不思議と耳から遠のいていく。

だが竜蔵の表情には変化は見られない……ずっと、ここに来るまでと同じ、少々眉間に皺のよった機嫌が悪そうな仏頂面だ。

なぜかと言われれば、昨日の脅迫とも取れる文章が書かれた、一枚の紙切れが原因であろう。

内容は、来なければ昨日、竜蔵のプライベートで起こった事や、執行部の事をバラすといったもの。

正直、昨日の Pasta 専門店で出来事も誰にも知られたくは無いが、それより執行部の事を外部にバラすといった内容の方が、竜蔵

には少しだけ看過できないものであった。

二橋学園の執行部……まだ昨日までの竜蔵は、名目上“手伝い”といった立場に無理やり就かされていただけに過ぎないが、その存在がどれだけ重要なのか、一応は理解できている。

執行部の重要性。

それは、この学園都市という街には“警察が存在していない”という事に起因している……いや、正確には警察官・自衛官・消防隊員などを学生のうちから目指している者達が通う専門学校があり、それらが実習・研修科目として、街の至る所に設置された交番を使って、警察に似たような治安維持活動はしているのだが。

学園都市の執行部とは、これらの活動とは違ったものを重点的に担当しているのだ。

それは、この街に来る外部からの脅威への対応……もつとハッキリと言ってしまうえば、学園都市の創設者である二橋家に連なる名家に対して、様々な仕事を弄してくる相手に、学園内で対応・解決していく組織である。

この様々な仕事を弄される二橋家や、他の名家とは一体のどのようなものなのか？

それ自体は竜蔵は把握していない……が、何故か竜蔵の所属する日本最大の勢力と門下生を誇る空手団体“真道会館”しんどうかいかんの館長や。日本だけではなく世界からも注目されている格闘技団体『JUDGE』を取り仕切っている人物から、直接に『彼らの言うとおり、執行部の活動に参加しておけ』と指示を出されているのだ。

いくら竜蔵でも、自身が所属する団体のトップから指示を出されては断る事は出来ない……それに、これだけの……格闘技という限られた枠ではあるが……大きな勢力が、参加しておくと推してくるのだ。ただの金持ちな家柄という訳でもなさそうだと、竜蔵は考えている。

また、竜蔵がこれまで執行部の“手伝い”として割り当てられていた仕事も。仕事を弄してくる相手が、よく陽動として使う街でチ

ームを組んでいるチンピラなどが相手だったのだ。所詮は手先で捨て駒として利用されていた者達、情報を吐かせようにも、出来ない事を竜蔵は既に学んでいる。

これらの事を踏まえて言えば、竜蔵は実は執行部の事を良くは理解していない……が、その“手伝い”として使っている者にすら情報を与えてくれない事から、影に包まれた組織、悪く言えば碌な組織でない事は理解しているつもりだ。

後は、この執行部という胡散臭くて碌でも無さそうな組織では、“暴力”といった行為が“プロの格闘家”でもある竜蔵でも、何の問題も無く許されてしまうという危ない傾向もあると言う事だけだろうか。

故に、限られた知識ではあるが、竜蔵はこのようなきな臭いにも程がある組織の公表を良しとはしない。

もし公表されてしまったら、そこに所属させられた竜蔵自身、色々と立場的に拙いものがあるから、という理由もあるが――

そして現在。

竜蔵は、そんな学園でも全くといっていいほど知られていない組織の人間から、直接呼び出しを受けている。

今までは二橋学園の生徒会長である、二橋姫樹からの命令もといお願いで色々やり取りはしていたが。執行部のメンバーと直接顔を会わすのは今回が初めてのことだ。

また、昨日胸ポケットに入れられていた紙切れに書かれた、“忍者”という既に廃れてしまった名称が、竜蔵に更なる警戒……ではなく、懐疑心を与えていた。

だが、これから学園でもきな臭い組織の相手と対面するのだ、警戒はし過ぎても問題にはならないだろう。

そう考えた竜蔵は、慎重に……いや、普段通り何も考えずに、目の前の鉄製扉のドアノブを回した。

瞬間、開かれた扉の隙間から、屋上特有の強い風が入り込んでく

る。

無風の状態から、突然全身にちよつとした圧力を感じるほどの風を浴びた竜蔵であったが。少しでも目を細めるといふ行為以外、特に何もリアクションは取らなかった。

そして、竜蔵がいた薄暗い空間と屋上を仕切っていた鉄製扉が、完全に開かれる。

鉄製扉を開いた竜蔵の視界には、まだ昼が少し過ぎた辺りの日中の日差しが照りつけた、屋上の風景が広がっていた。

特に何の変哲もない、大型の給水タンクと空調装置であるコンプレッサー以外、何も置いていない、寂しくもどこか落ち着けそうな場所。それが、二橋学園の屋上だ。

周囲の囲いは背の高いフェンスで仕切られている……そして、そこに一人の女子生徒の姿があった。

女子生徒は、屋上へと出てきた竜蔵の正面に位置するフェンスの前で、こちらを向きながら静かに立っている。

屋上風に吹かれ、揺られる彼女の黒髪であったが。当の彼女自身が、それを気にした様子は見せず、ただ風に吹かれるままに長い三つ編みの黒髪を揺らしている。

特徴的な大きな丸眼鏡や、少し控えめな背丈に華奢な体つき……そこだけ見れば、ただの目立ちそうにない“普通っぽい”女子高生で済ませられるのだが。

どうやら、竜蔵の目には違った少々印象に映っている様であった。（良い立ち方だな……重心が確りと足の裏が安定した中心になっている）

もはや職業病に近い観察眼。

竜蔵は彼女の立ち姿を見た瞬間に、そんなところから見始めた……。すると、向こうもそんな竜蔵に気付いていた様で。

「こんにちわ。こうやって二人で話すのは、初めてですね」

風に揺られていた黒髪を押さえながら、眼鏡越しにこちらに視線を向けてくる三つ編み少女。

彼女は確か、以前入学式後に校門前で、生徒会長の姫樹の後ろに控えていた生徒会メンバーの一人だ。

名前は、木佐貫千代女といったか……竜蔵は彼女の容姿や声を確認すると、記憶の中から彼女について知っているだけの情報を引っ張り出していった。

「アンタが？」

記憶を引っ張り出した竜蔵の短い問い。

だが、どうやらこれだけで通じた様で。

「はい、昨日はお楽しみだったみたいです」

本来なら皮肉混じりの微笑みで、竜蔵をからかえる様な台詞なのだが。彼女の顔に、表情という表情はなく、全くの興味を感じさせない無表情であった。

「人のプライベートを覗いておいて、なんの悪びれも無しか……」

「ええ、私は良く趣味が悪いと言われるので」

「自分で言うかね、普通」

他愛の無い会話を続けながら、竜蔵は屋上の地面を歩き、彼女の前まで来た。

間合いにして、約4歩分の距離。

あと一歩進めば、まあギリギリ仕掛けられる程度の距離だが、竜蔵はそれ以上の歩を進めなかった。

それに、始めて彼女が感心したような表情をする。

「流石です、やはり気付きましたか」

抑揚の無い賞賛に、竜蔵は鬱陶しそうにしながら。

「よしてくれ。こんなので褒められても、何の自慢にもならないから」

「いえ、相手が隠している手を感じて察知し、それを警戒しながら、なるべく安全な間合いで進む足を止めておく……普通の人間では、こうはいきませんから」

「そうか？　こういう事は、結構その辺のチンピラでもたまに出来る事だぞ？」

「路上^{リアル}な実戦で得た感、ということですか。これは、私達武術に精通する人間とは違ったものですね。素直に興味深いです」

感心……しているのだろうか？

だが、彼女。

木佐貫千代女は、竜蔵と対面しながらも、制服であるブレザーの懷から、一本の“クナイ”を取り出すと。そのまま自身と竜蔵が立っている、ちょうど中間辺りに、それを放り投げた。

簡単に得物である——物珍し過ぎて、別の意味で驚いたが——
——“クナイ”を捨てた彼女を見て。

竜蔵はその行動から、おそらく自分は試されたのであろうと当たりを付けていた。

自身よりも遥かに弱そうな相手に、それをされたという苛立ちを覚えながら。

「すみません。やはりお気に触りましたか」

あまり気にしては無さそうな物言い……だが竜蔵は、苛立ちこそ覚えてはいたものの、これを無視する。

「俺も待たせてる身だから、単刀直入に聞くけど。何の用だ？　いや、そういうば先輩だったな。何の用ですか？」

「今更、私の事を先輩と見なくても良いのですよ？」

「分かった、なら早く教えろよ。こっちも忙しいんだ」

先の冷静な危機探知や状況判断能力を、自然と披露していた者とは思えない、どこか落ち着きの無い言動。

だが、相手方の木佐貫も、竜蔵がそういった男である事は理解しているようで。

「そうですね、こういった事は、やはり早めに済ませた方が良いでしょうし」

「……」

もはや聞きの体勢に入ってしまった竜蔵に、少しだけ微笑みなが

ら、木佐貫は本題に入った。

「アナタの言うとおり、単刀直入に申します……まあ、もともとはアナタの正式な執行部入部に、歓迎を込めた挨拶をするという事が用事でもあったのですが」

「……」

「今のアナタの感覚や立ち居振る舞いを見て、事情が変わりました」相手の言葉を聴いてはいるが、どこか不機嫌な表情の竜蔵に対して、木佐貫千代女は一拍の間を置いた後に……。

私と子作りをしませんか？——「ブーッ!？」

そんな、うら若き、花も恥らう女子高生が直接口にするとは俄かに信じ難い爆弾発言を、目の前の竜蔵にしたのだった……。

同時に、この場にはいない竜蔵の妹が、一瞬だけ言い知れぬ悪寒を感じていたのは、言うまでも無い。

経験の差

私と子作りをしませんか？——「ブーッ!？」

あまりに率直、あまりに突拍子も無くストレートな表現で発せられた言葉に。

屋上風が微妙に鬱陶しい、この場で竜蔵は思わず吹き出してしまう……。

結構、先程まで彼なりに真面目に凄む、というより威圧しながら急かしていただけに、これは少し情けない反応になってしまった。が、いきなり何の脈絡も無く、こんな事を言われてしまえば、誰だって吹き出すというもの。

「な、何言い出すんだよ！ お前!!！」

狼狽する自身を隠す事も無く、とんでもない爆弾発言をした相手——木佐貫千代女きさぬちよめに声を張り上げる竜蔵。

しかし、当の本人は全く気にした様子も見せずに。

「だから、私と子作りを……」

「分かってるよ！ 俺が聞きたいのは、どうしてさっきまでの流れで、そこに行き着くのかだ!？」

頭のネジが、一本どころか全て吹き飛んでいるのではないかと口にしそうになるも、それは流石に自重した。

「流れも何も、あれを含めたのが、今回の私の目的です」

「えー……」

しれっと言う木佐貫、もはや反応するのも馬鹿らしくなった竜蔵。だが、彼女はそんな竜蔵など放っておいて、話を進めてしまう。

「執行部への正式入部など、もともと会長が計画していた事ですから。私にとってはあまり関係の無いものなのです」

初耳だが、なんとなくそれは理解していた……。

もともと、竜蔵が執行部の手伝いをやらされていた理由は、彼自身が起こした問題による罰だったのだが。最初に『お咎め無しの代わり』として強制させられた時から、薄々こうなるのではないかと感じていたのだ。

故に、ここには驚きはしなかったが。

「私に関係……というより私の家、木佐貫家に大きく関わる事が。今しがた私がアナタに尋ねた、“子作り”という訳なのですが……ついて来れていますか？」

「いや、全然……てか、ついて行く気も無い」

「そうですか」

もう何かなんやら分からなくなったと、考える事、話を聴く事すらも放棄し始めた竜蔵に。

木佐貫は、どこか寂しそうな声音で相槌を打つ。

だが、どうやら彼女には引けない理由があるようで。

「でしたら、アナタはそのままいてください」

「？」

言いながら、木佐貫は竜蔵の傍まで歩み寄っていく。

目の前で足を止めた木佐貫は、竜蔵の身長よりも10?以上小さくて華奢な体型だった。

しかし、優美な曲線を描く背筋や、竜蔵が第一印象で感じた、軸の確りした立ち方が、彼女の存在感を外見以上に高めている。

心なしか、彼女の方から竜蔵の鼻孔に甘い香りが、風に乗って流れてきていた。

どうやら、丸眼鏡に三つ編みといった地味な外見の割りに、女性らしい所には氣遣っているようであった。

すると、目の前でこちらに視線を合わせていた木佐貫が、おもむろに膝を折り、身を屈める……。

それも、“竜蔵の社会の窓を開けながら”――――

「おい」

「こう見えても、私は“床上手”で有名なのです。必ずやアナタを

満足させた上で、目的を果たさせてもらいますので、暫くの間、大人しく……」

何やら開けた社会の窓に、木佐貫が手を突っ込もうとしたところで、竜蔵が彼女の頭を上から掴んで引き離す。

あ……と残念そうにポツリと漏らしながら、頭を竜蔵に掴まれた木佐貫。

それを、無表情のまま見下ろす竜蔵。

「どうかしましたか？　もしや、こういった事には興味が無いと？」

「興味が有る無いの前に、ありえないだろ？　なあ？　いきなり屋上で人の社会の窓開くとか」

「いえ、私独自の調べでは。こういった誰もいない屋上で、男女が二人になった場合は。大抵が“合体”するという記録が……」

「どこでどう調べれば、そんな所に行きつくんだ？　ド田舎の Yankee でも無しに、普通はそうはいかないぞ？　てか、なんだ？　お前にとって、屋上ってのはラブホテルと一緒にみたいなものなのか？」

「おやおや、社会の窓は開けても、どうやら心の窓は……」

「上手くもねえし、勝手に開いたのはそっちだろ」

怒鳴りたい気持ちを抑えながら、先程から謎の行動しかしてこない木佐貫の頭を、竜蔵は放した。

すると、膝を曲げ屈んでいた状態から、ペタンと後ろに尻餅を付いてしまう木佐貫。

同時に、何かのチャンスだと感じたのか？

わざとらしく脚を崩し、上から見下ろしてくる竜蔵に履いているスカートの中身を見せ付ける。

しかし、竜蔵はそれを冷めた目で見下ろす。

「これも効果が無いと……ふむ。ここまで私の“セックスアピール”が通じないとなると。もしやアナタは……」

「そこまであざといパンチラじゃあ、誰だって冷めた目で見るわ。大体、さっきからなんなんだ？　お前、本当に大丈夫か？」

側頭部を右の人差し指でトントンと叩くジェスチャーで、相手の

正気を疑う竜蔵。

しかし、木佐貫にはどこも堪えたところが無く。

「同性愛者という可能性を否定したとなると……もしや！ 私自身に、桐嶋さんを欲情させる魅力が足りないと！？」

世紀の大発見でもしたかのように、一人で盛り上がり始める彼女に、竜蔵は逆に冷静な表情で、うんざりとする。

一体、目の前の執行部を名乗る女は、何がしたいのか？

まさか、本当にナニがしたいだけなのか？

なら、据え膳食わぬは男の恥として、今から頂いても良いかもしれない。

だが生憎と、竜蔵はそういった軽率な行動を取る人間ではないのだ。

「なあ？ いい加減、ふざけるのは止めてくれないか？ こっちだって、部活の連中に遅れるって断ってまで来てるんだぞ？ 本題に早く入ってくれ、頼むから」

心の底から早くしてくれと……まるで懇願するかのように、頭をボリボリと掻きながら言うが。

どうやら、この懇願は相手にとっては別に意味を成さなかった様で。

「いえ、ですから、私の目的は執行部としての挨拶や歓迎などではなく。アナタとの子作りですと、先程に言っただけですが？」

「それが意味分からねえって言ってんだろ！？ ちゃんと伝わってるのか俺の話は？」

しれっと当然の如く言う彼女に、竜蔵は遂に怒鳴り声を上げてしまう。

普通の女性ならば、竜蔵の様な風貌の男に怒鳴られれば、身動きの一つでもする筈なのだが……そういった可愛らしい動きは一切見られない。

むしろ、冷静な眼差しで、こちらを見上げているだけだ。

その様子に、竜蔵はまともに取り合うのも馬鹿馬鹿しく思ったの

か。

制服の胸ポケットから、昨日渡された一枚の紙を取り出す。

「はあ……とりあえず、ここに書かれた通り、俺はちゃんと屋上に来たんだ。約束は守ってくれるんだな？」

取り出した紙を広げながら、地面に座っている相手に書かれている文章を見せる竜蔵。

「ええ、それはもちろん。というより、もともと執行部の情報を表沙汰にするつもりはありません。してしまったのなら、私が二橋家の方々に消されてしまいますからね……おっと、今のは他の人に漏らさないでくださいね？」

わざとらしい……いや、絶対にわざとだと分かる彼女の仕草に、竜蔵は再びゲンナリとする。

知っていてもしょうがない事だが、知ってしまったては拙い感じの情報……。

二橋家ということは、あの生徒会長、二橋姫樹の実家の事であろう。

だが、ここでその様なことを追求しても、仕方の無い事は理解している。

そう考えた竜蔵は、相手に見せていた紙を、その辺に捨てると。もう用はないと言外に語りながら、彼女に背を向けた。

「だったら、俺は部活に戻るぞ？ アンタの目的とやらは、俺を当たってくれ。俺はパスだよ」

相手に背を向けながら、右手をフラフラと上げて揺らす。

そしてそのまま、竜蔵は屋上から出るために、歩を進め始めた……が。

そう急がないで下さい、まだアナタにはいてもらわないと困ります——「ッ!？」

突然、自身が振り返ったことで、後ろにいた筈の木佐貫千代女がいつ移動したのか？　いつ、こちらに振り返っていたのか？　それすらも、分からないぐらいの動きで、竜蔵の目の前に立ち塞がっていた。

彼女の佇まいに、一切の乱れは感じられない。

という事は、今の現象は彼女にとって、ごく当たり前の事だったのか？

様々な推測が頭の中で駆け巡るが、それよりも早く、竜蔵は彼女との間合いを本能としか表せられない反応速度で取っていた。

距離にして、さっきよりかは近い3歩半。

その気になれば、中段蹴り（ミドルキック）を、ステップ込みで蹴り込める距離だ。

だが、まだ竜蔵は相手に危害を加えようとも、そのために構えを取ろうともしていない。

ただの自然体で、また木佐貫と向きあっていた。

「良い反応ですが、とりあえず、まだ私の話し……もとい、こちらの用件は終わってはいません」

「……」

先程と変わらぬ、冷静な声音に竜蔵は沈黙で帰す。

どうやら自然体ではあるが、完全に警戒し始めてしまったようであった。

お前は自然界に住む動物か、というツツコミが、木佐貫と喉下まで這い上がってきていたが、彼女はそんなキャラではないため、あえなく消沈していた。

「まあ、用件とは言っても、先程の様な性交渉をするつもりはありませんので……（いずれは、必ず“して”もらいますが）」

最後のほうは聞き取れなかったが、どうやらもう、子作りだとかふざけた事は抜かさないらしい。

それを信じた竜蔵であったが、まだ警戒心を解こうとはしない。まず、プロでもある自身の前に、全く持って確認できないほどの

入りで現れたのだ。

警戒をするなという方が無理な話した。

だが、そんな竜蔵などは他所に、木佐貫は徐に屋上の出入り口の方へと視線を向けた。

「そろそろ出てきたらどうですか！ さっきから恥ずかしがって出て来れないのは丸分かりですよ！」

どこかやる気を感じられない、間延びした呼びかけをする木佐貫。おそらく、この出入り口である鉄扉の向こう側にも聞こえるように、彼女なりに声を張っているのだろうが……いかんせん、やはりどこか覇気に欠けるところがある。

しかし、どうやら鉄扉の向こうには声が届いていたようで。

ギィ……。

屋上風を押しのかけて、屋上の出入り口である鉄扉が開かれる。

しかし、開かれた部分は僅かな隙間だけ。

まだ、扉を開けた人物は確認できない。

「そんなに心配しなくても、別に“行為に及んでいる訳ではないですし”。彼との交渉も決裂してしまったので、早く出てきてください」

まるで相手を諭すように、扉の向こう側へと声を掛け続ける木佐貫。

すると、彼女の説得が功を奏したのか、重い鉄扉がゆっくりと開かれた。

「お前は……」

重い鉄扉を開いて出てきた人物に、竜蔵は思わず声を漏らしてしまふ……。

「これから桐嶋さんには、彼女と闘って頂きます。いわゆる、実技試験の様な感じですね。私達、執行部からの腕試しという訳です」

竜蔵と扉から出てきた人物の視線の邪魔にならないように、横に

身を引きながら、木佐貫が説明をする。

竜蔵の視線の先……そこには、開いたドアノブを放したばかりの、木刀を持った一人の女子生徒が立っていた。

昼過ぎの日差しを煌びやかに反射する、黒曜石を思わせる長く真っ直ぐな黒髪に。研ぎ澄まされた刃物の印象を持つ、切れ長な目……細く整った輪郭や、透き通るような白い肌。

また、体型も華奢に見えるが、なかなか凹凸の有る、スレンダーかつ女性的な膨らみも確りと持った、モデルの様な体型なのだが。それよりも、竜蔵には彼女の出で立ち、とりわけ木佐貫と同じように安定した背筋や重心に目を奪われていた。

正直、かなりの美人……竜蔵は彼女を見た瞬間、胸中でそう呟かざる負えなかった。

しかし、竜蔵は彼女の事を別に知らなかったわけではない。

「冴島刀子か……まさか、二年で一番有名な女子が、執行部に関わってたなんてな。意外通り越して、ビックリだわ」

竜蔵に名を呼ばれた女子生徒、冴島刀子は。

そんな意外そうな声音で、こちらを見ている竜蔵に、同じく視線を向けながら。

屋上のコンクリートの地面を、一步一步、静かに、されど優雅に歩んでいく。

その間も、一切の軸のブレを感じさせない……明らかに、意識をした歩き方をしていると、竜蔵は当たりを付けていた。

「まあ彼女は私と同じく、二橋家に仕える分家の一つで、冴島家の長女ですから。当たり前と言えば当たり前なんですけどね。知らなかったのなら仕方ないですが」

冴島と木佐貫を挟んで向き合う中。竜蔵はずっと、彼女の目に視線を向け続けていた。

（こう見ると、抜き身の刀みてえな女だな……）

冴島刀子という女性に対して、竜蔵が浮かべた第一印象がこれだ。事実、彼女が醸し出す、独特な張り詰めた雰囲気は、どこか日本

刀の様な魅惑的な印象がある。

そう考えると、竜蔵が思い浮かべた第一印象は、間違いではないのかもしれない。

だが、竜蔵が彼女の目を見続けていると。突然、彼女が顔を赤らめながら、恥ずかしそうに視線を外し始めた。

「うん？　どうかしたのですか？」

それに、不思議そうに反応する木佐貫。

竜蔵もまた、（なんだ？）と疑問に思っていたのだが……。

「いえ、その……なんと言いますか」

言いながら、ゆっくりと原因であるものに指を示す冴島。

二人は、その今にも爆発してしまいそうな程に恥ずかしがっている彼女が指し示した場所に、目を向ける。

そこは、竜蔵の下半身……とりわけ、先程から開きっぱなしであった社会の窓であった。

「あ、すみません。閉めるのを忘れていました」

開けっ放しの社会の窓を確認した木佐貫は、まるで何事も無かったかのように竜蔵のズボンのファスナーを上げる。

まるで少しだけ閉め忘れていた窓を、自分が一番最初に気付いたから閉めますといった動きであった。

「おい」

「はい、なんででしょうか？」

冴島に指摘された部分を直し、再び横に身を引こうとしていた彼女に。竜蔵があまり抑揚の無い低い声音で、彼女を呼び止めた。

心なしか、眉間にかんりの皺が寄っている。

「さっきから、なんで俺の股間を、そうやって平気で触れるわけ？」

「おや？　おかしいですね……男性の方は、よっぽどの容姿をしていない限り、異性に股間を弄られて嫌な思いはしないと認識していたのですが」

「……」

おかしいのはアンタだと、思いつきりツツコミを入れたところ

であったが。不思議と、竜蔵は彼女に冷めた視線しか送れなかった……相当、彼女の奇行に参っているのであろう。

すると、これまで黙っていた冴島が、ようやく真っ赤だった顔を治して口を開いた。

「そ、それで千代女さん。用件の方は、本当にもう良いのですね？」
木佐貫の用件……端的に言えば、竜蔵との子作りを、この場で始めようとした、あの奇行。

どうやら冴島は、事前にその事を知らされていなかったのか。消え入りそうな声で、しれっとした表情の木佐貫に尋ねた。

「ええ、どうやら桐嶋さんは、私では不服の様子でしたので“今日のところ”は引き下がる事にします」

「貴様！ 千代女さんの、どこが不服だと言うのだ！」
「えー」

木佐貫の答えを聞いた瞬間、冴島の表情が一気に強張り、竜蔵に木刀の切っ先を向け始めた。

もしかしたら、ただの悪乗りなのではないかと疑うほどの変わり身の早さに、竜蔵は今回何度目か分からない、うんざりとした表情と声を漏らす。

「落ち着いてください、刀子さん。私は別に気にしていませんから」
まあまあと、相手を宥めようとする木佐貫。

その表情は、どこか楽しげに見えた……絶対に、冴島刀子という人物の反応を予測しての発言だったと、この木佐貫の対応を通して、竜蔵は当たりを付けていた。

だがまあ、そろそろ話を付けなくては、竜蔵も部活に行けなくなってくる可能性が有る。

故に竜蔵は、この流れる空気を無視して、話をさっさと進める事にした。

「あ……何でも良いけど、冴島さん？ 俺と“やりたい”の？
だったら、早くしてくれ。俺にも部活があるんだ」

やりたいのかと聞いてはいるが、既に構え……というより、冴島

に向けている視線に、明確な圧力が籠プレッシャーっている竜蔵。

それに気付いたのか、冴島の方も、持っていた木刀を、両手で持ち、右足を前にした正眼の構えを取った。

二人の雰囲気の変化を感じ取った木佐貫が。彼らが形成し始めた間合いから、静かに外れていく。

さっきまでの空気が嘘の様に、屋上に吹く風だけが、この場の音を支配していた。

切っ先を竜蔵の喉下に向けた、正眼の構えを取っている冴島に対して。

竜蔵は、今にもポケットに手でも突っ込んでしまいかねない、自然体で相対している……ただし、体に通った軸や、相手の眉間を射抜くような視線が、ただの自然体でない事を物語っている。

すると、冴島が、この硬直状態を和らげるかのように、正眼の切っ先を、ゆらりと地面に斜めで向け始めた。

下段……いや、そこから更に木刀が流れるように移動し。前足だった右が下がり、今度は左足を前に置いた、木刀を立てるように横で構えた、“八相”を取り始める。

真っ直ぐに伸ばされた背筋に、スカートのお陰で露出している、スラリとした長い脚が、異性である竜蔵の目を奪わせる……が、それと同時に、沈み過ぎず、浮き過ぎずの重心と、油断の無い研ぎ澄まされた緊張感が、彼女をただの女だと思わせない警戒心を抱かせていた。

間合いは半歩分開いたが、辺りの空気を張り詰めさせる緊迫感は、更に上がった様な気がする。

だが、それでも構えという構えを取ろうとしない竜蔵に、ようやく冴島が口を開いた。

「どうした？ 早くやろうと言ったのは、君の方からだろう」

静かに、凜とした姿勢で“八相”の構えを取る冴島から発せられた、挑発とも取れる言葉に竜蔵は。

「……ふん」

一度、軽く鼻で溜息を付いた後……。

「？」

突然、保っていた緊張感を、自ら解き、軸や重心も意識していた自然体すらも、同時に解いてしまった。

これに、訝しげな視線を向ける冴島……。

そして更に、竜蔵の不可解な行動が続く。

（おや？）

「……何の真似かな？」

なんと、竜蔵が冴島と形成していた間合いから、何の躊躇も無く出て。後ろのフェンスのところまで、勝手に歩いて行ってしまった。フェンスの前に来ると、竜蔵は上着のブレザーを脱ぎながら、再び冴島の方に振り返った。

竜蔵の視線の先で冴島は、先程まで取っていた構えを、一度解いていた。

その様子を見て、ようやく竜蔵が口を開く。

「ほら、こっちまで来いよ。ここなら、俺はバックステップも取らないし、馬鹿みたいに逃げ出す事も無いぞ？」

屋上のグリーンのフェンスを背にしながら、竜蔵は冴島に向けて、挑発とも取れる言葉を投げかける。

瞬間、冴島の眉間が歪むが、すぐにその怒気は抑え込められた。

「……ふん、なら、君の希望通りにしてあげよう」

一拍の間を置いた後、冴島は竜蔵の言葉通りに歩を進め始めた。

油断無く、いつでも反応出来るように脱力された、武術的な歩行は、まさに歩く刃物と行っても過言ではなかったが……この場に、その程度の事で驚く者など一人も存在しなかった。

出来て当たり前……警戒して当たり前。

この三人だけの光景を見ると、おのずとそのような考えを感じ取れる。

それ程に、実戦というやり直しが効かない舞台を、この場にいる者達は理解しているのであろう。

そして再び、冴島が左足と左肩を前に出した真半身の構え“八相”を、竜蔵との間合い三步半付近で取り始めた。

今度は、竜蔵の言葉どおり。彼の後ろには、屋上からの落下を防ぐための、背の高いグリーンのフェンスが威を構えていて。冴島の木刀からの逃げ道を限定させていた。

外見は、完全に竜蔵の不利……だが、それでも竜蔵は構えという構えを取ろうとはしない。

何か特別な事をしていると言えば、左手に持っている脱ぎたてのブレザーを、いまだに持っている事だけだろうか。

冴島が、ジリ……と、ミリ単位で間合いを詰め始めた。

しかし、それでも自然体で立っている竜蔵に動きは見られない。ただただ、こちらに迫ってくる相手と、視線を合わせ続けているだけだ。

また、ジリ……と、冴島が屋上の地面を摺り足で削る。

彼女が竜蔵との間合いを詰める度に、その時が来る感覚が、どんどんと強まっていく。

あと、確実に相手に打ち込める距離まで、半歩ぐらいか。

次第に、冴島の左頬を、一筋の汗が流れ始める。

間合いを詰めている、圧力を積極的にかけているのは、彼女の筈だ。

だが、対する竜蔵には、何の変化も見られない。むしろ、涼しい顔で、相手が来るのを待っている様に見える。

一体、目の前の男は何を考えているのか……？

次第に、冴島の頭を、この思考が支配し始めてきた。

予想するに、おそらく左手に持っている、脱いだブレザーを、こちらの注意を引き付ける為に投げてくるのであろう。

そして、自身がそれに気を取られ、動きを止めている間に仕掛けてくる。

随分と古典的な手を……そう胸中で冷笑混じりに呟いた冴島は、再び間合いをギリギリと詰め始める。

確かに、木刀だろうが一刀で仕留めてみせる……。

それが、我が剣術なのだから。

絶対の自信を胸に持ちながら、遂に冴島の詰めが止まった。

気付けば、竜蔵との間合いは既に二歩半。

やろうと思えば、素手の竜蔵でも仕掛けられる距離だ。

そんな攻撃が飛び交っていても不思議ではない間合いで、二人は再び静止する……。

既に、緊張感なるものは限界にまで高まっていた。

冴島が持つ木刀に、彼女の意味が通い始める。

今、竜蔵の目には、彼女が木刀を“体の一部”として認識したのが、感覚として捉えられた。

道具に使われるのではなく、使うのでもなく。

道具という概念すらも否定し、それを自身の腕の延長線上と認識する考え方。

似ていると、竜蔵は素直に思った……が、その瞬間であった。

「ふッ！」

突然、冴島が、これまでの沈黙や緊張感すらも切り裂く様に、竜蔵へと間合いを一気に詰め始めた。

奥足を蹴り出し、前足でその全身の勢いを受け止めた動作……。

次に来るのは————そこで、遂に竜蔵も動いた。

竜蔵は間合いを一気に詰めた冴島に、持っていたブレザーを投げつける。

冴島の視界が、竜蔵の肩幅のために特注されたブレザーに占領される……が、それもほんの一瞬の事で。

(やはり！)

予めブレザーを視界塞ぎのために使ってくるであろうと予測していた冴島は。意識を空中で広がっているブレザーに向けるのではなく。

ブレザーに便乗して突っ込んでくるであろう竜蔵の側面を取ろうと、そのままの構えで体を右にずらした。

既に木刀も、“八相”の構えの状態で、腰だめに寝かせてある。後は、脱力された全身の力を使って、軸をぶらさずに木刀を逆袈裟斬りで振り抜くだけだ。

しかし、冴島の予想は完全に裏切られた。

「なッ!？」

投げられたブレザーが通り過ぎ、竜蔵への視線を再び向けると。

そこには、こちらがブレザーから見て、左に動くであろうことを予測していた竜蔵が。“元の位置”から動いていないまま立っている姿があった……それも、これから前蹴りを蹴り出す為に、左足の腿を上げている状態で――――

この事実で急いで反応した冴島が、腰だめに寝かせていた木刀を、右から斜め上へ振り抜こうと、腰よりも腹を意識した回転で動かそうとする……が。

「シッ!」

「ッ!？」

短い息の吐き出しと共に蹴り出された、竜蔵の左前蹴りが。冴島が両手で持っていた木刀の柄頭に直撃する。

背中を反り、腹と股関節を前に出した、体重の乗った前蹴りの爪先が襲った事により。冴島が握っていた、振り抜く寸前だった木刀が、思わずすっぽ抜けてしまう……。

また、既に木刀を振り抜こうと冴島は動いていたために。突然前に蹴り出された、竜蔵の左足の靴底に、木刀がすっぽ抜けてしまっていたために、何も持っていない両手を激突させてしまう。

しかし、この次の行動は、冴島の方が早かった。

（得物が無いのならッ!！）

木刀を飛ばされた事など、一切気にしないかのように再び地面を

蹴り出し。前蹴りを蹴った左足を引いている最中の、竜蔵の懐へと彼女は突貫した。

しかし、後手に回ったとしても、この土俵は、完全に竜蔵のものであった。

相手の飛び出しを確認すると同時に、竜蔵は左足を一瞬の動作で、体勢が前屈みになるくらいに“必要以上に引いた”。

「ッ!？」

突然、冴島の視界から竜蔵が下へと消えた。

だが、気付いたときにはもう遅い——

ドンッ!——「ふぐッ!？」

竜蔵が飛び出してくる彼女を迎え撃つために、前に出していた右肩が。

ピンポイントで相手の腹部を捉えた……。

刹那に冴島の口から、一気に空気が吐き出される。

それを見越していたかのように、冴島の腹部に右肩をめり込ませた竜蔵が、地面を脚で“掻き始める”。

タックル——それも、出てきた相手を迎撃するための、総合やラグビーでは当たり前の技術。

竜蔵の太く鍛え上げられた両腕と、丸みを帯びるくらいに頑強な右肩に抱え上げられた冴島の体は。彼女の腹部を基点として、“くの字”に折れ曲がっていた。

既に、もとの飛び出した地点から、カチ上げられるようなタックルで完全に後ろへと押し込まれている。

脚も、地面には着いていない……これでは、抵抗も何も出来ない。出来るとすれば、竜蔵の背中のワイシャツを、必死に掴み続ける事だけか……。

この後の展開は、なんとなく一瞬のうちに理解できた。おそらく、このまま自分は、地面に背中や後頭部を叩き付けられ

るであろう。

視界が、信じられないぐらいのスピードで流れる。

（落とされるッ！！）

直後に訪れる、未体験の衝撃に覚悟を決めた冴島であったが……。ピタッと、その落下の勢いは止まってしまった。

「……え？」

あまりに突然訪れた、助かったという気持ちに、彼女の思考は一瞬停止する。

竜蔵の背中のワイシャツを掴みながら、抱きかかえられた状態で、何が起こったのか、理解出来ないといった表情をしている冴島。

しかし、そんな彼女を無視するかのよう。竜蔵が抱きかかえていた彼女を、ゆっくりと地面に下ろした。

浮いていた足元が、屋上のコンクリートに確りと下ろされる。

同時に、冴島は竜蔵の背中から手を放した。

彼女の腰に回していた腕を、何の躊躇いもなく開放する竜蔵は。そのまま状況が飲み込めていない彼女と、再び視線を合わせた。だが、その視線はさっきまでの圧力を感じさせるものではない。むしろ心配そうに、すまなかったと言外に語っているような目であった。

「すまない、やり過ぎた」

言外だけではなく、口にも出して、タックルから開放した相手を見る彼の目には、なんの嫌味も感じられない。

しかし、まだ状況を飲み込めていない冴島は、その言葉に反応できないでいた。

すると、彼女の後ろから、今回の闘いの立会人代わりであった、木佐貫が口を開いた。

「刀子さん、どうやらアナタの負けみたいです」

木佐貫の率直な……容赦の無い宣言に、ようやく意識を思考の世

界から戻したのか。

震えるような声音で、冴島が声を発し始めた。

「私が……負けた？」

「ええ、それは綺麗な負けっぷりでしたよ？ 怪我らしい怪我也特に無いという、本当に見事な負け方でした」

冷静に勝敗を決める木佐貫に、冴島がもともと鋭かった切れ長の目を強張らせながら振り返る。

「そんな！ 私は認めません！！ だって、私はまだ立っていますし、意識も確りとしているですよ！！？ これは真剣勝負じゃ……」

「真剣勝負なら、アナタは既に、この世にはいないのではないですか？」

「ッ！？」

彼女の言葉を遮るように、木佐貫が抑揚の無い声音で話を続ける……。

「真剣勝負だと、もともと彼が認識していたのなら。アナタは今のタックルで、このコンクリートの地面に叩きつけられ、意識を失っていたのでは？」

屋上の地面を、足裏で叩きながら、木佐貫は厳しい視線を冴島に眼鏡越しで向ける。

「意識を一瞬でも失った……そんな事が、真剣勝負の世界で起こったのなら、アナタは何回死んでいると思うのですか？ それにもし、叩きつけられたとしても、アナタが舌を噛み、意識を保っていたとしましょう。その先、何が起こるのか？ 彼が、どんな行動に出るのか……想像するのも馬鹿らしいと感じないのですか？」

説教……というより、負けを認めない彼女を咎める様な、木佐貫の言動。

そして冴島は、その頭に血が上った自身でも理解できてしまうほどの、もっともな言葉に。ただただ無言で悔しそうに、拳を握り締めるしかなかった。

ギリギリと、彼女の奥歯を噛み締める音や、拳を握り締める音が、

竜蔵にも聞こえてくる気がした。

故に竜蔵が、そこまで言う事じゃないのではと、口を挟もうとする。

「桐嶋さん、アナタは黙っていてください。これは、私と未熟な彼女の問題です」

「いや、俺はまだ喋って無い『黙っていてください』ぞ?」

有無を言わさぬ木佐貫の声音。

それに思わず、当事者であった筈の竜蔵が口ごもってしまう……。黙った竜蔵を確認すると、木佐貫は更に冴島に強い視線を送った。「大体、もしこの場がアナタと彼の二人だけの空間だったら。タツクルで地面に組み伏せられたアナタは、彼に何をされるのか分かっているのですか?」

「……?」

突然、例え話をし始めた木佐貫に、冴島が恐る恐るといった感じで首を傾げる。

どうでも良いが、背の高い彼女が悔しそうにしながら、背の低い先輩に咎められている光景が。どうにも竜蔵の視点からしたら、緊張感の欠けるものであった。

「周りには誰もいない、助けを呼ぼうにも、アナタの武術家としての“無駄なプライド”が、それを許さない……。なら、考えられる結末は一つだけです」

刀子さんの肢体に興奮した彼が、アナタを欲望のままに犯しつくすでしょう――

「ちよおおおっと待とうかあ!!　なあ!?!」

もはやツツコミどころしかない……。いや、ツツコミざる負えない状況に、竜蔵が後ろから木佐貫の肩をガシリと掴んだ。

ちなみに、冴島は突然の彼女の発言に、顔を真っ赤にさせ、竜蔵の事を変質者でも見る目で睨みつけていた。

「なんですか？　まだ、私と彼女の話しは……」

「話しものなにも、かなり可笑しい方向に飛んでたな！　ええッ！？」
肩を掴んだ彼女を振り向かせずに、背中に向けて凄む竜蔵。

だが、どんなに竜蔵が掴んでいる肩に圧力をかけたとしても、彼女の表情には変化が見られない。

これは、握力を思いっきり入れるべきかとも考えたが、相手が一応は女性ということで、竜蔵はそれを自重した。

「俺はどんな状況だろうが、さっきと同じ行動で事を穏便に済ませるつもりだったんだぞ？　それがどうして、ソイツに危害を加えるとかいう話になるんだ？　確かに、思った以上に強そうだったから、ちょっとやり過ぎちゃったけどさ？　流石に、そんな事は絶対にしないと思うぞ？」

強い口調で、完全にさっき木佐貫が言った事を否定する竜蔵。

しかし、当の木佐貫は、これまで通りのしれっとした態度で。

「なら、あの刀子さんの見事な体を、ジックリ見てみてください」
「は？」

あまりに堂々とした感じだったので、竜蔵は木佐貫の言葉どおり、目の前で顔を真っ赤にさせている冴島の体に視線を向けてしまった……。

スラリと優美な曲線を描いた美脚に、キュッと締まった、柳腰と称しても過言ではない、くびれのある腰つき。そして、それに逆らうかのように、存在を強調させている、制服越しからでも分かるほどの、張りの有る形のいい胸……極め付けに、彼女の白い肌と柔らかそうな唇が、異性である竜蔵の劣情をそそらせていた。

思わずマジマジと見てしまう、彼女の完璧な肢体に、竜蔵は意識すらも釘付けにされてしまう。

対峙している最中は、全く気にもしなかったが。こうして見ると、やはり校内でも才色兼備と有名になるのも頷けるし、タツクルした際に密着した、意外に柔らかかった感触が甦ってくる。

すると、その竜蔵の視線に気付いたのか。

冴島は、まるで身を守るかのように、両手で胸を隠しながら、竜蔵と木佐貫からバババツと距離を取った。

「な、何を破廉恥な目で、私を見ているのだ!？」

「……はッ!？」

実は結構鈍感な部類に入る彼女にすら、いやらしい目で見ていると看破されてしまった竜蔵は。

何かからの支配から覚醒したかの様な表情で、意識を取り戻した。その光景を、客観的な立場から見ていた木佐貫は。意地悪な微笑みを浮かべながら、後ろにいる竜蔵に、首だけ回して振り向いた。

「でしょ？」

たった一言の、簡単な言葉。

だが今の竜蔵には、たったそれだけで彼女が何を言いたいのかを理解できてしまっていた。

「……いや、まあ確かに、魅力的な体だと認めるが。俺は絶対に、そんな事はしない」

「おやおや、さっきよりも、声に自信が感じられませんね」

「そ、そんな事はないぞ!？」 俺は、絶対にソイツを襲いなんかしない!！」

「本当に言い切れるのですか？ 地面に力ずくで組み伏せた彼女のブレザーやワイシャツを、力任せに破き。下着を剥ぎ、スカートも剥ぎ。そして本能のままに、彼女の体を貪るため、唇も奪う……更に」

「ち、千代女さん!？」

迫真の語り口調に、思わず竜蔵ではなく、本人である冴島が。

これまた例外なく、耳まで真っ赤にさせた状態で、割って入ってきた。

「おや？ どうしたのですか刀子さん？ 私はまだ、彼から事の真意を……」

「聞かなくて良いです!! 本当に、やめてください! お願いします!！」

もはや涙目になりながら千代女に、これ以上の暴走は止めてくれと懇願し始めた冴島。

当たり前だ……目の前で、自分が暴行を受けているという設定の話しを、大真面目で異性にされているのだから。

普通の感性を持った女性ならば、冴島のように止めてくれと懇願せざる負えない。

そんな彼女の反応に、なぜか千代女は残念そうにしながら。

「……そうですか、幼少の頃より知っている刀子さんが、そこまで言うのです。まだアナタにも、言う事は色々ありますが、今回のところは、これで済ますとしましょう」

助かったのか？ それとも、良いように遊ばれてしまったのか？ 判断の付かない冴島であったが、とりあえずはホッと一息を付くのであった。



木佐貫千代女という、ちょっと独特な感性を持った女性に振り回された二人は。

現在、さっきとは違った落ち着いた表情で、確りとお互いに向き合いながら対峙していた。

ちなみに、この二人を振り回したという当の本人は。場をかき回すのを、ようやく自重したのか。

二人の様子を、静かに傍で見守っていた。

「その……さっきの闘いでは、取り乱してすまなかった。あれは、確かに私の負けだ。認めるよ、君の実力を」

気まづげに、対峙している竜蔵に腕試しの結果を告げる冴島刀子……。

普段、学園内では凛々しい雰囲気と、異性すら魅了する容姿で有名な彼女にとって。

この視線すら、まともに合わせられない仕草は、とてもレアなも

のであった……が。

対面している竜蔵には、特には関係ないらしく。

「いや、俺自身、手加減が出来ない部分があったし。もう少し、ハッキリとした勝負の付け方もあった筈だから、そんなに気にしないで良いと思うぞ？」

かなり真面目に闘った相手に対して、失礼な物言いであるが。

当の本人が、それを本気で言っているために、不思議と嫌味には感じられなかった。

しかし、感じられなかったとしても。負けた本人にとっては、とても屈辱的な事には代わりが無い。

故に、一瞬冴島の目が陰しくなるも、それを彼女は自ら頭を横に振る事によって、感情を治めた。

「……それだけ、私と君の間には差が有るという事なのであろう。今は、その言葉を胸に刻んでおくよ。後々、確りと返すために」

自ら感情を治めた冴島の表情には、どこか晴れやかなものが感じられた。

おそらく、気持ちに次に確りと切り替えられたのであろう。

それを見て、竜蔵は短く「そうか」とだけ返した。

二人のやり取りが、ひと段落した所で、木佐貫が口を開いた。

「確かに、刀子さんと桐嶋さんの実力には差があります……ですが、それは多少です」

「？」

「さっきの勝負では、桐嶋さんの奇策に、刀子さんが引かなかった形で勝敗が決しました。これは、完全に“経験の差”と言えるでしょう。それも、稽古や真剣同士などという事ではなく。どんな事でも、勝った者が正しいとされる、路上^{リアル}での経験です」

「路上^{リアル}での経験……ですか？」

「はい」

木佐貫の至って真面目なアドバイスに、冴島は教え子の様に視線を彼女に向けていた。

すると、冴島と竜蔵にも視線を向けられていた彼女は、突然、何かを提案するかのように、右手の人差し指を立て始めた。

「ですので、ここで私からの指令です」

木佐貫千代女という、二橋学園では数少ない執行部の中で、一番上の学年に籍を置いていた彼女からの指令……つまり、執行部からの直接的な命令という事。

それを理解していた冴島は、彼女に向けて居住まいを正す。

それをまだ理解していない竜蔵は、ただ突っ立ったまま、彼女と冴島のやり取りをボクッと眺めていた。

「明日から開始する、桐嶋さんの執行部正式メンバーとしての初仕事に。刀子さん、アナタも同行してあげてください」

「同行というと、バディという事ですか？」

聞き返す冴島に、明日から初仕事がある事を初めて知って、目を見開いている竜蔵。

そんな二人の様子を、軽く一瞥した後、木佐貫が言葉を続けた。

「ええ、今までの刀子さんの仕事は、路上……いえ、ストリートな内容のものではなく、どちらかというと隠密に近いものでした。です、これまではラフな闘いではなく、精密さを問われる、必中必殺の闘いを経験して来ていたという事です」

「つまり、私は彼と同行して、そのラフな闘いを学んでくれば良いのですか？」

「その通りです。また、もちろん彼の初仕事のサポートにも回ってもらいますので、明日は頑張ってくださいね」

「はい、了解しました」

勝手に進められる会話、勝手に進められる初仕事とかいう厄介事……。

竜蔵は、それらに異を唱えようと、ようやく会話に割って入ろうとしたのだが。

「ちょ……っ」

「あ、それと桐嶋さんに拒否権は存在しませんから、あしからず」

「ちょッ!? いや、それは酷すぎるだろ!」

とても理不尽な遮りに、思わず竜蔵が声を張り上げる。

しかし、当の木佐貫は、さも当然かの様に。

「アナタが去年に起こした問題や、昨日の“妹さん”とのプライベートなニャンニャン……それら諸々を、世間に公表されたいのですか?」

「ぐッ!？」

「妹さんとのニャンニャン……? 私には聞きなれない言葉だが……それは一体、どういう意味なのだ?」

木佐貫に脅迫というより、弱みを突きつけられた竜蔵は、思わず口ごもってしまう。

冴島は、本気で意味が分かっていないのか、竜蔵に対して、知らない事が恥ずかしそうに尋ねてくる。

そんな光景に一瞬、悪戯心を擦られた木佐貫であったが。

そろそろ時間的にも、色々と圧し始めていたので、それは自重する事にした。

「まあ、そんな事を私がしなくとも。桐嶋さんは、どちらにしても、明日から取り掛かる初仕事には絶対に参加しなくてはならない理由があるのですけどね?」

「絶対に参加しなくちゃならない理由? なんだ、それは?」

気になる言葉を発した彼女に、竜蔵は訝しげな視線を向ける……。

しかし、次に彼女から発せられる情報に、竜蔵の表情は驚きと、怒気に染まる事になる。

それは、竜蔵にとって絶対に守らなくてはならない者に関係する、一番許せない事。

「アナタの妹さん、桐嶋美夏さんが———」

何者かに狙われている様です———

経験の差（後書き）

次回から、本格的に本章の話が進みます。

なるべく、テンポ良くという目標を掲げていきますので。

描写不足があるかもしれませんが、そういった場合は、なるべくご指摘下さい。

直せる範囲で、直して行きたいと考えています。

ではノシ

執行部のお仕事（1）（前書き）

今回から、このサブタイが続きます。

執行部のお仕事（1）

健康診断から、翌日の朝。

昨日の放課後、正式な執行部としての仕事を受けた桐嶋竜蔵と、バディとなった冴島刀子は。

学園の生徒会長室内で、長机を間に挟み、何も書かれていないホワイトボードを背に、パイプ椅子に座る二橋姫樹の前に並んでいた。

「さて、まずは桐嶋君……二橋学園執行部への正式入部についてなのだけど」

まだ大半の生徒達が登校してくるには30分ぐらい早い、朝の生徒会室は。

外からの外気を入れないために、カーテンこそは閉められていないものの、窓は完全に閉め切られており。そこから日の光が、空気中に舞っている少々の埃を反射させながら部屋の中に差し込んでいた。

会長である姫樹が現在、両肘を預けている長机の他に、同じ形の机が竜蔵と冴島の左隣・右隣に並べられている……つまり“コの字型”に並べられた机の内側に、二人は姫樹を前にして立っているという事だ。

「取り合えず、この書類に目を通してから、自筆のサインをして頂戴♪」

言いながら、姫樹は自身の机に置かれていた一枚の紙を手に取り、座ったまま竜蔵に差し出した。

いつも通りの朗らかな微笑み……だが、窓から入ってくる日の光を背にし、優美に整った顔立ちの彼女から、その微笑が向けられたのなら。それは、どこか慈愛に満ちた、人の心に直接暖かさを送り

込んでくる、女神の微笑みに感じられるだろう。

だが、竜蔵の視点^{レジョン}からは、全く持って違った印象が彼女からは発せられていた。

柔和な雰囲気……いや、竜蔵は彼女の強かさ。機を見て敏なりという言葉を体現し、一年の頃に問題を起こした自身を、この執行部という暴力すらも隠蔽される胡散臭い組織にぶち込んだ時の事を知っている。

こちらを優しく迎えようとする、書類を持った細く美しい手……いや、竜蔵は彼女の狡賢さ。こちらが執行部の手伝いを断っている際に、どんと周りの外堀から逃げ道を塞いでいった事を知っている。

母性を感じさせる、豊かな胸や。包容力を感じさせる、栗色の緩いウェーブの掛かった長い髪が、異性である男性を魅了する……いや、竜蔵は彼女の包容力の恐ろしさ。こちらの心が弱っている時、その隙を突いて抱きとめ、男を持ち前の母性で包み込み“洗脳紛い”の事をしようとしていたのを、竜蔵は知っている。というより、被害にあった。

故に、これらの事から竜蔵は。

目の前で、早く一緒になろうとでも言うかのように、執行部の書類をヒラヒラとさせている姫樹の事が、とても胡散臭く、背後からは一度飲み込まれたら逃れられない瘴気を発している狡猾な女性にしか見えていなかった……。

だが、ここ、生徒会室に來た時点で、逃げ場が既に無いのも事実……。

もし逃げたのならば、昨日の屋上での出来事を、ある事無いこと脚色されて、お日様の下を歩けない立場に立たされるかもしれない。そう考えると、普通の人なら余計に関わり合いになりたくないと感じるだろうが……。

「ペン貸してくれます？ 全部教室に置いて来ちゃったんで」

「ええ、どうぞ♪」

竜蔵には、全く持って迷う事の無い事であった。大体、ここまで事が進められていた場合。目の前の生徒会長が、こちらを逃がす筈が無い。

既に、外堀は埋められていると考えるのが妥当であろう。

物理的な面では……スライド式の出入口に目をやれば、モザイクガラスから、人の頭の様な影が二・三見受けられる。

心理的な面で見れば、昨日、木佐貫千代女^{きさぬき ちよめ}から伝えられた情報が、竜蔵を今回の件から離れさせないようにしていた。

「……規約って、これだけなんすか？」

姫樹から書類を受け取り、机の上に置いてから、借りたボールペンで記入を始めようとすると。

竜蔵が、不思議そうに姫樹に向かって聞いた。

書類に書かれた項目……。

それは、規約条項に、自筆で名前を記入する欄……のみ。

しかも、規約条項には二項目しか記載されていない。

一つ———自身が執行部であること、また執行部の存在を他者に伝える・仄めかす事自体を禁ずる。

二つ———関わった案件の全てに対して、守秘義務が発生する。

たったのこれだけ。

竜蔵の所属する二つの団体から、強く入る事を勧められ。殆どの一般生徒や都市に住んでいる住民にすら存在を知られていない組織の規約条項が、たったのこれだけ……。

当然の疑問と質問に、姫樹が至って真面目な声音で答えた。

「もともと、学園都市からの指示で各々の学校で作られる執行部には、ちゃんと都市から提示されている規約条項もあるのだけれど……大抵が、一般常識と差して変わらないの。それに、規約条項が各々の学校や学園で、専用のものであるから、他所も同じような感じなのよ。だからウチも、その程度の事しか書いて無いの」

「……」

その説明に、竜蔵が片眉を吊り上げる。

「他校でも、こんなのが有るって事に驚きましたけど。それよりも、普通に都市から提示されてる規約も見せてくださいよ？」

「……ちっ」

当たり前の事を確認しようとした竜蔵は、そこで信じ難いものを聞いた。

「……舌打ちしましたよね？」

「なんの事かしら〜♪」

「いや、いま絶対に“ちっ”て言いましたよね？」

「会長が、そんな下品な事をする訳がないでしょ〜♪」

右頬に右手を添え、本当に“なんの事かしら”と、一切崩れる様子の無い微笑みを浮かべながら白を切る姫樹。

どう考えても、どう遡ってみても、あれは彼女から発せられた舌打ち。

その確信を持って、竜蔵は姫樹に迫及しようとしたのだが。

「……うん？」

竜蔵の視線の先で、なにやら姫樹が。

こちらとは違う方向に、微笑みで閉ざされた、無言の圧力が込められた視線を向けていた。

それに何だと、追ってみると……。

プレッシャー

そこには、姫樹の無言の圧力に冷や汗を掻きながら、目を泳がせ

ている、普段なら凜とした雰囲気か女性としての魅力を引き立たせている冴島刀子がいた。

立ち姿は、正に直立不動……一切のぶれすら感じさせない、見事な硬直状態。

蛇に睨まれた蛙とは、こういう事だったのかと、竜蔵は理解した。すると、そんな冴島が、震える口調で竜蔵に口を開いた。

「き、桐嶋君？」

「……」

冴島の問いかけに、竜蔵は視線を向ける事で返す。

「い、今のは私なんだ……だから、会長がしたのではない。そ、その気に障ったのなら……」

「いや、それは無いだろう」

もはや裏返った声で、どう考えても罪を被ろうとしている冴島に、竜蔵が冷静に返す。

しかし、尚も冴島の可哀想な姫樹に対してのフォローは続く。

「そんな事はあるものか！ 舌打ちをしたのは、この私だ……」

「じゃあ、何に舌打ちしたんだよ？」

「そ、それはだな……そう！ 虫が飛んでいたんだ！ 私の顔の周りで……だ、だから」

「もう無理しなくて良いつて。会長が恐いのは、俺も同じだからさ」

「あら♪ なぜ、いつの間にかに私が悪役になっているのかしら？」
見てもらえない。

昨日、結果的には一刀も振るわせずに勝った相手だが。

その立ち姿や、醸し出す空気……更に言えば、くもりや穢れ一つ無い出で立ちからは考えられない、鋭く洗練された威圧感を放っていた者が。こうも情けなくしている様に、竜蔵は無意識の内に耐えられないと感じていた。

故に、昨日の敵は今日の何々といった精神の下、自分なりに助け舟を出したのだが……。

当の本人に、全くもって罪の色は見られない。

「事実じゃないですか。大体、俺が音の方向を聞き間違えると思いますか？」

言いながら、自身の耳たぶを、片手で弾くジェスチャーを取る。それを見て、姫樹は“はあ”と溜息を付きながら。

「それもそうね。ちよつとした戯れのつもりだったのだけれど、ごめんなさいね、刀子さん？」

「は、はい……私は気にしておりませんので」

仕方が無いといった雰囲気を感じそうともしていなかったが、意外にすんなりと冴島に謝罪をする姫樹。

だが、どうにも冴島は姫樹に話し掛けられる度に、緊張した様子でいる。

昨日、木佐貫に聞いた話では、確かこの二人は本家と分家といった、一般人である自分には良く判らない関係上にあるらしいと、竜蔵は思い出していた。

だからだろうか、胸中で首を捻るも、そういった世界には全くの無知な竜蔵には、何も浮かばない。

仕方なしに、その思考を切り上げると。竜蔵は本題の、自身の話題へと再び軌道修正を計った。

「とりあえず、都市から出されてる方の規約を見せてくださいよ」

「まあ、別に構わないのだけれど……意外ね、桐嶋君が、そこまで書類に対して慎重だなんて」

「工作上、よく契約書とかにサインを書かされますからね。自分でチェックするのは普通ですよ。逆に、しなかった場合、大抵ろくな事にならないですから」

「あらあら、いっちょ前に確り者ぶって……去年のアナタからは、考えられない言葉ね♪」

姫樹は、そんな事を口にしながらも。

自身が座っていたパイプ椅子の横に置かれた、学校指定の鞆から、冊子になっている程の紙の束を取り出した。

ドンっと、思わず効果音を点けたくなくなってしまいうぐらいに分厚い

紙の束……もとい冊子は、竜蔵に口端を吊り上げさせた苦笑いを浮かばせる。

「はい、これが都市から提示されている規約条項が全文書かれた冊子よ。好きに目を通して頂戴♪」

「お、おおう……」

その紙束の量は、パツと見で200はあるのではないかと感じるぐらいで。

流石に、プロの格闘家として契約などには慣れている竜蔵でも、この量に呻き声を出してしまう。

「ちなみに、表紙と最初の目次以外、全部が規約についてだから。一つの見落としてもなく読むには、流石に朝の授業には間に合わないんじゃないかしら♪」

楽しそうに微笑みながら、竜蔵に弾んだ声音で言う姫樹。

その笑顔……正に女神の如し慈悲深さ。

ただし、内側は悪戯に成功した子悪魔の様な高笑いを上げていた。

「まさか、これを見越して、わざと舌打ちを……？」

「さあ？ ただ言えるのは、確かに“この中に”、私が“アナタを手に入れるための手段”が入っているのは間違いないという事だよ」

ニヤリと、普段は笑顔で閉じている目を薄く開けながら、こちらに薄気味悪い微笑みを向けてくる。

恐い……まさに猛獣が獲物を前で、舌なめずりをしているかの様な危機感。

今度は、冴島ではなく、竜蔵の額に冷や汗が流れ始めた。

自身が先程、直感で浮かべたのは、ただこちらに嫌がらせをするために、デカイ冊子を読ませるよう誘導させたという事……だが実際に、読まなければ、もしかしたら自身が、目の前の腹黒い強かな女の手駒になってしまうという、部活や校外で活動している身としては何としても避けたい罠。

謀ったな！ とまでは言わないが、何も、ただこちらに冊子を読

ませたいがために、ここまでするだろうか、竜蔵はゲンナリとした――

視線や向けられる微笑は恐い……それはもう、冷や汗ものだ。

だが、込められている真意は、実は有る程度理解できている。

「はあ……あんまり、俺を見くびらないで下さい。いわれなくても、ちゃんと読むようにはなりましたから」

「あら？」

竜蔵の反応に、意外なものを見た、姫樹が驚いた表情をする。

「もしかして、私が何をアナタに言いたかったのかが理解できたの？」

「そりゃあね……去年から今まで、だいぶ色んな方面で矯正されましたから。お陰で、色々と助かってますよ」

疲れたような声音で、パイプ椅子に座っている姫樹の前に置いてある冊子を手に取る。

そしてそのまま、パラパラと冊子の頁を流すように捲り始めた。

「男子三日会わざれば何とやら……前は、一切こういう事には注意を向ける様な子じゃなかったのに。会長、桐嶋君が成長してくれて、とても嬉しいわ♪」

感慨に耽る……というより、妙に大げさな芝居がかった仕草で、

竜蔵に“飛び込んでおいで”と両手を広げる姫樹。

それは、学園の男子生徒が、いくら憧れても辿り着けない、二橋姫樹という慈愛に満ちた女神の懷。

もし、これが他の男子生徒だったのなら、大半が誘惑に負けて飛び込んでいたところであろう。

だが、当の竜蔵は。

「なるほどねえ……確かに、一般常識みたいなのはっかだわ」

パラパラと流し読みしている冊子に、目を向けたままであった。

面白くない……この様子に、微妙にカチンときた姫樹は、少々眉間を歪める。

だが、そんな表情も、彼女の本性を知らない者にとっては、あま

り恐くは感じない。

むしろ愛らしく思えるぐらいだ。

だが彼女自身が、今の竜蔵を見て多少の不機嫌を覚えたのは事実だ。

故に、姫樹が意地悪次いでに、今後、彼には内緒の勧めようとしていた、ある事について口を開いた。

「ねえ、読みながらで良いから、ちょっと話をしてもいいかしら？」

「……どうぞ」

姫樹の言う通りに、冊子に視線を向けたままで、静かに答える。

その様子を一瞥した後、姫樹は心底楽しそうな笑みを浮かべながら、いまだ凜とした佇まいで立っている冴島に視線を向けた。

「昨日、千代女に子作りを申し込まれたんですって？」

「ぶッ!？」

まるで世間話でもするかのように、昨日の事を話題に出された竜蔵は、思わず吹き出してしまう。

なぜか姫樹に視線を向けられたままの冴島は、頬を少しだけ赤らめ、恥ずかしそうに視線を伏せた。

「でも断られたって、昨日の夜に千代女から連絡が来たから。我が学園の屋上で、そんな行為が行なわれなかったって事は安心したのだけだ」

「……何が言いたいんですか？」

「いえねえ……私としては、小さな頃から幼馴染として知っている千代女の、何がいけなかったのか気になって————桐嶋君は知らないかもしれないけど、彼女、普段はわざと地味な格好をしてるから、脱いだりしたら凄いのよ？ それに、あれでも見れば整ったスタイルをしてるって、アナタの目なら分かるでしょ？」

心底分らないといった声音で、視線をこちらには向けたがらない竜蔵に問いかける……だが、当の彼女はなぜか、視線をまだ冴島

に向けたままだ。

竜蔵は、その問いかけに当たり前といった様子で答えた。

「そりゃ、やらせてくれるって言うんなら、やりたいのが俺ですけど……いくらなんでも、いきなり面と向かって子作りをしようって、事務的に言ってくる人とやる気はないですよ」

「そう……意外に、軽率な事はしないと。だけど、もしそれが刀子さんだったらどうしてたかしら？」

「「ぶッ!？」」

その続く問いかけに、今度は竜蔵と冴島の二人が同時に吹き出した……ちなみに、冴島は吹き出しでも、どこか下品には感じられない、小さく控えめなものであった。

「刀子さんは、何を驚いてるのかしら？」

「な、何をではありません!？　いきなり、何を言い出すのですか!?!」

「何って……刀子さんも、一応は耳にしているのでしょうか？　私達の家々には、本家だろうが分家だろうが、優れた遺伝子を持つ者と、いずれは交じ合わねばならない決まりがある事を」

「そ、それと今のが、どうして関係するのです!？」

二人……いや、冴島が一方的に憤慨する中。

竜蔵は、これはどういった会話なんだ?——と、頭の上に“?”を浮かべていた。

「どう関係するって……それは昨日、桐嶋君と闘ったアナタの方が理解しているのではなくて?」

冷静さを失い、もはや顔を真っ赤にして声を張る冴島を相手に。

姫樹は至って冷静な声音で向き合っていた。

「日本古来より続くといわれる、二橋を中心とした六ろくしん苳に数えられる家の者達は……」

「姫樹さん!？」

しかし何やら竜蔵にとって、訳の分からない方向へと会話が進んでいく途中。

突然、冴島が驚いたように、姫樹の言葉を遮った。

これまでの直立不動が、既に嘘の様に崩れ去っている……どうやら、相当焦っている様であった。

が、当の姫樹は至って涼しげな表情で、いつも通りに微笑んでいる。

そんな姫樹に、冴島が咎めるような視線を向ける。

「アナタは何を急に……」

「あら？ 私は私の判断で、別に構わないと思ったから、話そうとしたまでだけど？」

「……」

傍目から見れば、冴島が何に対して怒っているのか……発端となった言葉は理解できるが、明確な理由が理解できない。

故に、竜蔵は、この生徒会室内で、二人の。いや、冴島が一方的に姫樹を睨んでいる姿を、何ともなしに眺め続ける。

すると、暫くしてから、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「……はいはい、今日のところは、私が引きましょう。こうなると、刀子“ちゃん”は頑固でちゅからね♪」

「なッ!？」

身を引くと言いつつ、相手に悪戯な笑みを浮かべながら、何やら赤ちゃん言葉で子ども扱いし始める姫樹。

それに、顔を真っ赤にさせながらビクツと反応する冴島刀子という、いつもは凜とした涼やかな空気を纏っている女子生徒。

この光景に……いや、明確に言えば、二橋姫樹という、豊かな母性を感じさせる女性から出た赤ちゃん言葉に、竜蔵は一瞬、不覚にも嬉しい方の反応を示してしまった。

それに気付いたのか、姫樹が竜蔵に意外といった表情を向ける……ちなみに、顔を真っ赤にさせた後、必死の形相で反論し始めていた冴島は、完全にスルーされていた。

「あらあら♪ 桐嶋君は、こういった口調が好きなのね？」

「違いますよ……」

「そう……なら、さっき私が言った様に、刀子さんはどうかしら？」
「あゝ……もうそろそろ時間なんで、俺は教室に戻っていいっすか？」

あからさまに姫樹の話題戻しを、面倒臭そうに流す竜蔵。

その様子を、ちよつとだけ詰まらなそうな顔をしながら、姫樹が見ていた。

だが、確かに竜蔵の言うとおり時間も迫っている。

故に姫樹は、この少々脱線気味であった場の空気を軌道修正し、改めて竜蔵に内緒で勧めようとしていた事の本題に入る事にした。

「そう言えば、私から、アナタに頼みたい事があったのよね」

本来なら、さっき竜蔵が規約の書かれた冊子を流し読みしている最中に、問いかける筈であった事。

既に竜蔵は、その冊子がある程度読み終え、その辺の机の上に放置していた。

それほど、色々と話を脱線させるのを楽しんでしまったのかと、姫樹は一瞬だけ自身を咎めようとしたが……考えてみれば、今の直ぐにでも教室に戻らなくてはいけないというタイミングは。一番この話題を振るのには適していたのかもしれないと思いなおした。

「頼みたい事っすか？」

「ええ、時間も無いから、後からで良いのだけれど」

「はい、どうぞ？」

「アナタの妹さん……桐嶋美夏きりしま みなつさんを、生徒会に迎え入れたいのだけど」

手伝ってくれるかしら？———

◇

「失礼しました」

生徒会室の窓とホワイトボードを背にした姫樹が、いつも通りの微笑みを浮かべながら手を振る中。

冴島刀子が、深々と背筋の通った一礼をした後、生徒会室のドアを閉めた。

ドアを閉めた後、すぐに後ろへと振り返る。

そこには、昨日、色々と変な事を真面目な顔で行なおうとしていた、木佐貫千代女と、さっきまで共に生徒会室にいた竜蔵が。朝の日差しが差し込んでくる廊下の窓のすぐ傍で、互いに向き合っていた。

二人の表情には、なんら特別な色は見られない。

ただただ、其々が普段している、いつも通りの何も無い表情だ。

「さっきまで、ここに何人か人影が見えたんだけど？」

ここ……とは、いま竜蔵・冴島・木佐貫の三人が立っている廊下の事。

まだ、登校時間までには余裕が有るため、とても静かな空間だ。

「はい、私の他にあと二人、生徒会のメンバーがいましたが。その二人は、今しがた私が教室に帰しました。彼らは執行部の存在こそ知ってはいても、具体的な活動内容までは認知していませんから……知る必要も無いことですしね」

別に、気にする事もないですよという声音で、竜蔵の問いかけに返す木佐貫。

すると、木佐貫が冴島の方に、軽く視線を向けた。

冴島は、その視線の意味を察知すると、ゆっくりと瞼を下ろし、何やら周囲に向けて集中し始めた。

そして、5秒もしないうちに、冴島が下ろしていた瞼を上げる。

「大丈夫です、周囲には、私達と会長以外に気配はありません」

「分かりました、ありがとうございます」

問題はない、と告げる冴島に、目礼をすると、木佐貫は再び竜蔵と向き直った。

「では、今日の午後から始める執行部の活動について説明しましょうか」

「だな」

相手は先輩にも関わらず、これまでの印象から敬語を全く使わない竜蔵に、木佐貫は何も言わずに話を続けた。

「今日やる事は、まあ簡単に言ってしまうえば聞き込みですね。それも、完全に自分達の足で行なってもらいます」

理由は二つと、指で竜蔵に示しながら。

「まず、昨日説明した正体不明の相手に“こちらが探しているのを臭わせる”のが一つ目の理由です。これは、本来ならアナタ達だけで進める筈だった事件に、私が手助け出来るようになった事で可能になりました。出来るだけ臭わせまくって、犯人を焦らす、または迂闊に動けなくしてください。なるだけ早く、犯人がどうやって犯行に及んでいたか？ どこにいるのかなどを特定してみせますので、その自信に満ちた……というより、やれて当然といった口調に、竜蔵は小声で漏らすように「頼もしいね」と呟いた。

すると、目ざとく木佐貫が食いつく。

「でしょう？ ならば、これ程に頼もしい女を手に入れたとは思いませんか？ 思いますよね？」

「自分を安売りするような女は信用できないから、まずはそこをどうにかしろ」

「……残念です」

話が脱線したところで、傍に控えていた冴島が「こほん」と小さく咳払いをする。

それに反応した木佐貫が「では、二つ目の理由は……」と、説明の方を再開した。

「アナタと刀子さんの距離を縮め……『木佐貫先輩？』」

再開した途端、どう考えてもふざけようとした所を、再び冴島に冷たい声音で咎められる。

しかし、木佐貫に氣にした様子はない。

ただ淡々と、言われたとおりに軌道修正を計った。

「ぶっちゃけ、アナタに執行部の動き方を教えるのと、刀子さんに武術的な成長を促す事の二つにあります。おそらく、相手方も、アナタ達が嗅ぎ回っているという情報を掴めば、何らかのアクションを起こす可能性があるので、その時に……といった感じです」

昨日の腕試しと銘打たれた闘いで、冴島は竜蔵の奇策の前に、何も出来ずに終るといふ結果に沈んでしまった。

それは確かに、竜蔵の実力も相まって可能だった奇策なのだが。実際に、ただの一刀も木刀を振れずに負けてしまったという事は、冴島ひいては、木佐貫にとっても無視できない事だったらしく。

今まで闘ってきた世界だけではなく、他の世界も見て学べという事を、昨日の時点で木佐貫は冴島に言っていたのだった。

しかし、竜蔵自身の意見は少々違う様で。

「俺は別に構わないけど……ホントに、“こっちの戦い方”なんて必要なのか？ 俺的には、そのままでも十分だと思うし。むしろ、今のままの戦い方を伸ばした方が良いと思うんだけど？」

その問いに答えたのは、傍に控えていた冴島自身であった。

「確かに、それも一つの考えだ……だが、現に昨日、私は君に完敗している。その事実から目を背ける事は出来ない」

「いや、だから昨日は、あの後に言っただろ？ 無傷で終わらせるのは、あの方法しか無かったって。実際、普通にやったら、多分、俺も危なかったと思うぞ」

「だが結果は結果だ、受け入れない限り、私に成長は無い。それに、相対した時点で、そういった考えを相手から消せなかったという事が、既に私の未熟を示している」

だから、君が何と言おうと、考えを変えるつもりは無い————強い意志……そこから計り知れない程の向上心すら感じさせる、

刀の様な妖艶さと魅力を持った、切れ長の目。

それを真っ直ぐに向けられてしまった竜蔵は、「はあ」と呆れたような溜息を吐きながら。

「頭固いね……」

「なんとでも言えば良い」

「だけど、そういうのは嫌いじゃない……俺も同じ様な人間だし？」

達観した様な声音だったが、真剣な表情をする冴島に、仕方が無いといった笑みを竜蔵は浮かべた。

笑みを向けられた冴島は、一瞬間を喰らった顔をするも、直ぐにこわくてき蠱惑的な微笑みを返した。

そんな二人の様子を見て、木佐貫が抑揚の無い声音で、面白くないといったふうに出した。

「やはり桐嶋さんは、冴島さんの様な女性に欲情するんですね。私に向けるものとは違った感情が感じられます」

瞬間、冴島の顔が爆発したのかと錯覚する程に、一気に真っ赤に染まってしまった。

対する竜蔵は、何を馬鹿なことをといった声音で口を開いた。

「当たり前だろ？ 実際、誰が見ても同じだと思うし。他を見ても中々いないと思うぞ？ こんな美人」

「それは、アナタの妹さんと比べても、という事でしょうか？」

「……」

「そこで迷うから、他の方々からシスコンと言われてしまうのですよ？」

「……ほっといてくれ」

なぜ、木佐貫が自身の周りの事を知っているのか？

それはさて置いて、竜蔵はこの時、本気で自身の無意識下での家族贔屓を治そうと考えたのだった……決して、シスコンではない。

するとそこで、顔を真っ赤にさせた状態のままの冴島が、話題を変える、もしくは本題を進めるために、視線を二人に向けなおした。

「そ、そういえば！ 桐嶋君は、さっきの規約条項の冊子を流し読みしていたが、内容は確りと頭に入っているのか？」

話題を転換しようとしたのは分かるが、どう考えても焦っているのが分かる、声が裏返った様子の彼女に。二人は一瞬、笑いを堪えた。

堪え終えた竜蔵が、冴島の問いかけに答える。

「いや、また後で見に来る。流石に、そんな早く読めないって、あんなの」

「そうか……なら、外に出る前に、またここに寄らないといけないな」

必死に、真っ赤になっていた感情を抑えながら。

なにやら、その細顎に指を添えて考え込む仕草を取る冴島……妙に様になっている。

「だな。さっきのは会長の冗談だって信じたんだけど、もしマジだったら笑えないからな……」

実際、心の隅で所詮、学校・学園関係の機関が出した規約と、舐めている竜蔵ではあったが。それがもし、法的以前に、何らかの拙い拘束力を持っていない場合を否定は出来ない彼は、一応の警戒を込めて、冴島の提案に賛同する。

「では、そろそろ他の生徒達が登校してくる時間帯なので、一旦解散するとしましょうか」

二人の様子を見て、そろそろ頃合だと感じた、木佐貫が発した解散の言葉に。

竜蔵と冴島の二人が、無言で頷いた……。

執行部のお仕事（1）（後書き）

感想とか欲しいっす。

生意気かもしれませんが、反応が有るのと無いのでは、だいぶモチベーションが違いますから。

あと、台詞と地の分は、一行空けた方がいいですか？
読みづらいといった方がいらっしゃるなら、遠慮なく申してください。

なるだけ、今度から意識して書きますから。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！！（前書き）

今回、ちょっと辻褄が合っているのか心配です。
何分、今日ぐらいしか、他に書ける日が無かったもので……。

執行部のお仕事(2) 兄を追え!!

(さて、今日から本格的に部活か〜!)

二橋学園のとある廊下で、そんな事を胸内で嬉しそうに叫びながら歩を進めている女子生徒。

少し赤茶のボーイッシュなショートヘアと、長身にも関わらず均整の取れていたスマートな体型をしている、活発そうな顔立ちが特徴的な女子生徒――――きのしたあい木下藍は。

入学から三日目。

一年A組のクラスで、明日の体力測定の説明や、前期に使用する教科書の説明、部活の入部申請書などの説明を、退屈そうに聞き流した後。

特待生として入部した、女子バスケットボール部へ言葉どおり本格的に参加するため、意気揚々と、その部活動の部室へと向かっていた。

辺りには余裕を持っている彼女とは違って。他の一年の生徒達が、新しい先輩達に変な印象を持たせぬよう、遅刻厳禁とばかりに駆け足で部活動へと向かっている最中で。

(でもまあ……こんな風に新一年生を焦らせる辺り、結構どこも上下関係が厳しそうだよね)

それを眺めていた藍が、ちょっと嫌そうな表情で、肩を下ろしていた。

もともと、彼女は上下関係というものが苦手だ。

苦手といっても、ある程度は普通に接せられるし、先輩などに気に入られる素養もある。

では、どうして苦手なのか?

それは上下関係というよりも、今の藍が見ている光景に原因があ

る。

簡単に言ってしまうえば、皆が皆、先輩などとの上下関係を気にし過ぎていて、傍から見たら窮屈でならないからだ。

もう少し、肩の力を抜いて、先輩と接せられないものなのか？

先輩も、緊張した後輩よりも、少し砕けた後輩の方が、色々と気を遣わなくて良いのではないか？

藍は常々、そういった事を、日本の部活動を通じて感じてきていた……。

まあ最近では、こういう事は人それぞれで、個性が集団を成すときはバランスが大事と考え始めているので、そこまでは気にしなくなって来てはいるが——

そこでふと、周囲に視線を流していた藍が、何かに気付く。

いや、何かというよりは、思春期・浮いた話が好きな女子にとっては、見過ごせない光景。

（あれって、美夏のお兄さん？）

藍の視線の先には、なにやら一人の男子生徒……桐嶋竜蔵が歩いている姿があった。

確かに彼は、人の目を集めるほどの見事な肉体をしている……が、別に筋骨隆々の男が歩いている姿など、気にする事もない。

だが、ここは一学年の教室が構える階層。そこに、第二学年の間がいるだけでも、少し不思議な風景なのだが……もちろん、藍にとって見過ごせないのは、そんなところではない。

（隣に歩いている人、誰だろう……？）

藍の好奇心を惹きつけたのは、竜蔵の歩調に合わせて隣を歩いている、黒髪の女子生徒。

その女子生徒は、隣を歩く竜蔵と差して背は変わらず。腰まで伸びた長く艶やかな黒髪を、美しい歩法のたびに揺らしながら、藍だけではなく周囲の目も独占している……。

見えるのは後姿だけ。

しかし、それだけでも彼女が非凡な容姿をしている事が確信できる、不思議な空気が感じられた。

現に、彼女が他の男子生徒を通り過ぎる度に。一年の男子生徒達は、顔を赤らめながら、その女性の事を眼だけで追っていた……人を魅了するとは、こういう事なのかと、藍が妙に納得してしまう光景であった。

そんな光景を目の当たりにしていると、ふと自分が、いつの間にかに足を止めていた事に気付いた。

また藍が気付くと同時に、竜蔵と謎の美女は、この階層……本校舎四階の一番隅にある、とある部屋へと姿を消していった。

二人が部屋に入ると共に発せられた、ドアの閉まる音で、この廊下に広まっていた空気が、一瞬にして霧散する。

藍がそこで、ハッと我を取り戻したかのように、竜蔵と共に消えていった女生徒に固定していた視線を元に戻した。

周囲では、藍と同じように目を奪われていた者達が、先程同様、部活へと向かうために意識を戻していた。

(すごい美人だったな〜もう空気が違うっていうか……)

先の女性から発せられていた、こわくてき蠱惑的な空気の余韻から目を覚ました藍であったが。

それでも、胸中で感慨そうに呟かざる負えなかった……それほど、この空間で一際目立つ存在感を持っていたのであろう。

これほどの空気は、あの新しく出来た友人でも、作れるかどうか分からない……おそらく、容姿だけなら引けを取らないかもしれないが。

だがここで、藍は重大な事に気が付く。

(あれ? でも、いま二人が入った部屋って、確か一般生徒が使えない教員用のPCLームだった筈じゃ……って、まさか!?)

瞬間、藍の顔面が着火した様に真っ赤に染まる。

上級生である友人の兄が、わざわざ下級生だけがいる階層に足を運び。あまつさえ、かなりの美人を、一般生徒が出入りできない、

教員用の部屋へと連れ込んでいた……更に言えば、その部屋は常に明かりが灯っておらず、担任の話から、教員ですら使用していない無人の部屋だと聞く。

色々考え付いた事はあるが、どうしても思考が一点にしか向こうとしてくれない。

思春期の少年・少女が、殆ど誰も使っていない学園の一室に、一緒に消えていく……しかも課外活動の時間に。

あわわわわと、声にならない焦りと、外に出してはならない妄想が、藍の頭の中を駆け巡る。

そして気がついた時には、何故か藍の手元に、学園指定の鞆に入られていたタッチパネル式の携帯電話が握られていた……。

こうなってしまうては、自己の思考を制御出来なくなってしまう人間の行動は止まらない。

藍のタッチパネル式の携帯電話のディスプレイは、既にメール画面に切り替えられている。

そして、その宛名には桐嶋美夏きりしま みなつという、彼女の友人の名前が入られていた。



普段は全く使われていない教員用のPCルーム……。

だが、天井に埋め込み式の蛍光灯が点灯されていない、この暗幕すら閉められた薄暗い空間には、一箇所だけ、稼動しているPCの明かりが灯っていた。

数あるホワイトのデスクが並べられている所の、丁度真ん中辺りを照らしている明かり。

そこに、部屋へと入ってきたばかりの二人は視線を向ける。

「遅かったですね、もう既に纏まっていますよ」

すると、この部屋で唯一稼動しているP Cの前に座っている女子生徒が。

振り向きもせずに、入ってきた二人……桐嶋竜蔵と冴島刀子の二人を言葉だけで出迎える。

「すみません、少々、私のクラスの方で……」

「いいえ、分かっています。どうせ、アナタを迎えに来た桐嶋さんに、クラスの殿方達が群がったのでしょう」

「女子も、だけどな……」

他愛のない会話をしながらも、二人は部屋の中央に座っている女子生徒のもとへと、ゆったりとした何の警戒もしていない足取りで近づいていく……若干、なぜか竜蔵の声音が疲れているものに聞き取れたが。

そして、とりあえず二人が、先程からP Cの前でキーを叩いている女子生徒の後ろへと立ったところで。

「さて、早速ですが、お二人にはこれを見てもらいます」

と言って、P Cの前で椅子に座っていた人物が。

そのかけている丸眼鏡で、ディスプレイの明かりを反射させながら、P Cの前から横へと身をどけた。

同時に、竜蔵と冴島の二人の顔が、ディスプレイの明かりに下から照らされる。

しかし、そんな事など、二人は気にしない……。

それよりも、見るようにと言われた画面に表示されていたものに、一気に表情を強張らせていた。

「これは……」

「悪質だな」

二人が目の前になっている、P Cの画面に映されているもの……。

それは、何やらピンク色の怪しい背景を背に張られた、数々の写真画像集。

二人が顔を強張らせたのは、その画像集の“内容”だ。
表示されているページのサイトには、こう題名として書かれている……。

『女子高生丸秘盗撮画像館』———

名前どおり、貼られている数々の画像には、各校の指定された制服を着用した少女達が、至って自然な姿で映し出されていた。

中には、かなり至近距離で撮ったと思われる画像まである。

また、其々の画像の下には、まるで写真展の様に、二人の眉間を歪めるに値する題名が表示されていた。

「このサイトは、一昨日。つまり本校の入学式が終った後、すぐに設立されたものの様です……見つけるのには、あまり苦労はしませんでした。サイト入り口に表示されているカウンターを見る限り、まだそれほど人は入っていないようですね」

画面に視線を落としていた二人に、この部屋で先んじて調べ物をしていた女子生徒……木佐貫千代女（かさいぬちよめ）が、マウスに手を乗せながら説明を始めた。

「そして、お二人……というより、桐嶋さんに見てもらいたいのは、この下です」

言いながら、木佐貫は手を乗せているマウスを使って、画面を下へとスクロールしていく……。

すると、彼女が竜蔵に見てもらいたいと言っていたものが、すぐに見つかった。

「この写真に写っている人物……」

その写真を一度見た瞬間、暫く信じられないといった表情をしていた竜蔵が、説明をする木佐貫を無視しながら。PCが置かれているデスクの上を握り締めた拳でぶっくら棒に殴りつける。

ガンッ！！———と、机の上に設置されていた物が、一瞬浮き上るほどの衝撃。

竜蔵のゴツゴツとした、拳風で変容している拳で殴りつけられた机の表面には、若干の蜘蛛の巣状のひびが入っていた。

「なんだ……これ？」

怒りに震えた声音……また強張ったのは目だけではなく、額にも怒気を露にさせる筋と血管が浮き彫りになっていた。

拳を握り締めた右腕の前腕には、既に無数の血管の道と筋肉の亀裂が頑強に張られている。

もはや前のめりになりながら、画面を睨みつける竜蔵……。

その視線の先には。

「なんで、美夏が撮られてんだよ……」

自身の妹、桐嶋美夏のカメラを全く意識していない姿が、画像のフレーム内で映し出されていた。

幸い、盗撮などで良く見られる、スカートの中の写真などの存在は見受けられない……だが、それよりも昨日の体操着姿だったりだとか、桜並木を散ゆく花びらと共に歩いている姿だったりだとか。明らかに、撮られている事に気付かれていない姿が、このサイト内には無数に存在していた。

「物に当たるのはよしてください……と、言いたいところですが。こればかりは、お気持ちもお察します」

「おい！　どういう事だよ！！　なんでうちの妹の写真が、こんな変なサイトに載せられてんだ！？」

眉間や米神にまで薄く血管が浮き出ている、怒気に染められた視線を。

今度は横に身を引きながら椅子に座っていた、木佐貫の方へと向ける。

しかし、妹の写真を明らかに如何わしいサイトに無断で載せられ怒る竜蔵とは対照的に、木佐貫の方は至って冷静だった。

「昨日、私が言った“妹さんが、何者かに狙われている”という言葉

葉は、これが原因です。桐嶋さん、怒るのも分かりますが、今は相手が誰なのかも分からない状態なのです、一旦落ち着きましょう。落ち着かないと、これ以上の説明はしませんよ？」

「……くそッ！」

木佐貫の宥めるといふより、むしろ咎めている様な言葉に、竜蔵は悪態を付きながらも理解し、居住まいを正してから向き直った。
「……それで、どうして、こんなサイトにうちの妹が？」

「はい。これは桐嶋さんの妹さんだけの話ではなく、基本的にサイト内では、今年の新一年生をターゲットに扱っている様なのです」
「新一年生を？」

「はい、それも本校だけではなく、第一区内全ての学校・学園で行なわれている様なのです」

「第一区内全て……となると、相手は集団という事でしょうか？」
竜蔵が落ち着いたところで、ようやく本題へと入った説明に、冴島が参加し始める。

それに、木佐貫は静かに頷きながら。

「確証はないですが……ただ、これだけ近くで撮影されているのです、内部の犯行と見て間違いないでしょう。が……」

「が、て……どう考えても、こんだけ人の顔の近くで撮ってる写真もあるんだ、学園内の誰かが犯人なんじゃないのか？」

外見自体は落ち着いてはいるものの、見るものが見れば、落ち着きのない乱れ方をしている、竜蔵の周囲を漂う空気……木佐貫は、それを意図的に見逃しつつ、竜蔵の疑問に答えた。

「最近、学園都市内の機械工学系の大学から、超小型の自立飛行偵察機なるものが発表されたばかりなのを、桐嶋さんはご存知ですか？」

「……ああ、あのハエや蚊よりも静かに飛べるってやつだろ？」

木佐貫の知っていて当然という問いに、竜蔵は一拍の間を空けながら答える。

どうやら、若干曖昧な記憶だったらしく、この程度の情報しか頭

から引き出せない様であった。

それを見かねた冴島が、出来る限りの補足を入れる。

「確か、虫の様な複雑な飛行は出来ない代わりに。エアーなどを外気と循環させながら噴出して、空中を漂い続けられる程の小ささと軽さを備えた。将来、医学や災害救助でも活躍出来るかも知れない現代の画期的な発明……大きさは一ミリから二ミリ程度で、内部にエアーの循環器の他に簡易的な撮影機器、それで撮影した画像を他所に送るための送信装置があるという話だ」

冴島の補足に、竜蔵は「へー」と呆けた表情をするも、次には木佐貫のほうへと視線を戻していた。

「で？ その自立飛行偵察機とやらが、もしかしたら使われているかもしれないって事なのか？」

「はい、あまり考えられない事ですが。ここまで近くで、何枚もの写真が収められている事と、时期的な問題から、その可能性も捨てきれないのです」

「だとすると、絞込みの時点で、だいぶ難しくなってくるな……」

これまでの説明から、少々難しげに考え込む竜蔵。

だが、それを木佐貫が付け足す。

「ですが、これはあくまで可能性です……それに、いくら自立飛行型といっても、まだ試作段階。しかも、一応出来上がったというレベルの話です。使ったとしても、撮影したデータの送信に関しては、結構近い距離でないと、まだ使えないといった物ですしね」

「そうか……」

あくまで可能性……竜蔵は、この木佐貫の説明に少しだけ疑問を覚えた。

暗い室内の中で、唯一稼動しているPCのディスプレイに映し出された、妹の盗撮写真。

如何わしい内容のものは取られていないものの、ほぼ……というより、完全なオフショットで写真に収められている事から、妹は撮影者に全く気付いていないという事になる。

だとすると、どうやって撮影したのか？

写真の背景を見ると、どう考えても隠れる場所のない所からでも、美夏の写真を撮っている。

これは、普通の人間に可能な業なのか？

そう考えていた竜蔵に、木佐貫が「気付きましたか？」と、若干嬉しそうに尋ねてきた。

「何にだ？」

「もちろん、この写真の違和感です」

「それは、まあ……正直言って、素人の俺から見ても、この距離からアイツに気付かれずに撮るなんて不可能な話だからな」

「ええ、その通りです。普通の人間なら、これ程の距離・角度で写真を撮られれば、何かしらに気付くはずですからね」

木佐貫の言うとおり、サイトに載せてある盗撮写真の数々には、どう考えても、普通の人間の視点から撮れないものも存在している。つまり……と、今回、事前に調べをまわしていた木佐貫が、結論付ける。

「撮影者は確実に、最近発表された、自立飛行偵察機を使用していると言えるのです」

確かに、これ程までの写真を見せられれば、その考えに行き着くしかない。

しかし、ほぼ出来上がったばかりの試作段階だと、彼女は言った筈だ。

それに疑問を持った冴島が、木佐貫に不思議そうな目を向けた。

「ですが、そうなると、内部の犯行という可能性が強くなるのでは？」

当たり前の質問に、木佐貫が特に気にした様子も無く答えた。

「ええ、おそらくはと言いたいところですけど。流石に、安易に答えを出すのも拙かったので、私も昨日から色々と考えましたよ……いくらんでも、盗撮程度に最新鋭機を使うのか？ だとか。使ったとしても、どんなメリットが？ だとか……正直、考えるのも馬鹿

らしく思えるぐらいに」

言いながら、おもむろに木佐貫が椅子から立ち上がり、ディスプレイの前を陣取っていた竜蔵を片手でどけ、今度は自身がディスプレイの前に立ち、マウスを操作し始めた。

すると、どんどんと下へと移動していく画面に、竜蔵と冴島も視線を集中させる。

「ですが、このサイトの法則というより、趣向について考えた瞬間に、吹っ切れたんですよ」

「吹っ切れた？」

竜蔵が訝しげな声音を、木佐貫の背中に向けて発する。

同時に、下へとスクロールしていた画面がピタリと止まり、木佐貫もディスプレイから二人へと振り返った。

「ええ、このサイトをダラダラと眺めていれば、サルでも気付きます」

確信が込められた口調と、眼鏡越しの瞳。

「最初こそは、色んな趣味の女子生徒達が写真に収められていました。ですが、それが次第に一人の女子生徒へとUPされる写真の枚数が集中していくのです」

「それって……まさかッ!？」

「そのまさかです。言っただでしょう、桐嶋さんの妹さんが、誰かに狙われていると」

木佐貫の言いたい事に気付いた竜蔵が、驚愕を覚えて目を見開く。確かに彼女は言った、これはあくまで可能性だと……だが犯人、いや、サイトの運営者のUP画像では、他校の生徒も被害にあっていた筈なのに、次第に趣向が固定されていく事や。その収められた写真の数々が、どう考えても人が相手にバレーに撮れる物では無い事。

これらを考えていくに、次第に馬鹿らしい結論にしか到達できなくなってくる。

そう……。

「桐嶋さんの妹さんは、最新鋭機を使った盗撮……または、ストーリーの被害を、現在進行形で受けているのです」



（なんなのよ！ なんなのよ、なんなのよ！！）

焦燥と怒り、更には嫉妬心を身に纏いながら、一人の少女が本校舎の階段を駆け上がったいく。

階段を軽やかに、体重を感じさせないステップと共に上り、疾走していく様は、正に風の如しと称しても過言ではない。

証拠に、先程まで帰宅する途中であったため、再び一階から上り始めたばかりなのだが、既に二十秒と経たずに三階まで駆け上がっていた。

少女の手には、学園の指定校推薦を貰ったと同時に、母から買ってもらったタッチパネル式の携帯電話が握られている……。

そしてふと気がつけば、ものの三十秒と掛からずに、少女は本校舎の階段を四階まで上りきっていた。

だが流石に、このペースには無理があったのか？

肩で息をし、額には少量の汗が浮き出していた。

しかし少女は止まらない。

怒気の籠った、ズンズンという音が聞こえてきそうな歩調で、足を目的地へと進ませていく。

周囲には、既に四階に教室を構えている、他の一学年の姿は見られない。

おそらく、皆、部活か帰宅か、どちらかの徒に着いたのであろう。本来なら、少女自身、既にこの静かな階層には用は無い筈なのだが。

今は、とてもとても、少女にとって重大な事件が、この階層で起きていると、先程友人から連絡があったのだ……それはもう、場合によっては、慈悲すら見せずに殺人を犯さなければならぬ程の、

重大な出来事。

少女が、その女性らしい膨らみを持ちつつも、しなやかかつ華奢な細さが印象的な体から禍々しい殺気を放ちながら、歩を進めていると。

目的地である“教員用のP C ルーム”の前へと辿り着いた。

その扉の前で、一旦少女は乱れていた息を整える……焦っているのは、ベストなコンディションで、泥棒猫を確実に仕留められないかもしれないからだ。

少女の年齢にしては豊かな胸が、膨らんだり縮んだりを三回ほど繰り返すと。いつのまにか、乱れていた呼吸に落ち着きを取り戻されていた。

それを確認すると、少女は、その細く美しい手で、目の前の扉を勢い良く開く。

あまりに勢い良く開いてしまったために、スライド式のドアが、耳に衝撃が来るほどの音を立てながら、縁に衝突した……また、全身を使って開いたために、少女のきめ細かな長い黒髪が、サラサラと揺れ動いていた。

ドアの先に広がっていた光景は、暗幕すら閉じられた、真っ暗なP C ルーム。

そこには、ここまで全力で駆けつけてきた少女……桐嶋美夏が考えていた人物どころか、殺害する予定であったビツ〇も、人っ子一人いない。

どういうこと?——と、美夏が首を捻っていると。突然、彼女が手に持っていた携帯電話がブルブルと小刻みに揺れ始めた。

マナーモードにしてあった携帯電話に、どうやら着信があったようだ。

美夏はそれにすぐ反応し、タッチパネルの操作を手馴れた手つきで進めながら、届いたメールを開き確認した。

そこに、書かれていた内容は——

『いま、部室棟の三階から、アンタのお兄さんと知らない女子生徒が、校門から出て行ったのが見えたけど？ やっぱり、お兄さんって彼女いたの？』

美夏はP Cルームから踵を返し、再び怒涛の追走劇を開始した。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！！（後書き）

プロットはありますので、書き上げること自体は苦ではありません。
ん。

ただ、やはり辻褄が合っているのかが心配です。

執行部のお仕事（3） 聞き込み開始（前書き）

皆さんお待ちせしました。

教育実習から帰ってきたばかりのゲレゲレです。

今回はリハビリがてら、本来ならもう一場面書くところを省略した、短いものとなっております。

次回には、ちゃんと書かなかった場面も入れたのを書くので、ご安心を？

では、どうぞ。

執行部のお仕事（3） 聞き込み開始

「こんにちわ！　こんにちわ！」

部室棟の三階。

その通路で、他の女子達と比べても一際背の高い女子生徒、木下藍が壁際に身を避けながら、女子バスケット部の部室へと向かっている先輩達が目の前を通過する度に、片っ端から頭を下げていた。

これは、藍の他にもいる新一年生達も同様で、部室棟三階の通路は女子バスケット部の新一年生による、一種の花道の様な情景を成していた。

そして再び、一人の女子バスケット部の先輩が、壁際で出迎えるように立っている藍たち新一年生の目の前を横切っていく。

「こんにちわ！」

「こんにちわ！」

「こんにちわ！」

……。

…。

一人の人間が歩を進めるたびに、次の一年生、次の一年生と、順々に頭を下げていくため、その光景はさながらウェーブが巻き起こっている様であった。

それが何度も繰り返され、そろそろ藍も面倒になってきた頃、一人の先輩だと思われる女子生徒が、部室棟の階段から三階の通路へと入ってきた。

本来なら先輩は先輩と、制服の左胸に着いている色着きラインの刺繍で分かるのだが……どうにも藍は、この女子生徒を先輩という

よりも年上だとは思えなかった。
なぜかと、問われれば……。

「あ、あうう……」

部室棟の階段から、開きっぱなしの両開きの扉を潜ったと思えば、一年生の中でも入り口側の最前列に立っている藍の事を見た瞬間に、突然オドオドとした様子でまるで小動物の様に、藍が立っている壁際とは逆側の壁に身を寄せ始めたからだ。

その姿は、まさに天敵に逃げ場を塞がれた小動物のようで……。

（なにやってんだろう、あの先輩……）

と、先程から繰り返し返してきた挨拶を、例外なくかまそうとしていた藍に、訳が分からないといった表情をさせるには十分なものであった。

反対の壁際にへばり付いている先輩の女子生徒は、癖毛の目立つ金色のセミロングの髪を、軽く七三に分けた髪型をしていて、確りと見開かれた吊り眼が特徴的な、活発そうで整った顔立ちをしている。

また、その吊り眼の視力が悪いのか、フレームの無い、ちょっとお洒落な眼鏡を掛けていた。

体格は華奢というより、女性である藍ですら、少し力を入れて抱いたら壊れてしまいそうな……そんなか弱い印象を持たせるもので、身長もそれほど高くは無く、むしろ小さい。

この女子生徒を一言で表すのなら、“妙に保護してあげたくなる娘”と誰しもが思い浮かべるであろう。

それは後輩であり、同性でもある藍も例外ではなかった。

しかし思い浮かべたとしても、相手は絶対の上下関係にある先輩だ。

口に出すなんて、もっての他……。

故に、藍は怯える様に反対の壁際に張り付いている先輩に対して、

これまでと例外なく、完璧な「こんにちわっす!!」——を繰り出したのだが。

「ひい!？」

逆に、更に怯えさせてしまい。

仕舞には元来た階段のほうへと、先輩を逃がしてしまった。

その際、あけっぱなしになっている両開きの扉の縁に、あまりにも怯え・焦りすぎな小動物な先輩が足を引っ掛けたのは言うまでも無い。

ドテンッ!——「いたあ!？」と、体の正面からコンクリートの地面に衝突する小動物な先輩もとい、小動物先輩。

幸い、体の正面とは言っても、顔面からの衝突は避けられたので、かけていた眼鏡の損傷は無かったが、後輩達が立ち並ぶ、この三階の空間で見事なこけっぷりを披露した事は、どうしようもないぐらいに情け無い光景であった。

自身の挨拶で、ここまでの反応が返ってきた事に驚いていた藍であったが、すぐにうつ伏せの体勢で、こけたままの小動物先輩に駆け寄ろうとした……が、

「うう……くそう」

(あ、一人で立てるんだ……)

あまりにも失礼な事だが、ヨロヨロと立ち上がる小動物先輩の後姿を見れば、誰だってそう呟いてしまうであろう。

この場合、呟きそうだったのを、口内で留めた藍を褒めるべきだ。すると、背を向けたまま立ち上がった小動物先輩が一度、自身を落ち着かせるためなのか?

ゆっくりと深呼吸をした後、藍たち後輩が立ち並んでいる方へと改めて振り返った。

振り返った姿は、制服越しでは有るか無いか判断しかねる胸を堂々と張った。

心なしか、どこか誇らしいもので……。

(あ、こっちに来た)

小動物先輩の歩みは、さっきまでの弱気な雰囲気は感じられず、むしろ“先輩だぞ、偉いんだぞ”とばかりに自信に満ちた気迫が感じられた。

そして、再び他の新一年生同様、困惑している長身の女子生徒、木下藍の前を横切ろうと……。

「あ、ああああ……」

「？」

いや、横切れず、後一步の所で“藍の前にすら立てなかった”。見れば、ガクガクと体を震わせている……というより、藍の方に、涙目の視線を向けてきている。

二人の光景は、小動物先輩の背の小ささと、藍の女性にしては、かなり高い身長が相まって。

さながら、“巨人に睨まれた小人”の様な情景をなしていた。

デカイ……そして小さい。

周囲にいる他の新一年生達も、二人の様子を交互に伺っていた。すると……。

「わ、私は……！」

「は、はい？」

突然、震える声音で、小動物先輩が藍に対して、何かを訴えかけてきた。

だが、私はの後に、言葉が続いてくれない……。

強気に出ようとしているのは分かるのだが、どうにも口がパクパクと動いているだけだ。

流石にサバサバした性格な藍も、これには戸惑う以外に無い。

しかし尚も、小動物先輩の勇ましい……いや、傍から見れば微笑ましい威勢は続く。

「わわわわ私は！　せ、せせせ先輩な……なんだぞ！？」

左肩に掛けている、エナメルバックの肩掛けを両手で握り締めながら。

“言っちゃった”と言わんばかりに、涙目の眼を、眼鏡越しで藍

に向ける小動物先輩。

正直、藍は一瞬だけ、この時の小動物先輩の事を可愛いと思ってしまった。

「は、はあ……?」

色んな意味で狼狽しそうな藍に、言ってやった小動物先輩は、絶望的な身長差を前にしても、ようやく震えて動かせなかった足を、自由に動かせるようになっていた。

しかし、動かせたとしても、小刻みに震えている事には変わりはない。

「せ、せせ先輩を、そんなにみ、見下ろすなんて……!」

「見下ろす……ですか?」

「そ、そうだ! し、しし失礼だりよっ!」

精一杯の虚勢を張りつつ、藍の目の前に立った小動物先輩であったが、あまりの緊張のためか、思わず嚙んでしまった。

それに、新一年生全員が、胸中で『あ、いま嚙んだ』と反応する。また、これによって自分が満足する威厳を示せたと思い込んだのか?

ふふん……と、意気揚々に鼻を吹く小動物先輩。

だが、腰は引けたままだ。

ついでに足も震えたままだ。

「いや、見下ろすもなにも……」

「な、なななんだ!? せ、せせ先輩に意見をしゅ、するというのが!?!」

やたら無理をしながら、長身の藍に突っかかってくる小動物先輩であったが――――

「はいはい、後輩が出来て嬉しいのね」

「にゃ!?!」

突然、小動物先輩が後ろから頭頂部を鷲づかみにされてしまった。

大きな手……浅黒い肌ながらも、綺麗な指先は、おそらく女性のもの。

これまで、小動物先輩に視線を落としていた藍が、そこで初めて視線を従来の位置へと戻した。

そこには、高一女子にして175?を越える自身と同じぐらいの高さを持った、ベリーショート的茶髪と少し垂れたアーモンド形の瞳が印象的な、女子バスケット部の先輩が立っていた。

この人は!?――と、藍は目を見開く。

瞬間。

『こ、こんにちわッ!!』

これまで、藍と小動物先輩の二人の様子を静観していた新一年生全員が、一斉に頭を下げた……それは、この大きな女子生徒の立ち居地などお構いなく、通路の奥に立っていた新一年生も例外なくだ。すると、その一斉の挨拶に答えるように、妙に凛々しくも強気な顔立ちをした先輩が、女性にしてはハスキーな声音で口を開いた。

「うい! 初めまして、新一年生ども!」

屈託の無い、心から清々しいと思える笑顔で、新一年生達を歓迎する大きな先輩。

目の前に立たれていた藍も、皆に少しだけ遅れて「こんにちわ」という挨拶をした。

そんな藍に、いまだ小動物先輩の頭を鷲づかみにしたままの先輩が視線を向ける。

「お前が、“あの”木下藍ね……なるほど、こりやあウチの顧問が必死こく訳だ」

下げていた頭を上げ、視線を合わせた藍に、いきなり一人で納得し始める先輩。

「俺は、この女バスのキャプテン、五十嵐真樹^{いがらし まき}! これからよろしくな、スーパールーキー?」

言いながら、五十嵐と名乗った女子バスケット部のキャプテンが、直立の姿勢でいる藍に、その女性にしては大きな右手を差し出した。

握手——古今東西、決して悪い意味には取られない、共通の儀礼の様なもの。

藍は、その差し出された右手を、恐縮といった様子で手に取った……。
すると。

強ッ!? ——

五十嵐の右手を手を取った瞬間、握り返してきた彼女の握力に、思わず藍が胸中で驚きの声を上げる。

決して、わざと強く握られたわけではない……それは、ニコやかに邪気の無い表情を向けてくる、相手の目を見れば分かる事。

それなのに、この握られた右手の骨が、全てくっ付けられてしま
いそうな程の力。

「よ、よろしくお願いします……」

藍は、素直に目の前の五十嵐と、自身のバスケでの実力差を、この握手一つで実感していた。

何がスーパールキーだ……この女性ひとに比べれば、あたしなんて。右手同士でなされた握手を見つめながら、藍がそう考えていると。
「そう緊張するな。俺たちはこれから同じチームで闘うんだから。な？」

言いながら、五十嵐が小動物先輩の頭を驚づかみにしていた左手を離し、そのまま藍の右肩に乗せた。

これまた大きく、それでいて優しい暖かみを持った掌だった。

それに、藍の緊張が不思議と解れてきた……本当に不思議と、だ。
「は、はい!」

藍が力強く返事を返すと、五十嵐が「うん、その活きだ!」と頷いた。

二人の長身な女子生徒が、そうしていると。

「うん？ あれ、竜蔵じゃん」

唐突に、二人の下で小動物先輩が、何かに気付いた様に声を発し始めた。

瞬間……。

「え、うそ！？」

これまで、男勝りな雰囲気だった五十嵐の様子が、一瞬にして様変わりした。

どんな風にと聞かれれば、それは乙女の様にとしか言いようが無い変わりようであった。

「ど、どこだ！？ 御来屋！ 桐嶋君は、どこに居るんだ！？」

既に藍との握手は放され、五十嵐はこの三階通路から外の光景に目を向けていた。

手すりに両手を置きながら、身を乗り出しそうな勢いで外を探す彼女の姿は、さっきまでのイメージからは想像が出来ないものであった。

すると、この状況を作り出した本人、小動物先輩改め、女子バスケ部二年、御来屋鳴子みくりやなるこが、背伸びをしながら手すりに手を添え、三階から見える外の風景の、ある一箇所を指差した。

「ほら、あそこですよ五十嵐先輩」

その指し示された場所とは、ちょうど学園の正門辺り……。

そこに五十嵐と、何事か分からないといった表情をしている藍が、視線を向けた。

（あ、お兄さんじゃん……って、あの隣を歩いてる女性ひとって！？）

瞬間、この部室棟に来る前同様。

彼女の表情が、一瞬にして朱色に染まる。

ここに来る前、一年生の階層である四階の廊下で見た光景と、浮かんできた邪推がフラッシュバックしてきたからだ。

「い、いた！」

しかし、そんな藍を放っておいて、五十嵐は桜や他の建物などが

目立つ校門前を歩いている、竜蔵と冴島の二人を発見する。

「鳴子の言ったとおりでしょ？」

「あ、ああ……だが」

鳴子が首を傾げながら、微笑を浮かべた表情を五十嵐に向ける……。

しかし、とうの五十嵐の表情は、先程とは違って、嬉々としたものではなく、むしろ陰りが掛かって見えていた。

五十嵐が、手を置いていた手すりを、ギュッと掴む。

「隣に歩いている女子は、誰なんだ……」

柔らかい唇を噛み、目を薄っすらと潤ませながら、五十嵐は悔しそうに声を漏らす。

その姿に、またしてもいつの間にか、ブレザーのポケットから自身の携帯電話を取り出していた藍が。これまた気付かぬうちに、携帯電話でメールを打っていた。

というより、なぜ自分は、こういった場面に直面すると携帯電話を取り出すのか？——と、自問自答をしようとするも、どうにも頭が回らない。

むしろ、頭を回そうとする度に、さっきから浮かびっぱなしの、

如何わしい妄想が藍の頭を駆け巡ってしまう。

これが思春期かと、うんざりしそうになるも、どうにも出来ない藍であった……。



「で、とりあえずは、どこから回るんだ？」

「千代女さんからは、既に被害にあっている他校の生徒達を当たるように言われているから。まずは、そちらからだろう」

学園の正門を抜け、既に学園専用のバスの座席に腰を下ろしている二人は、互いに一切の視線を合わせることも無く、事務的な抑揚

の無さで、今後取る行動の確認を行っていた。

二人は共に学園指定の制服姿に、同じく鞆を持っただけの、そこから辺にいる帰宅部と変わらない格好をしているが（冴島は、木刀の入った竹刀袋を膝に寝かせている）……醸し出している、常人とは違った雰囲気は、一目見ただけで只者ではない事を指している。

座っている座席は、バスの一番後ろで窓際に竜蔵、一つ間を空けたところに冴島といった位置関係であった。

「は……面倒だねえ、そりゃ。今日の残りの間に、一区を回ってことだろ？ それ？」

窓の外に視線を向けながら、本当にダルそうな声音を吐く竜蔵。それに、冴島は特に気にした様子も無く。

「明日に持ち込んで、また部活を休むよりかはマシとは思わないのか？ まあ、私には関係の無い話だが」

「そうだな、そう考えれば少しはマシかもしれない……」

昨日今日と、竜蔵は執行部関係の用事で既に二日連続で部活であるラグビー部を休んでいる（支部長を務めている道場の方は、確りとなしている様であった）。

これは新一年生を迎える、この時期にとって重大な損失だといえる。

まず、初っ端の顔合わせや、名前を覚える、交流を軽くでも良いから取って、今後につなげるといった。チームという集団を主とする競技にとって、重要なファーストコンタクトを取りこぼすのは、二年に上がったばかりの先輩としては痛いところなのだ。

更に、竜蔵には気掛かりがあった……。

そう、入学式直後に、色々とあって勧誘した一年生の結果を、まだ見届けていないのだ。

自らが指し示した事だけあって、こればかりは自身の目で、早く確かめなければいけない。

故に、竜蔵は早くこの執行部の仕事を終らせようと、ここで改めて決心をする――――

「しかし、部活の話になるが。あ……冴島さんが、剣道部所属じゃないことには驚いたわ」

窓に視線を向けつつ、相手の呼び方に困りながらも会話を続けようとする竜蔵。

ちなみに、このバス内には、既に二橋の生徒達は竜蔵と冴島以外には、数人しか見受けられない。

PCルームでの話しのお陰で、彼らとはバスに乗車する時間帯がズレたのであろう帰宅部。

だからこそ、この静かな空間に耐えかねた竜蔵は、一つ空けた隣に座っている彼女と会話を続けようとしていたのだが……。

「刀子で良い。部活の件なら、私はただの助っ人として出ただけの事……勝手に勘違いをしているのは、そちらの方だ」

「なら俺も竜蔵で良い。普通、剣道でインハイ優勝したら、誰だって部活に所属してるって思うだろう？」

「それなら、君にだって言える事であろう？ ラグビー部に所属しながら、プロの格闘家として公の場に出ているのだから」

「俺の場合は、学校とは違った所でやってるから違うだろう？」

「私だって、学園とは違う場所で剣術を磨いている」

会話が妙に続いているように感じられるが、実情、二人は全く視線を合わせなければ、声音に抑揚を持たすという事すらしていない……それはもう、某ゲームで伝説的な棒演技を演じた金城○の様に。

しかし、そんな二人とは違って、周囲の数少ない視線からは、色々複雑な感情が送られてくる。

まあ、これも当たり前と言えば当たり前か……。

何故なら、二橋学園に所属していれば、必ずと言って良いほどに全生徒が名前を知っているとされる二人の男女が、一つ席を空けているとはいえ隣同士で座っているのだ。これの異常さが分からないのなら、学園ではもぐりと言われても仕方が無い。

(埒があかないな……話題を変えるか?)

だが、当の本人達は、そんな周囲の視線など構いやしない。

竜蔵が、これから仕事をするということで、コミュニケーションを確り取っておこうと勤しんでいると。

「無駄な会話は止めよう……これから、もしかしたら荒事に遭遇するかもしれないのだ。今のうちから、軽い気構えでも組んでいたほうが、より建設的だ」

冴島が、そんな竜蔵の努力を塵にする様な事を口にし始めた。

すると、竜蔵はそれに異を唱える。

「無駄に構えたって、固くなるだけだぞ？　もっと気楽にいけよ、そっちの方が柔らかくて良い」

「私から見れば、君は樂觀視しすぎだ。確かに脱力とは、全てにおいて必要だが。君の場合、それは脱力ではない。ただの油断だ……今なら、私でも君を倒せる自信があるぞ？」

瞬間、冴島が膝に寝かせていた竹刀袋に手をかけ、竜蔵に視線は向けずに威圧感プレッシャーのみを送り始めた……心なしか、彼女の居住まいや、刀の様に妖艶な瞳が、更に研ぎ澄まされたように感じる。

が、どうの竜蔵と言えば……。

「無理無理。常識を一応は弁えてる人間だったら、こんなところで仕掛けられる筈ないじゃん」

へらへらと笑いながら、窓際の肘掛にかけていた右腕を、無い無いと振る。

しかし、一向に視線は向けないままだ……外の流れる風景だけ、先程から竜蔵は見ている。

「……確かに、そうだな」

言いながら、竜蔵の言葉を聞いた冴島が、固め始めていた闘気と威圧感を収めた。

やはり、本気ではなかった様だ……が。

一つだけ言っておく事があるとでも言うかのように、冴島が言葉を続けた。

「だが、これから君が直面する世界には。今の状況でもお構いなし

に切りかかってくる者もいる……別に流儀を貫くのも良いが、気をつけることだな」

「はいはい、心配してくれて、どうもありがとう御座いますよ」

一応、竜蔵のための忠告として告げたのだが、どうにも彼は不真面目な様で、聞く耳を持つとはしない。

そんな相手の態度に、冴島は“ふん”と鼻で短い溜息を付く。

そろそろ、一つ目の目的地へとバスが到着する頃だ……。

◇

美夏は焦っていた……それはもう、かなり焦っていた。

どれぐらいと聞かれれば、世界一不幸な男が、クリスマスに疎遠になった妻と、何事も無く寄りを戻してしまうぐらいに……いや、少々分かり辛い。

もっと正確に、分かりやすく説明すれば、相手の現在地が分かる携帯機器のアプリで、目的である兄の動向を探ってみた時。

向かっている先に、よく第一区や二区のカップルが利用していると噂のラブなホテルがあるから、焦っていた。

なぜ、そんな情報を美夏のような、兄以外の異性は眼中に無い15歳超絶ブラコン娘が知り得ていたかと言えば……いざという時に、という理由でだ。

そんな時が、いずれは来るのだろうか？

いや、こればかりは神すらも知らぬ……という内容の話だ。

話は少しだけ脱線したが美夏は現在、バスに乗って学園から遠のいていく兄と謎の女を追うために、同じく同じ駅行きのバスに、一本遅れる形で乗車していた。

なぜ、乗っているバスの行き先すらも分かったのか？

それは、先も言ったように、相手の行き先が表示されるアプリを使って、どこの学園専用のバス停で待っていたのかを、目視で判断していたからだ。

つまり、携帯機器のディスプレイに表示された地図に浮かび上がった、兄のアイコンの微妙なズレをヒントに、待っていたバスのバス停を割り出したという事だ。

ちなみに、これは藍から二人が正門を出たと連絡が来た瞬間から行なっていた事で、走りながらの作業になっていたのだが……何事も器用にかつ完璧にこなす、この無駄にハイスペックな妹には、造作も無い事であった様だ。

証拠に、さっきまで走り回っていた筈の彼女は、涼やかな顔をしながら、居住まい良くバスの最後尾の席に座っている……。

しかし、内面は先に説明したとおり、焦りに焦っているために。下手に今、彼女を家族や親しい間柄の人間以外の者が刺激しようものなら、その者には“死”あるのみなのかもしれない。

暫くバスに揺られていると、美夏が手に持っているタッチパネル式の携帯機器の画面に、二つ先の駅で兄のアイコンが、本来のバスの進行方向とは、違う方向に移動し始めたのが確認できた。

降りた――――

そうと分かれば、美夏も兄と同じ駅で降りるだけだ。

すると次第に、沸々と燃え上がるものが、美夏の胸中に芽生え始めた……。

それは何なのか？

いや、聞くまでも無い……邪魔者を殺せ、兄を誑かす売女（ビツ○）を根絶やしにしろ。

今、彼女の胸中を支配しているのは、そんな狂気とも呼べる荒々しい感情だけだ。

◇

今回の事件の鍵とも呼べる人物、または自身の妹に追われている

とは、一切考えてもない竜蔵は現在。

二橋学園から、バスで大体15分程の距離にある、お隣の学校。

東野台大学付属高等学校の近くまで来ていた。

ここは竜蔵達が普段通っている、二橋学園とは違って、大学と高校が一緒になっている学校なので、敷地もそれなりに広い……だがまあ、二橋学園の場合、それ単体で、そんじょそこの大学よりも敷地があるので。東野台大学付属高等学校がいくら高・大と一緒になっている、広さの面積では到底勝ちようも無いのだが……。

周囲は桜の木が咲き乱れる、春特有の風流な情景をなしていた……が。

竜蔵は目の前に広がる、なんとも面倒臭そうな地形にうんざりとした表情をしていた。

「これを登るのね……馬鹿じゃねえの？」

「なにを文句を垂れているのだ？ 急ぐぞ」

桐嶋竜蔵と、その前を進むさへじま刃島刀子の目の前に広がる地形。

それは、正門自体は平地にあるものの、学校自体は山の頂上にあるという、長い坂道を歩く事を約束された面倒臭い光景であった。

確かに山自体は桜の木の色や、他の木々の色が入り乱れて、とても綺麗なものであったが、竜蔵はどうして先程のバスは、ここも登ってくれなかったのかと溜息を吐く。

しかし、今回の事件についての情報収集や、木佐貫きひめき千代女ちよめから言われた陽動を効果的に進めるには、この山を登って、東野台大学付属高等学校へと向かわねばならない。

そう考えた竜蔵は、なんとも気の進まない足取りであったが、ゆっくりと先に立っている刃島のもとへと、坂道を上りながら近づいていった。

長い坂道を歩き続けて数十分、二人はようやく東野台の校舎を目の前にしていた。

来る途中、幾度と無く、東野台の高校生や大学生の男から、他校の制服を着ている冴島にアプローチがかけられていたが、それは隣を歩いていた竜蔵の存在によって、これまた幾度と無く消沈していた。

だが別に、竜蔵はただ彼女の隣を歩きながら、東野台の山一つを学校の敷地として使用している、珍しい立地条件のもと建てられている施設の数々に視線を向けていただけで、別段、来る男に対してはシカトしていただけたのだが……。

どうやら、その制服越しからでも確認できる肉体の造形や、隠そうにも隠し切れない眼力が、勝手に近づいてきた男を退けていた様だ。

「で、これからどうするんだ？」

「まずは君の妹さんと同じ被害者である、ここの学校の生徒を探す。それもあるべく目立つ様にだ」

しかし、二人にとって、これまでの坂道での行程など気に触るものでもなかったようで、既に当初の目的へと意識を向けていた。

東野台大学付属高等学校の校舎は、少し歴史の感じられる煉瓦調の作りながらも、様々な修繕や改装が行なわれていたためか、どこか独特な現代感を醸し出す、少し独創的な建物で、初めて見る者にとっては、だいぶ不思議がられる造形をしていた。

また校舎を取り囲む敷地も、様々な植物や木々が確りと手入れをされた状態で並んでいて、アスファルトのような単調な色に緑の飾り付けをしている。

そして現在の時刻が、各部活動の活動時間であったため、校舎内や敷地、または竜蔵と冴島の後ろや横を、東野台の生徒達が忙しく走ったり歩いたり動き回っていた。

「目立つ様にね……なんか具体的な指示とかは無いのか？」

「こういった事は自分で考えることだ」

「だとすると、ワザと人に聞き込みまくるとか？」

「それも一つの手だろうな。ここの生徒達に私達が被害者の女子生

徒を探し回っているという情報が流れれば、おのずと犯人の方へと、その情報が流れるかもしれないからな」

「はあ……時間が掛かりそうだな、それ」

自らが思いついた、誰でも考え付きそうな案であったが、竜蔵は今日何度目か分からない、面倒臭そうな溜息を盛大についた。

こうしている間に、今も妹を狙った盗撮写真がネット上に公開されてしまっているかもしれない。

そういった無意識の焦りが、竜蔵に時間を気にさせていた。

「仕方ないだろう、もともと私達がすべき事は、今も学園で犯人の妨害や割り出しをしている木佐貫先輩の時間稼ぎなのだから。機械に疎い私達が、とやかく言える事ではない」

「まあ分かっちゃいるけどな……だけど待てな？　いくら俺が機械に疎いといっても、“お前程ではない”からな？」

「ッ!？」

お前とは違う……それを妙に強調して発した、冴島の隣に立っている竜蔵の言葉に、彼女は無言で顔を真っ赤にさせてしまう。

その様子は、普段の凜々しい彼女からは考えられない面白いものであったが、竜蔵は眼すら向けぬまま、歩を東野台の校舎へと進め始めてしまう。

だが、そんな竜蔵の背中に、顔を真っ赤にさせたままの冴島が、異議ありとばかりに口を開いた。

「べ、別にあれは仕方が無いだろう!!　今まで、ああいった物には関わりが無かったのだから!!」

そんな彼女の異議の主張に、竜蔵は特に気にした様子も無く……。「それでも“わ、私が触ったら壊れやしないか!?”なんて、真顔で聞く奴なんて、さっきまでいないと思ってたよ……マジで」

「ッ!？」

振り向きもせずに竜蔵から発せられた、さっきバス内で起きた出来事に、冴島は再び黙りこくってしまう……。

実は先程、この地域へと来る途中のバス内で、竜蔵が暇だからと

冴島にスマートフォンアプリをやらせようとした一コマがあったのだ。

そこで、もともと携帯電話“すら”持っていなかった冴島は、突然目の前に現れた最新機器に戸惑ってしまい――

『こ、この機械は何なのだ？』

『うん？ いや、スマホだけど？ 知らないのか？』

『いや……私は、こういった物には疎いのだ』

『ふーん。じゃあ、教えてやるから、ほれ』

『……な、なんだ？』

『これ使って軽いゲームするから、ほら、もてよ』

『い、いや……私はいい』

『なんでだよ？ 目的の場所まで、まだ時間かかるんだし暇だろ？』

『だ、だが……』

『物は試しだろ？ ほれ、やってみろよ』

『お、おおおい！！ 何を勝手に！？』

『そんな驚く事でもないだろ？ ちゃんと教えてやるから、落ち着

いて画面を見ろよ』

『だ、大丈夫なのか！？ し、知らないぞ！ わ、私が触ったら壊

れやしないか！？』

『……』

――という、現代人なら誰もが絶句しそうな一幕が、行きのバス内で起こっていたのだ。

この21世紀の現代社会で、花の高校二年生である女子生徒が、携帯電話すら持っていない事にも驚きだが、ここまで機械に対して疎い、もしくは恐怖心を抱いているのは、もはや天然記念物ものだと言えるのではないだろうか？

よく今日まで、そういった通信手段も無しに、都市の裏で動かなくてはならない執行部で活動が続けてきたなど、竜蔵は彼女の前を

歩きながら考える。

おそらく同じ学校で、しかも昔ながらに付き合いがありそうな木佐貫千代女や二橋姫樹が、かなりサポートをしていたのだろうと、竜蔵はすぐに考えに当たりを付けた。

だが、今回ばかりは、そういった甘えを出してもらっては困る。なぜなら、被害者の一人というより、すでに主な被害者に自身の妹がリストアップされているからだ。

そういった状況で、犯人もしくは有益な情報源が見つかり、もし二手に分かれる必要性が出てきてしまった場合、連絡に遅れが出るのは致命的な損失に繋がってしまう。

端的に言えば、妹に更なる危害が加えられてしまうかもしれない……。

これは後で、後ろでいまだ恥ずかしそうに、悔しそうに立ち止まっている彼女に、携帯電話の一つぐらい持たせないと拙いなど。

この時、危機感を覚えた竜蔵は考えていた……。

執行部のお仕事（4） 必然の遭遇、そして追走（前書き）

急いで書いたもので、チェックはしてません。

執行部のお仕事（４） 必然の遭遇、そして追走

東野台大学付属高等学校の敷地内で、竜蔵と刀子の二人は“なるべく目立ちながら聞き込みをしなくてはならない”。

なぜか？

それは犯人に対して現在、インターネット以外でのアプローチをかけ、敵は電子網の中ではなく現実の世界で動き回っていると認識させるためだ。

これが上手くいけば、二人とは違って学園の方でネットの世界を見張っている木佐貫が動きやすくなるし、同時に犯人の居場所も特定できる可能性が出てくるからだ。

実際には、相手がまだ複数なのか個人なのか特定できていないため、非常に賭けの部分が強くなるのだが、木佐貫自身が個人の可能性が高いとしているために、この方法を取っている。

だがそもそも、“なるべく目立ちながらの聞き込み”とは、ただ手当たり次第に聞き込みまくる以外にないのではないかと考え始めた竜蔵は……。

聞き込み開始から丁度20分後。

『うちの女子にちょっとかい出しておいて、その態度なんなんだよ！』

『やめて翔くん！！ やめようよ！！』

『菜子は下がっててくれ！ 俺がコイツと話つけるから……』

「あゝ……メンドクせゝ」

「……はあ」

もういっそ別の方法で目立とうかと、当初の目的から挫折しようとしていた……。

場所はテニス部が練習していた、柵で囲われているテニスコートのすぐ横。

周りには、何事だと見に来たテニス部や、他の部活動の者達が野次馬として集まり始めていた。

そして、そんな人だからが出来た場所の中心で、竜蔵と刀子の目の前には何やら、いかにも高校生といった、眼にかかりそうなのに伸ばされた無造作な黒髪に、中肉中背の体格が特徴とも言えないが特徴的な男が、背に一人の小柄な女子生徒を庇いながら憤慨していた。

『おい聞いてんのか！？ お前に言っただよお前に！！』

『翔くん！』

特徴のない男が、面倒臭そうに後頭部をポリポリと掻いている竜蔵に向けて指をさす……背に庇われている小柄な女子生徒は、そんな竜蔵の態度を横目で見つつも、憤慨する男の袖を必死に引っ張り続けている。

ホントにどうしてこうなったと、この状況を第三者の立場として客観的に見ていた刀子は、本気で頭を抱えなくなる思いであった。

「どうしてくれるのだ、こんな面倒ごとを……」

「どうするもなにも、ただ“写真を見せて”、身に覚えがないか聞いただけじゃん」

言いながら竜蔵は先程、学園でPC相手に奮闘している木佐貫から送られてきたばかりの、東野台の生徒の写真が映し出された盗撮画像を、右手に持っていたスマートフォンで困ったように確認していた。

そう、原因はこれなのだ……。

「普通、いきなり自分にとって身に覚えのない写真を見せられれば、誰だって混乱をするだろうし、親しい間柄の者なら激昂するかもしれないと考えられないのか？」

咎めるような視線を困った様子の竜蔵に向けながら、刀子は両腕を胸の下で組む。

そのポーズは普段なら竜蔵ですら眼を釘付けにしまいそうな、妖艶な雰囲気漂うものであったが、生憎と、今の竜蔵には、そんな余裕はない……釣れたといえ、周囲を囲い始めた東野台の生徒達と、目の前の騒いでいる男女二人だけだ。

ただだと言っても、この場に居る竜蔵以外の全てを釘付けにしていた訳だが。

「いや、だから最初に前置きしておいたじゃん。“ちょっとゴメンね、今ある問題について色んな人に聞き回ってるんだけど” って……何がダメだったんだ？」

自らの左斜め前で、なぜ上手くいかなかったと頭を悩ます竜蔵に、刀子は再び「はぁ」という溜息を吐いた……腕を組みながら、男に對して呆れた表情をする彼女は、それだけでも絵になるものであった。

「その後、何の説明もなしに写真を見せたのが、いけなかったのではないか？」

「説明か……そうだな、確かにいきなり見せられれば、驚くどころか俺を疑うもんな。失敗した」

『おい！ なに勝手に話し進めてんだよ！！ こっちに眼だけでも向けるよ！！』

二人して、この舗装された道があるものの自然の木々に囲まれた、山の中に作られたテニスコートの横で起きている人だかりや騒ぎなど関係ないかの様に、反省会の様なものを開いている雰囲気。先程から竜蔵に對して怒りを示している男が、更に激昂し始めた。

当然だ。

おそらくは親しい間柄の、後ろに庇っている小柄な女子生徒のために怒っているのに、全く持って張本人二人に無視されているのだから。

故に、男はついに竜蔵の前へと怒気の籠った歩みで近づいてきてしまった。

小柄な女子生徒は、必死に彼のことを引っ張るも、力が足り無い

のか、ズルズルと引き摺られてしまっている……。

そうして、彼が竜蔵の前に立てば、二人の体格差が如実に確認できるようになっていた。

「なんだよ？ 別にちょっかいを出したわけじゃねえんだから良いだろう？」

『うッ……！？』

これまで怒りに任せた勢いで、色々と竜蔵に対して言っていた男であつたが、目の前に立った瞬間、相手と自分の体格差や戦力差に、思わず身動きしてしまふ。

中肉中背の男は、竜蔵より大体3？ほど背が高いのだが……その胸板や、腕の太さ、首の太さ、果ては妙に強く威圧感を放ってくる竜蔵の眼力に、圧倒的に自身の実力が劣っている事を一瞬で悟ってしまったのだ。

見れば、目の前の男の拳は、そこら辺の一般人とは違う、ゴツゴツとしながらも丸みを帯びたもので、非常に硬い、鈍器の様な印象を持たせていた。

だが、男は引けない……引くつもりはない。

なぜなら後ろに庇っている小柄な異性は、自分が小さな頃から恋焦がれてきた、近所の幼馴染だからだ。

“才能の区画”と呼ばれる第一区内にある学校に通うと彼女が言ってきた時は、必死に特技であつたテニスを練習し、中学の関東大会で優勝して、自身も第一区内の学校に入学できるように結果を残したぐらいなのだ……それはもう、彼女に対する思いは相当なものである。

そんな強い恋心を持った男は、目の前の漢おとしを見ながら考える。

もし、目の前の漢が、後ろで袖を引っ張っている彼女に危害を加えようとしていたのなら？

考えられる……なぜなら先程、彼女だって身に覚えの無い写真を持っていたのだから。

重度のストーカーかもしれない。

そうなった場合、後ろに庇っている何の抵抗手段もない彼女は、容易く目の前の漢に連れ去られ。その清く真っ白な柔肌を、強引に男の劣情を持って汚されてしまうであろう。

おそらく、これは相手のすぐ後ろに控えている、美人で常識人っぽい女性は止めやしない……なぜなら、どうみても目の前の男と同じような鋭い空気を身に纏っているからだ。

どう考えても、同じ種類の人間であろう。

これはやはり、小柄な幼馴染を守るのは自らしか居ないのではないか？

その考えに一瞬のうちに至ってしまった男は、ついに目の前の漢……竜蔵に対して、戦力差を顧みない行動に出てしまう。

男が取った行動……それは、竜蔵の襟首を取る行為。

つまり胸倉を掴んだのだ……。

が、それはすぐに無意味となってしまう。

何故なら竜蔵が、胸倉を掴んできていた男の右手の手首を、思いっきり左手で握り返していたからだ。

いつの間に……そういった疑問が浮かぶ前に、男の右手首に集中していた筋組織が圧迫され、血流が止まり、胸倉を掴んでいた右手が開かれてしまった。

『あ、ああああ……ッ!？』

声にならない呻き声……下手をすれば、手首に集中している細かい骨が、全て砕かれてしまうのではないかと感じてしまう程の握力。胸倉から手を放してしまった男は、あまりの痛みに膝を曲げ、苦痛に歪んだ表情のまま、地面に両膝をつけてしまう。

まるで右手の手首から先が無くなったと錯覚を起こしそうな痛み……。

しかしそれは、これまで庇っていた守るべき人によって、解放させられた。

『止めてください!! お願いします、翔くんを虐めないで!! 私なら、何だって言う事を聞きますから!!』

突然、痛みに膝を屈してしまった男の耳に入ってきた、聞き慣れた異性の悲痛な叫び。

顔を上げてみれば、守るべき人だった彼女が、目の前の屈強な他校の男に飛びつき、必死に自分を解放しよう懇願しているではないか……。

その様子に、他校の男は困った様な表情をしながら、こちらの右手首を握り潰そうとしていた左手を放してくれた。

途端に解放された男は、そのまま地面へと右手首を押さえながら頭を垂れてしまう。

『ああ！ 翔くん!!!』

自身の懇願が通った事もあったが、何よりも大切な人が解放された事によって、涙目の笑顔を浮かべながら、地面に頭を垂れてしまっている男へと向き直る小柄な彼女。

そんな様子に、当の竜蔵はと言うと……。

（あ、あれ……俺、別に悪い事してないよね？）

どう考えても、自身が悪者なこの状況に、訳が分からないと額に汗を浮かべていた。

しかし、いくら竜蔵が困り、焦っていたとしても事態は急速に進んでいく。

地面に右手首を押さえながら跪いている男を、身を挺して守る様に、小柄な女子生徒が、こちらに涙目の視線を向けた。

『あ、あの……翔くんを放してくれて、ありがとうございます』

「あ、ああ……（いや、別にすぐ放すつもりだったし）」

小柄な女性に涙目で見上げられ、困惑する竜蔵。

だがやはり、困惑する本人を放っておいて、女子生徒は話を進めてしまう……。

『……では、お約束通り、私を好きにしてください。翔くんには、もう何もしないで下さい』

消え入りそうな声で、搾り出されたその決意に満ちた感情は、彼女の本気を示していた……が、そんな事をされても、竜蔵自身にも

とからその気は無い。

だが、もう一度言おう……事態は本人を放っておいて、更に進んでいってしまう。

『な、菜子!?!』

頭を垂れ、跪いていた男が顔を上げる。

『大丈夫だよ、翔くんは私が守るから……恐くないから』

「あ、いや、別に俺は……」

なにやら悲壮感漂う雰囲気になってきた二人に、手を差し伸べようと竜蔵が近づくと。

『菜子に近づくな!!!』

突然、地面に跪いていた男が、目の前に立っていた彼女を押しつけ、反り上がる様にして竜蔵へと、その手首を痛めた右手の拳を突き出そうと――――

ガシャッ!!!――――「あ」――――は出来ず。

立ち上がりながら、こちらを殴ろうとしていたため、無防備にも晒されていた男の顎に向けて、竜蔵が“無意識”とも呼べる反応で、右の膝を合わせてしまったのだ。

ちなみに、男が突き出した右拳は、右膝を突き上げるため背筋を反っていた竜蔵には届かなかった。

基本に忠実な技は、攻防一体の形を生み出す……。

まさに竜蔵は、ここで無駄な技術を発揮してしまったのだ。

いくら無意識とはいえ、プロの右膝……それもカウンターで貫つてしまった男は、再び地面へと倒れこむ。

一瞬蹴り上げられた事で、頭を鞭打ちの様に弾かせながらも、直立の姿勢で、額から弾力性のある特殊なゴムの素材を使った地面に倒れた男は、先程とは違って、呻き声すら上げずに、意識も地面へと沈めていった。

『翔くん!?!』

その見事なまでのカウンターもそうだが、他校の生徒が、自分達の学校の生徒を伸した光景に、周りがどよめき立つ……。

これは拙いと感じた、これまで静観を決め込んでいた刀子が、まづったなと困惑していた竜蔵の肩を後ろから掴む。

それに振り返る竜蔵であったが、刀子はすぐに口を開いた。

「急いでここから出るぞ、面倒ごとになる前に！」

「ちッ！ 分かったよ！」

瞬間、二人は驚きの切り替えの早さで、この他校の生徒達が囲いを作っていた場所から抜け出し、東野台大学付属高等学校から脱出したのであった。



東野台のバス停へと到着した美夏が、まずは確認した事……。

それは当然、自身の兄が現在、どの辺をうろついているのかと持っていた携帯機器でGPSを確認する事だった。

位置的には山一つを学校の敷地としている、東野台大学付属高等学校にアイコンが表示されているのだが、どうやら走る様な速度で移動中らしい。

進行方向は、山から下りて、東野台大学付属高等学校の正門に向かっていている様だ。

これはもしかしたら、そこで張っていた方が賢明かもしれない。

そう考えた美夏は、すぐさま件の場所へと向かったのだが……。

(まづったわね……)

早速、問題にぶち当たっていた。

美夏の目の前には、東野台大学付属高等学校の平地に設置された正門があるのだが、それは既に正門の直ぐ横にある控え室にいる、警備員の手によって閉じられた後だったのだ。

おそらく、あの控え室には正門を自動的に閉じれる装置でもあるのだろう……でなければ、あんなに重そうなスライド式の門を、控え室にいるオッサン一人で閉じられるはずがない。

そんな事を、美夏は東野台大学付属高等学校の正門近くにある、不動産屋の建物の物陰で考えていた。

周囲には人通りがあまり無く、美夏の現在とっている、スパイ映画よろしくの壁に背を預けた格好も、誰の眼にも止められていない。もし人の通りが多い場であつたのなら、美夏という類稀な優美さを持っている女子高生は、こんな落ち着いたというより、変な行動は取っていない。

（あの門が閉められてるって事は、お兄ちゃん是他の出口から出てくる事になる……そうになったら、また追いかけるのに時間が掛っちゃう）

美夏はそこで、周辺に何か無いかと視線を巡らせ始める……。

店主が寝ている不動産屋の物陰の向こう側には、まだ開店時間には早い焼肉屋の閉じられたシャッターが目につき、隣にはパン屋だとかの飲食店が軒を連ねている。

そして視線を右上に移してみると、そこには東野台商店街と書かれた、入り口である大きな門が建っていた。

そう、ここは東野台大学付属高等学校の生徒達や、大学の学生たちが専門の研修やゼミの研究として開いている学生商店街なのだ。

しかし現在は、まだ飲食店の開店が見られていない……おそらく、店を開いている生徒や学生たちが、まだ到着していないのであろう。故に今、この商店街で開店している店といえば、美夏が物陰として利用している、不動産屋ぐらいのものであった。

だが、そんな事など美夏の知った事ではない。

美夏は再び、視線を東野台大学付属高等学校の正門へと、壁際から覗き見る様にして移した。

（だけど、どうしよう……GPS的に見れば、お兄ちゃんはおそらく、あの正門へと向かっている筈なんだけど。閉まっているのを見

たら、絶対に別の出入り口を探すだろうし……そうになると、山一つが敷地の、この学校の外周をグルグルと張りながら、お兄ちゃんの出現を待つしかなくなる。でも、それは無理ね。中から出てくるの人間を、ほとんど円に近い外周から張り続けるなんて、体力的にも難しいから)

閉じきられた東野台大学付属高等学校の正門を壁際から覗き見つつも、体育会系の気合理論を放棄する美夏……。

なら、どうすれば？

そう考えた美夏は、おもむろにGPSのアプリを起動している、自身のスマートフォンに目を向けた。

見れば、いまだ兄は正門の方へと山下りの最中だ。

あと大体、2分もしない内に正門の向こう側から現れるのでは無いかと思えるぐらいのGPSのアイコンの移動速度。

(ならどうする？ もう時間は無いし、きつとすぐにお兄ちゃんは私の前に現れる……あれ？)

その時、美夏は根本的な事に気がついた。

(……だったら、私が姿を見せれば良いじゃない！ そうすれば、お兄ちゃんは何で私が、こんな所にいるのか気になって止まってくれる筈！ 何を難しく考えてたんだろう……)

天啓を得たとばかりに、瞳を輝かせた後、再び閉じられた正門を壁際から覗き込む美夏。

なんで今まで、そんな簡単な事に気付けなかったのかと、不思議に感じつつも、自身の兄が閉じられた正門の向こう側から来るのが待ち遠しい彼女は。今にも、隠れている不動産屋の物陰から飛び出しそうな雰囲気醸し出していた。

だが、まだだ……右手に持っているスマートフォンのGPSアプリによれば、あと1分くらいで兄は山を下ってくる筈。

ここは落ち着いて、いかにも急いで追ってきたのではなく、たまに鉢合わせた感じを演出しなければならぬ。

故に美夏は、すぐさま地面に置いていた鞆から手鏡を取り出すと、

髪やらなんやらの乱れが無いかチェックし始めた。

当然、普段から清潔かつ完璧な外見を心がけている彼女に、乱れなど存在せず、すぐさま取り出された手鏡は鞆へと仕舞われてしまう。

あと30秒……そろそろ、この物陰から出て、門の向こう側から現れる兄の迎える準備をする頃合だ。

タイミングを逃さないと、普段から注意している彼女は、地面に置いていた鞆を左肩に掛けると、何食わぬ顔で、これまで隠れていた不動産屋の物陰から出てきた。

それはもう、自然かつ優雅な足取りで、たまたま歩いていただけと言いつ訳が出来るほどの何喰わなさど堂々とした空気が漂っていた。

あと10秒……。

あと5秒……。

そして、その時は来た――――

◇

速い……というレベルでは無いのかもしれない。

東野台大学付属高等学校の敷地内である、アスファルトで舗装された山道を下る刀子は、前を先導して走る男の背中を眺めながら、そんな事を考えていた。

力強い肉体の躍動、歩幅もさる事ながら、脚の回転数が並みではないのも、後ろから確認できる。

坂道の下りで、これ程までにバランスよく走れるのもそうだが、やはりそんな事よりも、この50mを5秒台で走りそうな勢いを、いつさい落すことなく先程から走り続けている事に驚きを受けるべきであろう。

中距離走が得意……そんな言葉だけでは納得が出来ない、目の前の男の走りは、それだけすぐ後ろを走っている刀子を驚かせるものであった。

だが、これに汗一つ、息一つ乱さずに付いて来ている刀子自身も、大概なものなのだが……。

「もうすぐ正門だろ!？」

「ああ、おそらく既に正門は閉じられているだろうが、今から他の出口を探すのは得策ではない。一気に飛び越えるぞ!!」

先導をする竜蔵は、坂道の緩やかなカーブを、内側から切り込みながら下っていく。

また、それに後ろから刀子が、長く艶やかな黒髪を揺らしながら、軽やかに付いて行く。

カーブが来ればインコースを攻め、直線なら一気に走りきる……先程から、周りを山の自然と人工の建造物で囲まれた東野台の敷地内を、こうやって二人は駆け抜けている。

荷物である鞆や、刀子に至っては袋に入れた木刀の重みなど、全く意に介していない走り。

「正門が閉じられてるって、どうして分かるんだ!？」

竜蔵は後ろを振り返らず、ただ大きな声で刀子に問いかける。

「問題が起これば、それを起こした張本人を、みすみす逃がすと思うか？」

その問いかけに、全く持って涼しい顔で答える刀子。

一般人なら、殆ど全力疾走と変わらないペースであるのに、彼女の声音に息遣いに、一切の乱れは見られない。

「あゝそうだよ! 俺のせいだよ! 仕方ないだろ、ほとんど反射みたいなものなんだから!!」

静かに、そして冷静に答えを返してきた刀子に、竜蔵は吹っ切れた様子で意識を正面へと向きなおした。

既に、目の前には正門までの直線道となる、平地の道が確認できる。

というより、確認した瞬間に、竜蔵はその平地へと足を踏み入れ、そして下りと変わらない速度で走り続けた……が。

「……うん?」

傾斜の無い平地のアスファルトへと、走るステージが変わった竜蔵の視線の先には、確かに今さっき刀子に言われた、閉じられた正門があった。

しかし、竜蔵が思わず眉間に皺を寄せてしまうほど、不思議な光景と感じてしまったものは、そこではない……。

それは正門の向こう側……東野台大学付属高等学校の敷地外。

そこに、一人の見知った人物が、春の風に自慢の黒髪を揺らしながら、何食わぬ顔で立っていた。

「おい！ あれはどういう事だ！？」

走り続ける竜蔵と同じく、平地へと入ってきた刀子が、声を荒げる。

「知らん！ とにかく逃げるんだろ、今は！！」

だが竜蔵は、刀子の質問に答える事もせず、少々スライド式のものにしては背の高い正門へと、更に走る速度を上げる。

大体、竜蔵自体、なぜ正門の向こう側に、彼女がいるのか皆目見当もつかない。

故に、竜蔵は刀子の質問には答えたくても答えられない。

すると、正門の向こう側にいる人物も、こちらに気付いたのか……どこか、とても嬉しそうな表情で、竜蔵に向けて手を振り始めた。

「あれ？ お兄ちゃん！！　なんで、こんな所にいるの～！」

とても嬉しそうな表情で、竜蔵に手を振るのは、妹の美夏……。

まさに件の人物として、今回の事件では重要人物なのではあるが……。

なぜ、彼女が“ここにいるのか”？

そんな妹の問いには、こちらが聞きたいと返したいところだが、今の竜蔵と刀子には、そんな余裕は無い。

走る速度を上げた事によって、重厚かつ堅牢な東野台の正門が一気に近くなる。

すると、ここで正門の横に建てられていた控え室で待機していた警備員が気付いたのか、イソイソと焦った様子で、四畳程度しかな

い建物から出てきた。

『こらー！！　その二人、止まりなさい！！』

なにやら伸縮可能な警棒を手に持ちながら、警備員の控え室から出てきた、制服を身に纏った中年の男性であったが、走り続ける二人は、その男性の言葉に聞く耳を持つとはしない。

むしろ、これから起こす行動のために、走るギアを更に一段階上げていた。

そして、まずは竜蔵が、正門の前に立ちただかろうとする警備員よりも先に――

「ふっ！！」　「ガン！！」――

重厚な正門へと飛び上がり、一度門の頂上付近に飛びついた後、背中と腕の筋肉を利用して身を門の向こう側へと一瞬で乗り出し、訳もなく東野台の敷地内から飛び出していった。

その流れるような壁越え、もとい門越えは、どこか猫の様な印象を持たせていたが……着地時の衝撃を消すために、両足で地に付いた後、膝のクッションを上手く使う姿は、やはり技術を持った人間の動きであった。

門を難無く越えた竜蔵は、すぐさま後ろへと振り返る。

「刀子！　早くしろ！！」

「分かっている！」

竜蔵の急かす声に、刀子はすぐに答えるが、既に警備員の男性が、正門の前に陣取ってしまった。

『一人は逃がしたが、君は残ってもらおうよ！！』

警棒を右手に持ちながら、通せんぼの格好をする警備員の男性……。

しかし、それでも尚、刀子に焦りの表情も、驚きの表情も浮かぶ気配が無い……むしろ、走る速度を緩めずに突っ込んできている。

そして、警備員と刀子の間合いが、あと二歩半程度まで詰まった

とき。

刀子が“飛んだ”――――

『は?』

あまりの行動に、呆けた声を出してしまった警備員の男性であったが、刀子の跳躍は、たとえば学校指定の鞆と、愛用の木刀を持っていたとしても、重みを感じさせない、優美なもので……。

長くも艶やかな黒髪を風に揺らし、制服のスカートも気にせず、空へと飛び上がった姿に、警備員の男性は見惚れ――――『……白グシャ!!』

見惚れ、上を見上げてしまった事によって、見てはいけないものを見てしまった警備員の男性は、丁度真上に差し掛かった刀子の“踏み台”にされ、意識を混沌へと沈めていった……しかし、地に倒れ崩れる彼の表情は、年甲斐にも無く頬を染めた、幸せそうなものであった。

警備員の男性の顔面を、履いているローファーで踏み台にした刀子は、荒々しかった竜蔵の正門越えとは違って、全く門へと触れる音すら発せず、軽やかに、そして優雅に門の向こう側へと着地をした。

着地する時でさえ、荷物が弾む音以外しないのだから、かなりの身のこなしだと、刀子の門越えの一部始終を眺めていた竜蔵は感じた。

着地の際の衝撃を消すために、膝を曲げながら身を屈めていた刀子が、乱れた髪や荷物の位置を直しながら、ゆっくりと立ち上がった……。

「すごいな……けど、酷くないか?」

「うるさい!! さっさと次に行くのであろう!!」

随分と余裕そうに門を越えた刀子であったが、やはり花も恥らう年頃の女。

不可抗力とは言え、下着を見られてしまった事が恥ずかしかったのか、頬を朱色に染めていた。

すると、そんな門越えを果たしたばかりの二人に、何やら信じられないといった表情の美夏が歩み寄ってきた。

「お、お兄ちゃん？ その女は誰……？」

わなわなと、刀子にさす指を揺らしながら、震える声音で兄に尋ねる美夏……。

彼女自身、最初は知らない女と一緒に歩いているという兄の目撃情報を聞きつけて、これまで追ってきていたのだが……まず、それが事実であった事。

更には先程、その知らない女の“下の名前と思われる呼び名を兄が発していた事”に、超絶ブラコン娘である彼女の認識許容量は限界を迎えそうな状態だった。

すると、美夏の震えている問いかけに、これまで刀子に視線を向けていた竜蔵が振り返った。

「あ……それはな……なんというか」

美夏という、今回の重要人物であり自身の妹でもある存在に、竜蔵はどうやって、後ろに未だ頬を染めながら立っている刀子を紹介しようか、頭の中で思考を張り巡らせ始めた。

普通に説明をするか？

いや、それだと東野台からの警備員やら教職員やらの追っ手が来てしまう……そんな時間は無い。

なら美夏も連れて、ここから逃げるか？

いや、それも今行なっている事を考えると、拙い気がする。

だったら、いっそのこと執行部の存在を伝えて、どうしてここにいるか分からない美夏に帰るよう、強く言うべきか？

ダメだ……これに至っては、規約事項とやらに反してしまい、俺が会長の“物”になってしまう。

どう頭の中で思考を繰り返しても、もともと頭を使うよりも体を動かす事の方が得意な竜蔵には、これといった名案が浮かんでこな

い。

しかし、ここで竜蔵でもない、美夏でもない人物が、突然動きを見せた。

「何をしている！ 立ち止まっている時間は無いのだぞ！！」

「は？」

「え？」

この気まずいというより、どうしていいのやら分からない状況を打破したのは、先程まで下着を見られてしまった事によって頬を染めていた、冴島刀子であった。

彼女は、今回の事件の重要人物である美夏を放っておき、先に問題を起こしてしまった東野台大学付属高等学校から離れる事を選択したのだ。

故に、彼女は既に、東野台商店街の直線道路を、軽やかかつ、しなやかな走りで駆け抜けている。

「あ、待てよ！！！」

刀子の声に少し遅れて、竜蔵も再び脚を動かし、回転数の速い力強い走りを見せ始めた。

「え？ あ、ちょっと！！ お兄ちゃん！？」

美夏は二人の……というより、自身の最愛の兄が、こちらを放っておいて、他の女へと向かっていく姿が信じられなかったのか？

反応が若干遅れ、二人の逃走を見送る形となってしまった。

すると、前を走り出したばかりの兄が、美夏へと動きは止めずに振り返り……。

「事情は後で説明するから！！ とりあえず、お前は早く家に帰れ！！ 分かったな！？」

それだけ言って、前を先導する刀子と共に、何がなんだか分からないといった表情の美夏から、遠ざかっていってしまった……。

暫く、状況の整理のために冷静になろうとした美夏であったが。

（なに？ 今の……てか、あの女？）

頭を整理しようと、落ち着かせようとすればする程。

少し見ただけで、美夏でも綺麗な女性だと認めてしまう人物に対して、黒い感情が沸々と煮えたぎり始めてしまう……。

（お兄ちゃんに命令？ てか、明らかに下の名前で呼ばれてたよね？ なに？ なになに何なの？）

浮かんでくるのは、嫉妬心か、それとも殺意か……？

（生意気っていうか、許せないっていうか……お兄ちゃんに色目を使う売女（ビツ〇）は、もういなくなったと思ってたけど。やっぱり、湧き出てくるんだね……）

前は“鬼姫”おにひめとかいう女だったが、あれはもう違う学区の学校に通ってるから、心配無いと思っていた……。

（これはもう、私以外の女は危険分子だと思っていいのかな？ うん……今は、そんな、その他大勢じゃなくて、目先の糞女をどうすべきかだね）

既に、美夏の綺麗だった瞳には、他者が見れば引きずり込まれてしまいそうな深淵しか写っていない。

何を考えているのか分からない……いや、何をしでかすか分からないといった黒い雰囲気醸し出す美夏であったが。そんな姿すら彼女の蠱惑的な容姿により、他者が見れば見惚れてしまいそうな、神秘的な魅力を放っていた。

すると、すでに視界から消えてしまっていた兄達を追うために、美夏が制服のポケットに仕舞っていたスマートフォンを右手で取り出した。

そして、例に漏れずGPSのアプリを起動させ、兄がどこに逃げたのかを探り始めた。

地図上に表示されたアイコンが、東野台の商店街を既に抜けてしまっている事を告げていた。

なら、もうゆっくりと立ち止まっている暇は無い……。

そう考えた美夏は、スマートフォンのGPSアプリを起動させたまま、ゆっくりと、静かに歩を進め始めた。

最初は歩くような歩幅と速さであったが、次第にそれは早くなっ

ていき、アスファルトの路面を踏むテンポが上がっていく。

そして遂には、美夏の柔軟な肢体を駆使した、流れるような走りが、先を行く竜蔵たちを追走し始めていた……。

執行部のお仕事（5） 始まる事件（前書き）

今回も、急いでいるためチェックなしです。
すみません。

執行部のお仕事（5） 始まる事件

東野台大学付属高等学校から逃走を図り、一応無事に面倒事から逃れた二人は現在……。

「さて、次はどこだ？」

「本来なら、東野台の近くの学校に行く筈だったが……君が仕出した事によって、それも難しくなってしまうてな？」

「……いや、マジでゴメン」

第一区内で、東野台の地区に住む学生達が良く利用をする繁華街で、かなり遅めの昼食を取っている最中であつた。

二人がいる繁華街は、以前、竜蔵と美夏が入学式後に訪れた、二橋駅前の隣町に当たる場所で、第一区内にある学生が良く集まる街の一つなのだ。

良く集まる街といっても、学園都市の第一区内は、そこまで広い地域ではないため、こういった街は二橋駅前と、ここ“東野台駅前”にしか無い……。

しかし学区内にある学校数は、二橋学園や東野台大学付属高等学校を入れて12校ある。

そのため、こういった二つしかない繁華街には、連日学生達が押し寄せてくるのだ。

証拠に、周りを見渡しても制服・制服・制服だらけの、ある一定の趣味を持つ者達にとっては天国の様な光景が広がっていた……その代わり、カップルも多いため、現実を直視する事にもなるが。

また、先程から繁華街の説明ばかりしているが、二人が現在昼食を取っている場所は、学園都市外にもある、何の変哲もないハンバーガーショップの二階席だ。

二人は、その二階席の外を眺められる窓側で、二人用の席に向か

い合って座っている。

店内の内装は、ファーストフード店らしく、大人でも寛げそうな黒や赤などの壁紙に、そこまで明るくはない照明を使った、シックな雰囲気が漂ってはいるが……中に屯しているのは、その殆どが学生達なために、落ち着いた雰囲気は意味を成さず、少々騒がしい話し声が、其処彼処から聞こえてきていた。

「しかし聞き込みが、こんなに難しいものだなんて……」

対面に姿勢良く座る刀子から、嫌味の込められた視線を向けられた竜蔵は、ちよつとした話題転換を行なおうと、疲れた声音で先程までの聞き込みによる感想を述べた。

「ふん……まあ私も、そこまでこういった捜査活動はした事が無いからな。気持ちは分かるよ」

明らかな話題転換に、刀子は仕方ないと溜息を付きながら、竜蔵の言葉に同意を示した。

その刀子の様子に、竜蔵は意外そうな顔をしつつも。自身の前に置かれたトレイに乗っている、包装紙で包まれたテリヤキバーガーを手にとった。

「何を驚いた顔をしているのだ？」

竜蔵の表情に、刀子は不思議そうな声音で尋ねる。

「いや、てっきり、お前って、こういった事をするのが長いのかかって、俺は思ってたから」

言いながら、竜蔵はテリヤキバーガーを包んでいた包装紙を手馴れた様子で剥がしていく。

それを眺めつつ、刀子も自身の前に置かれていたフィレオフィッシュバーガーを手に取り、竜蔵と同じように包装紙を剥がしていた。

「別に……確かに私は、こういった事に関しては長いが。聞き込みの様な、情報というより、知略を使った行動は、あまり取った事がないのだ」

「……っていうと？」

包装紙を剥がした竜蔵は、そのまま一口、自身の口に片手で持っているテリヤキバーガーを運び、食す。

だが、対面に座る刀子は、包装紙を剥がすのに慣れていないのか？少々手間取った末、ようやくシツクリ来る剥がし方となり、竜蔵と同じようにフィレオフィッシュバーガーを、その小さな口で一口食した。

「むう、少ししょっぱいな……」

「まあ、こういったもんは、塩分がかなり高いからな、仕方ねえよ……っていうより、それが良いんだがな？」

「……連れてきてもらって悪いが、私には合いそうも無いな。一応、頼んだものは全部食べるが」

「味の濃い薄いは個人差だから、別に気にするなよ。それより、聞き込みはあまりした事が無いのか？」

ファーストフード特有の味が、どうやら刀子には合わなかったのか？

彼女は、その皺一つ無かった白い眉間を歪める。

しかし、そんな事よりも、竜蔵がテリヤキバーガー片手に話を進めた。

「そうだな、どちらかと言えば、私も荒事専門だったから、こういった行動は慣れていないのだ」

「荒事ね……それって、俺が今まで手伝いでやってきたのと、どう違うんだ？」

インテリア調の、少し小洒落た椅子に背を預けながら、大股開きで尋ねる竜蔵。

手伝い……それはもちろん、この事件に関与する前まで、竜蔵が立っていた執行部でのポジションの事だ。

なぜ、その様なことをしていたのかは、今は省くが。

大体、これまで竜蔵が執行部の手伝いとして行ってきた事は、本命の仕事の邪魔となる小事……つまり、雑魚を事前に散らしておく仕事の主たるものだったのだ。

それが、本命の仕事となると、どう変わるのか？

この時、竜蔵はただの興味本位で尋ねたのだが……。

「……正直、あまり話したくはないな」

気軽に行っている竜蔵の様子とは対照的に、刀子の表情が突然、神妙なものと変わった。

それを感じ取った竜蔵は、片手に持っていたテリヤキバーガーではなく、今度はトレイに乗っていた飲み物であるコーラを反対の手で取り、容器に刺さっているストローで一口飲んだ。

「そうか、なら別に話さなくて良いわ……いずれ、俺も知る事になるだろうし」

口に含んだコーラを飲んだ後、竜蔵から発せられた、特に気にした様子もない言葉に、刀子が驚いたように眼を見開く。

「知りたくないのか？」

当然の疑問……そう思っ、刀子は竜蔵に投げかけた筈だったが。「知りたくない、と言えは嘘になるけど。逆に、そんなにしてまで知りたいかと聞かれれば、別に知りたくも無いと答える……そんなもんだろ？ 興味本位の事なんて」

「……確かに、そうではあるな」

“ふっ”と、軽く吹き出すような含み笑いをしたあと、刀子はどこか、不思議と納得した感覚で、目の前の男の言葉を受け入れた。

そんな何をしてもし絵になる、優美な容姿をしている彼女を目の前にしながらも、竜蔵はトレイに乗っていたポテトを数本摘み、それを一気に口に入れる。

口に含んだポテトを、噛んでいる音を鳴らさずに、行儀良く飲み込んだ後、竜蔵は話を続けた。

「それに、言いたくない事ってのは、人それぞれ必ずあるもんだ……だから、俺も深入りはしない様にしてる。面倒ごとというか、長ったらしい相談とかされても、困るしな」

どこか悟ったような、目の前の男の物言いに、刀子は思わず気になり、声を返してしまった。

「君にも、そういった言いたくない事があるのか？」

その問いに、竜蔵はこれといって、特別な反応は見せず。

「無いように見えるか？」

「まあ、少なくとも何かに思い悩んでいる様には見えないな」

「そうか……そう見えるか」

と、自然に目の前の刀子とやり取りをして、すぐ横の窓へと視線を移した。

外には、こちらの店と、向こう側のアパレルショップを分断するかの様に、広い片側三車線の道路が、異様な存在感を放っていた……が、学園都市には移動手段として車は主流ではないので、そこには普通に歩行者が歩いていた。

だがまあ、たまに自転車や大学生の車、学校・学園専用のバスが走ってくるため、別に歩行者天国という程のものでは無いのだが……。

（うん？）

しかし、そんな学生による歩行者の多い人込みを、二階の窓から眺めていた竜蔵の視線が、ある一点で固定されてしまう。

そこには、一人の女性が立っていた……それも、周囲から男女問わず視線を独占するほどの、可憐な容姿をした人物。

だが、竜蔵はその女性を知っていた……というより。

（美夏ッ！？）

身内で、しかも妹の美夏であった。

人込みの中、ただ立っているだけでも周りとは一線を画した優美さを誇っている妹が、こちらに無表情の視線を向けたまま、何やら右手に持っているスマートフォンを弄くっている。

すると、竜蔵の制服のズボンに入っていたスマートフォンが、マナーモードでの振動を伝えてきた。

着信……目覚ましではなく、おそらくメールの知らせ。

直感で竜蔵は判断すると、そのまま視線を窓の向こう側で、未だこちらを見ている美夏に固定したまま、どこか緊張した面持ちで、

ポケットから震えているスマホを取り出した。

やはり着信として着ていたのはメールで、竜蔵はそれを手馴れた手つきで操作しながら確認する。

その時、窓の向こう側で、ずっとこちらを見ていた妹が、背筋の凍るような微笑を浮かべたのを、竜蔵は一瞬だけ見たような気がした。

そして、届いたメールを開き、竜蔵が読んだとき。

彼の頬に、一筋の汗が流れるのを、目の前で見ていた刀子が不思議そうに眺めていた。

開いたメールに書かれていた内容……それは。

『ソコニイルオンナハダレ』

全てカタカナの文面……。

この文面を妹が使う時……竜蔵は、その意味をよく理解している。

というより、骨身に染みている。

(怒ってる……やばい、完全にキレてるよ、美夏の奴！)

そう、この全部カタカナで表示された文面を、妹が使うとき……それは、彼女が本気で怒っている事の表しなのだ。

竜蔵は、このメールを読んだとき、“バツ！”と勢い良く、視線を窓の外の美夏へと戻した。

すると、そこには既に……。

——— “妹の姿は無かった” ———

◇

自身の兄を、全文カタカナという文面で恐怖のどん底に陥れた美夏は。まるでファーストフード店の二階にいる兄から身を隠すように、近くにあったアパレルショップに身を潜めていた。

それも、ごく自然に目当ての服を探しているかの様に……。

しかし、内心は直ぐにでも兄達のいる、ファーストフード店に乗り込み、あの見知らぬ女を、いま手に持っている赤いワンピースの様にしたいと、沸々と黒い感情を煮えたぎらせている。

だが、それをしてしまうと、また逃げられてしまう可能性があるため、迂闊な行動は取れなかった。

何故なら、実は先程まで美夏は、竜蔵たちに走り負け、追跡を一時諦めていたからだ。

当初は、あの得体の知れない女が兄の足を引っ張り、簡単に追いつけると踏んでいたのだが。どうやら東野台で見せた尋常じゃない跳躍の様に、あの女も相当な運動能力を持っていたらしく、美夏では追いつけなかったのだ。

それに歯噛みをしながらも、渋々GPSで再び兄の追跡に戻った美夏であったが、さっきの光景を発見して、遂に我慢の限界を超えそうになってしまったのだ。

（許せない、あの女……お兄ちゃんと昼食を外で取れるなんて、どれだけ私が苦労するイベントだと思ってるのよ？ たでさえ、一昨日の入学祝が久しぶりのイベントだったのに、あの女め）

外見上は、学校帰りに、自分に似合う服を楽しそうに探す可憐な美少女……。

しかし内面は、あのポツと出の女を、どう始末しようかと策略を練るヒットウーマン（殺し屋）といっても過言ではない。

すると、そんな隠された内面を見破れず、楽しそうな外見に騙された、一人の店員が美夏に営業スマイルで近づいてきた。

『よろしければ、試着なさいますか？』

こういった店に入っている限り仕方が無いが、鬱陶しいと思いつつも対応せざる負えない美夏は。店員に負けないくらい……という

より、圧勝してしまうほどの、小悪魔スマイルを内側を隠すために顔に貼り付けた。

「いえ、ちょっと色が気になったってだけです」

言いながら、持っていた赤いワンピースを元の場所へと掛ける美夏。

制服を着た女子高生にしては、垢抜けた仕草と、可憐さの中に、どこか大人びた雰囲気を持つ彼女に、アパレルショップの店員である女性は、思わず頬を染めて目の前に立っている同性を眺めてしまう。

流れるように、良く手入れの行き届いたストレートの黒髪……細く姿勢の良い腰つきに、スツと地面に真っ直ぐ伸ばされている長い美脚。また、それだけではなく、制服越しからでも分かるぐらいい形の良い胸が包容力を演出し、細く整った輪郭に、女性らしい可愛さと美しさを兼ね備えた顔立ちが、更に彼女の魅力を引き立てていた。

完璧……同性である身でありながら、そう眩かざる負えない容姿。そんな同性を間近で見た店員の女性は、（もしかして、モデルとかやってる娘なのかな？）と、勝手な当たりを付けていた。

しかし当の本人は、ショップの店員など一瞥した後、すぐに視線を外してしまった。

興味が無いのだ……ただ、それだけの理由だ。

だが店員は、その仕草も絵になるなと思いつつも、おそらくは“話かけるな”のサインだと相手の心理を察し、その場から静かに離れていった。

意外に、空気の読める店員だった様だ。

店員が去った後、美夏は再び、ショップの入り口付近の位置で、向かい側のファーストフード店二階の様子を探り始める。

まだ、二人は昼食を取っている最中のようなだ。

出来る事なら、今から乗り込んで妨害してやりたいところだが、先に言った通り、逃げられてしまっただけは元も子もないため、美夏は

二人が店内から出ようとする瞬間を待つ。

計画としてはこうだ……。

二人が二階席から出る——自身も動く——おそらく二人はゴミを捨てるために、少々時間をかけるだろう（どう見ても見知らぬ女は、ああいった店には慣れていない様子だったから）——その間に、向こう側の歩道まで走り、店の自動ドアの前で待ち伏せをする——二人がゴミ捨てを終え、店から出ようとした瞬間。（お兄ちゃんの腕に絡まってしまえば、もう逃げられない……そうなれば後は女の事を問いただし、いかに私がお兄ちゃんを愛し、そして愛されているのか突きつけてやれば、あれも大人しくなるでしょう）

パーフェクト 完璧……正に完璧な計画だ。パーフェクト

美夏があまりにも非の打ち所が無い計画だと、胸中で酔狂しそうになっていると。

「ッ!？」

突然、後ろから気味の悪い視線を感じたような気がした……故に、美夏が思考の世界から弾かれるようにして、後ろを振り返った。

しかし、そこには先程、話しかけてきたショップの店員や、数人の客しかいない。

気のせいか……と、頭を傾げそうになった美夏であったが。

フウウン——「?」

なにやら聞きなれない、小さな掃除機の起動音の様な音が、美夏の耳に入ってきた……が、それは本当に一瞬の出来事で、すぐに聞こえなくなってしまう。

モスキート音?

そんな事が真っ先に浮かんだが、どうにも音の種類が似た感じではなかった。

虫が飛んでいるというより、どこか機械的な音に感じたからだ。

何だったのだろうか、疑問に感じた美夏であったが、深く考えても分からないと、すぐに割り切ったため。その疑問は、すぐに頭の隅へと追いやってしまった……もしかしたら、ただの気のせいかもしれないと言い聞かせながら。

だが、ここで――――

（また、変な感じがする……）

先程感じた、気味の悪い視線と同じような、嫌な感覚が美夏を覆い始めた。

どこからだ、周りから不振がられない様に、視線を店中に彷徨わせる美夏であったが……。

（どこ？ この感じは、どこから来てるの？）

やはり、嫌な感覚を覚える視線の主は見つからない。

なぜ美夏がここまで、“視線”に対して敏感なのかと言えば。普段から、男性からの視線というものに慣れているという事もあるが……それよりも、実は美夏は、以前にストーカーの被害を二度受けた事があるのだ。

まあ、どれも同級生の男子が行っていた事で、当然、その二件とも兄に助けを頼み、解決してもらったのだが……度重なる被害で、自己防衛機能が発達したのか？

それによって美夏は、こういった背筋に嫌な感覚が走る視線には、非常に敏感になっていたのだ。

故に、感覚の察知に間違いはないと、美夏は自信を持って周囲に気を配れるのだが、やはり見つからない。

視線の相手は、どうやら非常に身を隠すのが上手い相手の様であった。

こういった場合、美夏は素直に近くにいる兄に助けを求めるのだが。今回は、そういった選択をするのは些か早計かもしれない。

なぜなら、もし助けを呼んだ場合、一緒にあの女も付いてきてしまう可能性があるからだ。

最悪の場合、あの女に恩というものを与えてしまうかもしれない

……。

それは非常に避けなければならない事だ。

理由は簡単……例えば恩を知らぬ存ぜぬで仇で返したとしよう。すると、もしあの女が兄と本当に親しい仲だった場合。美夏自身の悪評が、直接兄へと流れてしまう可能性が有るからだ。

逆に兄と、あの女が親しくなかった場合、そういった事は気にしないで恩を仇で返す気満々なのだが……その可能性は、二人だけでファーストフード店に入っているのを考えるに、低いと見ていいだろう。

だとすれば、この視線をどうする？

兄達のいる方向とは、反対側の、店の中央付近に意識を配る美夏は。上手く先程と同様に服を選ぶ振りをしながら、なんとか視線の主を探し出そうと、思考を張り巡らせる。

白を基調とした、清潔感の有る内装に、外からも中が見えるように壁の殆どがガラス張りになっている工夫が、とても現代的な印象を与えている店内には。現在、数名の店員と、8人の客が確認できる……その内、こういった気味の悪い視線を出せる男は、二人だけ。一人はレディース限定の品揃えに似つかわしくない風貌の、カジュアルな服装の男だが、どうやらコレは違うようだ……なぜなら、彼女連れで、先程から気持ち悪い程にイチヤイチャとバカップルぶりを発揮しているからだ——それでもまあ、自身の彼女よりも一線どころか、かなりの差を画している美夏には、何度か眼を奪われている様であったが。

なら、残るは一人……。

この店の店員で証の名札を着けた、背の低い男のみである。

背の低い男の店員は、先程から会計のレジで客を待っているだけののだが、どうにもチラチラと、美夏の方へと視線を向けてきている……。

(あ、目が合った……)

店内に視線を巡らせていた美夏と、店員の男の視線が合った。

しかし、それはすぐに外されてしまう……ショップの店員なら、服を選んでいる客の女性と目が合ったのなら、会釈なりなんりのアクションを取るはずだ。

だが、それは一切無く、店員は何事も無かったかのように視線を外したのだ。

怪しい……美夏の何だかよく判らないセンサーが、アイツは黒だと訴えかけてくる。

これは、一度店内を出たほうが良いのだろうか？

そう思い、美夏は手に持っていた服を、もとのラックに戻し、店の中心から踵を返し、店から出ようと出入り口へと歩き出した。

すると……（動いた！）

これまで、レジのカウンターから一切動こうとしなかった男の店員が、何やら従業員用の扉へと歩き出したのを、美夏は出入り口付近で一瞬だけ振り返って確認した。

休憩か、それとも別の何か……？

店員の男が、レジカウンターの向こう側にある従業員用の扉へ、どのような用事で向かっていったのかは分からないが。先程までの気味の悪い視線や、目が合ったときの仕草などを考えるに、多少の警戒はしておいた方が良さだろうと、美夏は店内から出ながら考えていた……。



妹から来た恐怖のメールについては、いま気にしても仕方が無い事……。

竜蔵にとっては、実際それでは済まないのだが。メールの内容どころか、彼の妹が窓の外にいた事すら気付いていない刀子にとっては、別に気にする必要も無い事に変わりは無い。

また、それよりも気になる事が、現在進行形で起きているために、竜蔵自身、妹から来たメールに気を取られている暇が無いのだ……。

「……ふん」

「気付いたか？」

「まあね、露骨過ぎるだろ」

竜蔵はそう言いながら、インテリア調の椅子の背もたれに、体重を面倒臭そうに預けた。

対面に座る刀子の表情は、先程までの和やかなものではなく、いつでも荒事を開始できるような、鋭くも凛々しいものへと変わっていた。

「さっきからか……客層がガラリと変わりやがった」

「釣れたと見ていいのかな？」

「多分、それで合ってると思う……けど、これは思ったよりも面倒になりそうだな」

二人は傍から見れば不自然な点など全く無い普段どおりのペースで、昼食であるトレイに乗った品を食していくが。その醸し出す雰囲気は、これまでのものとは違って、気の緩みなど全く無い、隙の無いものであった。

竜蔵は大口で残りを片付けていき、刀子は小さな口で少しずつ、上品に両手で持ったフィレオフィッシュを食べていく。

そして、竜蔵は自身が頼んだ全ての品を完食し、刀子も初めて食したファーストフードの味に戸惑いながらも、何とかそれらを完食し、ティッシュで口に付いた油を拭いた後、苦味の薄いお茶で口を直していた。

周りからは、そんな二人を睨みつけるかのように、数十人の男女が異様な雰囲気で、それぞれの席に座っている……どう考えても、普通の客の仕草、空気ではない。

竜蔵と刀子が座るのは、二階へと上がる階段から最も離れた、窓際の席だ。

故に、この異様な客層へと変化してしまった二階の空間を、確り

と見渡せる位置にいる。

また、それは逆も然りで、ガラリと変わってしまった客層の視線は、窓際の二人へと集中していた。

「ざっと見て、男8人に女4人……」

「君は、どちらを選ぶ？」

だが、そんな視線を集中させられていたとしても、二人に焦りも恐怖も無い。

むしろ、睨んでくる連中全てを値踏みするかのように、二人で不敵な笑みを浮かべている。

好戦的な……それでいて、どこか落ち着いた雰囲気を持つ二人の居住まいは、座っている姿勢は対照的ではあるものの、やはり似ているものがあつた。

竜蔵はポキポキと、片手で器用に指の関節を鳴らして、拳という名の箱を整えていく……刀子は、後ろの壁に立て掛けていた、木刀の入った竹刀袋を静かに手に取り、ゆっくりと座っている膝の上に置いた。

「男だ」

「なら、私は女人が相手というわけか……」

短く役割分担を終えた後、竜蔵と刀子は各々立ち上がると同時に、椅子の下に置かれていた学校指定の鞆を肩に掛け、片手で包装紙などのゴミが乗った、机の上のトレイを手にとると。何事も無かったかの様に、それら昼食で出たゴミを、近くのゴミ箱で分別しながら捨て、この二階の空間から出ようとした……。

すると、そんな二人に合わせるかのように、二階の席で座っていた者達が一斉に立ち上がる。

二人は、その様子を振り返ることなく音だけで確認し、そのまま二階から一階へと下り、店の自動扉を出て、ファーストフード店を後にした。

そして同じく、先程まで二階に座っていた者達も、ゾロゾロと竜蔵と刀子の後をつけながら、店を出て行く。

「その協道に入れ。確か、そこなら人通りも少ない、広い場所へと出られた筈だ」

学生達が行き交う、片側三車線ある大通りを歩きながら、刀子が隣にいる竜蔵に指示を出す。

しかし、竜蔵はこれに眉端を吊り上げる。

「広い場所でやるのか？ それはキツインじゃないか？」

多対一をやる場合、なるべく一対一の状況を作り出さねば、後ろからの襲撃も当然あるため危険だ。

それは、こういった世界を少しでも渡った事がある者なら、誰だって知りえている心得……。

竜蔵は、この考えの下、刀子の“広い場所でやる”という、少々無謀な提案に疑問を覚えたのだが。

「構わない……第一、私の得物は狭いところでは振り回しづらいからな」

「そうか、なら別にいいか」

多対一で、手っ取り早く一対一……もしくは、それに近い状況を作り出すには、狭い路地を選ぶのが最適といえる。だが、それは武器など無く、素手のみで闘うといった場合だけ有効な手段なのだ。

しかし、普通の神経をしている者なら、数十人いる相手に対していくら二人いるとて広い場所でやろうとは考えはしない。

そう考えた竜蔵は、すでに切れ長の、“刀の様な眼”を鋭く研ぎ澄ましている刀子に向けて、口を開こうとした……が。

「確かに、いくら二人とて、多勢に無勢の状況で広い場所を選択するのは愚考と言える」

「……だろうな」

口を開こうとした竜蔵よりも先に、刀子が前を見据え歩きながら、その考えを読んでいたかのように言葉を遮った。

竜蔵は、言葉を遮られた事など気にせず、前を見据えながら刀子の言葉を聞くことにした。

「しかし、今日の目的は陽動と、もう一つあった筈だな？」

「確かに、あったなそんなの」

今回の陽動を行なうと決めた際に、事前に木佐貫千代女きざぐぬま ちよめから聞かされていた事。

それは、今回の聞き込みが犯人を焦らせる陽動である事と……そして、竜蔵に執行部での動き方を教え、刀子に武術的な成長を促すために、荒い闘いというものを経験させるといったもの。

改めて目的を思い出した竜蔵は、隣を歩く刀子と共に、人通りが多い大通りから脇道に入っていた。

同時に、刀子が竜蔵に視線を向け、楽しみといった声音で――――

「今日は勉強させてもらうよ？ “竜蔵”」

「見てて気持ちのいいものじゃないと思うが……まあ、勝手にしろよ」

脇道へと入ったあと、竜蔵は日中にしては薄暗く狭い裏道だと最初は思ったが。少し歩くと、目の前にコンクリートの建物と建物の間にポツカリとできた、都会の隙間の様な、正方形の広い空間へと出てきた。

なるほど……これは御あつらえ向きの場所だと、思わず声を漏らしそうになったが。

それは、後ろから聞こえてくる数十人の足音によって、口に出される事は無かった。

（さて……久しぶりに、真面目にやってみますかね）

今日は、これまでの手伝いとは違って、見学の者がいる。

故に、恥ずかしい姿は見せられないと……。

竜蔵は珍しく、こういった場面で真剣な顔つきになるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403w/>

仁義なき妹【改訂版】

2011年11月16日03時21分発行